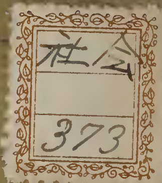

社会
373





5

9.15

至友人來是到，如今，為此這文字

此係故人中的書，讀後多有了



科學的社會主義序論

ユリアン・ボルハルト著

水谷長三郎譯



東京・同人社

1923




LC Control Number
00 470705

譯者序

本書は、ユリアン・ボルハルトの『科學的社會主義序論』(Julian Borchardt; Einführung in den wissenschaftlichen Sozialismus, 1919) の全譯である。

私が本書を譯了したるは、大正十年の七月頃である。當時私は、京都帝國大學を卒業して直ちに大學院に入り、大原社會問題研究所の囑託となり、先きに上梓されたるツガン・バラノウスキーの『唯物史觀批判』の飜譯に從事する傍ら、私一個人の仕事として本書を譯したのである。さうして恩師河上先生の御一讀の後直ちに上梓する筈であつたが、先生は該飜譯に幾多の誤解や誤譯のあることを指摘され、今一度綿密に譯し直すやう懇々と言つて寄こされた。當時私は比叡山上にあり、直ちに改譯に從事し、その完成を見たるは約一年半ほどの昔であつたが、その後都合に依り本書の翻譯は同人社書店より出すことになり、以て今日に及んだのである。

本書は其名の示す如く、科學的社會主義の序説である。そは極めて簡略に敎義を説明するに過ぎないものであるが、而も斯くの如き分量の類似の他書に比する時は、遙かに勝れたる良書である。固より、自己の學識を誇らんがため、簡明を避け事物を殊更に難しくする所謂學究とかには、何んの價値なきものであるかも知れない。またマルクスからクロポトキンへ、それラッセルだ、アインシュタインだとはしやぐ輕薄なる我國の知識階級に取つては、今時『科學的社會主義序論』なんて、實に以て時代後れのものであるに相違ない。けれどもまだ我國には、此書に依つて何等かの利益を受けるところの人ゝが、必ずや相當に存することであらう。さうして其人こそは、譯者の竊かに狙つてゐるところの人々である。

本書は章を分ちて十章となす。そのうち第九章及び第十章は、嘗て河上先生が『社會問題研究』に其の抄譯を掲載され、また第二章、第三章、第四章は、その全譯を嘗て私が雜誌『我等』に發表したことがある。さうして全般を通じ、河上先生

の御助言に負ふは勿論であるが、殊に第三章、第四章、及び第八章は先生自ら加筆せられ、また第九章及び第十章は、先生の抄譯を大體に於て借用することにした。その結果、本書の全般を通じて、巧拙處を殊にし、恰も木に竹を接いだやうな個所が所々に散在するであらうことは、今の私の力としては止むを得ないことであつて、先生並に讀者諸君に取り誠に相濟まぬ次第である。

終りに臨み、私は本書を譯するに當り、多大の御盡力をして下さつた恩師河上先生、並に大原社會問題研究所の二三の先輩諸氏例へば高野先生や權田保之助氏に對し、心からなる感謝の念を禁じ得ざるものである。

大正十二年三月二十七日

京都市外伏見町東本願寺別院にて

水谷長三郎

科學的社會主義序論　目次

緒　論……一
第一章　何故に社會民主々義者は存在するや……一
第二章　心的改造か物的改造か……五一
——善意並びに悪意に付いて——
第三章　資本主義的生産の本質……六六
第四章　空想的及び科學的社會主義……九二
第五章　經濟史（その一）……一〇四
第六章　勞働の社會化……一二九

第七章　經濟史（その二）……一六三
第八章　發展の概念——階級鬪爭……一七二
第九章　社會主義の未來國（その一）……一九五
第十章　社會主義の未來國（その二）……二一九

科學的社會主義序論

緒言

一九一八年に於ける獨逸の十一月革命以來、『社會主義』及び『共産主義』なる二つの概念の間に、一の愼重な差別が造られしは尤もである。何故といふに、獨逸の社會民主々義は、世界戰爭や革命を通じての彼等の態度に依り、社會主義なる名稱の上に拭ひ去ることの出來ない恥辱を負はしめたから。だから、社會主義に對し、群集を誘惑するための看板としてよりも、又群集を利用するための踏臺としてよりも、ヨリ以上の意義を認めてゐた總ての人々には、――卽ち社會民主々義の昔の努力と理想とに眞面目に共鳴した所の總ての人々は、『社會主義』なる名稱を拋棄せねばならなかつた。斯くて彼等は昔の名譽ある『共産主義者』なる名稱に立ち歸

つた。彼等が守護する所のものは、既にマルクス及びエンゲルスが一八四七年に共産主義と名づけ、〔註二〕さうして其後二三十年の間、主として『社會主義』と呼ばれてゐたものに外ならない。實のところ、此等二つの言葉の意義は全然同一である。只だ獨逸の社會民主々義者が此の事實に裏切りつゝも、而も猶その名稱を維持して居つた故、今や彼等は、自分たち以外の人々、卽ち正に現代の共産主義者その者が、社會主義と掛離れた一の新たな敎義を考へ出したかの如くして仕舞つたのだ。

【註二】Kommunistisches Manifest, Ausgabe von 1906 (Berlin, Vorwäts=Verlag), S. 22 を見よ。

『社會主義』なる言葉を、一の政治的黨派の利益のため、斯くも惡用するを是認すると云ふやうな事例はなく、又或る科學的論著に於て斯くの如き惡用の理由が載つてゐると云ふ譯でも無い。されば以下述ぶる所では、『社會主義』なる言葉をば、獨逸の官僚的及び十一月社會主義者が現今用ひつゝある表示に少しも顧慮する所なく、寧

ろ此の言葉の有する本來の正しき意味に於て、卽ち全く共産主義と同意義に於て用ひたのである。

序でながら此書で述べる所は、著者が世界戰爭に先立つ凡そ十五年前　獨逸社會民主黨の當時の首領の委任を受けて、社會主義の教義並びにエルフルト綱領の摘要として、社會民主黨の學校で說述したる說明及び思想過程以外には、何物も含まないと云ふことを陳べて置かねばならぬ。だから或る程度までは、當時通用したるところの、『公式に檢了されたる』社會民主々義の科學である。此の限りに於て、今日の社會民主々義なるものが、その『公式に檢了されたる』科學が戰前に教へたところより、如何に遠く掛け離れたものであるかを示す所の標準として役立つことが出來る。

ベルリン——リヒターフエルデ、一九一九年七月十五日

ユリアン・ボルハルト

第一章　何故に社會民主々義者は存在するや？

一九一八年十一月革命が勃發するや、獨逸では非常に澤山の『社會民主々義者』ができた。有らゆる家々には赤旗が翻へり、宮内官は熱狂のあまり紋楯を捨てゝ共和國の記號をつけ、又無數の人々は、突然に社會主義者に成つたことを服裝の上の赤い印しで示すことは、只わけもなく必要だと考へた。やがてこのやうな狂熱狀態は冷めて、兵營や博物館や官省の上に飜へる革命の赤旗は、再び傍らに黑白赤の三色旗を掲げることを許さねばならなく成り、終に赤旗の方が三色旗のために全く消え去つて仕舞つた事は、まるで喜劇のやうであつた。けれども上述の外形上の事柄とは無關係に、獨逸の國務が革命のため著しう回轉して、恰も革命以來吾々の國家その物の公の名稱が『獨逸社會共和國』と呼ばれてゐる如く、全然社會主義の方向へ歩み寄つて仕舞つたのは、どこまでも動かない事實である。だから、社會民主々

義者が何を欲するかと云ふ問題は、今日では直接實際的に重要なものとなつた。果して獨逸が社會主義的な團體となるものとせば、それをどの方向に導く可きかを檢討するは各人の義務である。

戰爭前に於ては、社會民主々義者は、國權を維持する階級の人々から非常に嫌はれてゐた。一般に人々は、何うして社會民主々義者が存在し得るかを徹底的に理解することが出來なかつたので、彼等は、事物を輕信する勞働者の大多衆が、常に暗い不純な目的を追ふ人々の、不誠實な煽動の犧牲に落ち入つたのだと假定し、やつとお茶を濁してゐたのである。國權を維持する階級の人々に於て、社會民主々義の發生が何う考へられて居つたかは、數十年このかた此の問題に關して、社會民主々義者の反對者が爲した總ての議論が記載されてある所の、一の敎科書〔註二〕から引用された次の章句が示してゐる。即ち、

『賃銀の增加と共に、（勞働者階級の）衣食住も改善されたが、それにも拘らず大

抵の勞働者は幸福にならない、と云ふのは、彼等は儉約性に乏しく家事に疎いからだ。享樂欲は無限に增大し、年々獨逸にて酒や麥酒や火酒のため支出される額は總ての租稅の金額よりも多いのである。此の如く快樂を追求する人間の心を利用して、勞働者よ！　お前達は斯くも不滿足な境遇に安んずるかと煽動するは、不誠實な人々の容易く爲し得る所となつた。かくて二三十年以前から社會民主黨と稱して、神を恐れず、カイザーを恐れず、祖國を輕んずる一の黨派が成立したのだ。彼等は基督敎と主權とを排除しやうとする者だ、彼等は總ての階級別を廢除して、一年の全收入を平等に分配しやうとする者だ。彼等社會民主々義者は、此の及びもつかぬ目的を達成するためには流血さへも厭はないであらう』

と述べられてある。

【註一】ドルトムンドの教師ヴィシユマイヤーとストルクとの共著にかゝる、プロテスタント小學校用の歴史の教科書（Gütersloy, Bertelsmann, 1897. S. 100—101）に據る。

右の章句は、勞働者階級に多大の尊敬を拂ふものだと云ふことは出來ない。確かに其處では、勞働者全體が、浪費者と醉拂ひとの群れとして、且つ子供の如く極めて不誠實な煽動者の云ふが儘になる者だと話されてゐる。それだけ小學校の子供たち、卽ち勞働者の子供たちは、斯樣な方法で自分等の兩親に反抗すべく煽動されたのだ、と云つても不當ではなからう。宗敎の時間では、『お前達はお父さんやお母さんを尊敬せねばなりません』と敎へながらも、歷史の時間になると、一樣に子供達の兩親に對する尊敬心を破壞して仕舞ふのだ。斯くて學校そのものは、階級國家の凡ゆる制度と同樣に、無產者階級に對する有產者階級の楯として利用されたのである。

が、それは扨置き、上述の敎科書の章句には、有產者階級が、社會民主々義發生の根本的原因と看做した所のもの、卽ち勞働者の不滿足と其れを充さんとする熱望とが示されてある。それは事實正しい見方だ。若し勞働者達が充されてゐるならば、

彼等は何物も熱望しないし、從つて此世には社會民主々義は發生しない筈だ。

若し社會民主々義の本質と其の努力とを認めやうとするならば、吾々は何は扨て措き、勞働者の不滿足と其れを充さうとする熱望とを、もつと精密に觀察せねばならぬであらう。そも〳〵勞働者は何に不滿足であるのか？　何かゝ何物を彼等は要求するのか？

此の疑問に對しては、何人も直ぐさま返答することが出來る。曰く、勞働者は全境遇に對して不滿足であり、彼等は其れを變更し且つ改善しやうと望むのだ。

併し、此の返答はあまりに漠然としてゐる。吾々はもう少し精確に、勞働者の全境遇を觀察せねばならぬ。

勿論此の場合、勞働者階級の境遇に關して一の完全な描寫を與へるは、必要なことではない。【註二】それらは讀者に取つて十分知られてゐる筈だ。勞働者の境遇のどんなものであるかは、既に讀者の知れる所の事實をば、二三のぞんざいな見本に

依つて、讀者の前に示せば十分である。疑ひもなく、吾々は戰爭前の狀態を考へてゐる、何故なれば、戰爭のために惹き起された生活標準の低下は、ずつと以前から起つてゐたところの、社會民主々義の發生に對し何の關係も無いからである。

【註二】勞働者の境遇に關する著述は、既に Engels, Die Lage der arbitenden Klassen in England (1846) から Werner Sombart, Das Proletariat (1905) に至るまで、かなり多數に存在してゐる。

一九一三年プロシヤ【註三】では、(總人口四千萬餘の中) 殆ど千六百萬の人々が、自己の一定の所得を有してゐた。彼等は所得高によつて次の階段に分類された。

年收 (單位マルク)	人數	
900以下	約 8 100 000＝	總數の約50 1/2パーセント
900—1200	〃 3 200 000＝	〃 20 〃
1200—1800	〃 3 300 000＝	〃 20 2/3 〃
	14 600 000	91 1/6パーセント

1800—3000	約	580 000=	〃	32/3パーセント
3000—6500	〃	600 000=	〃	32/3
6500—9500	〃	94 000=	〃	2/3
9500—30500	〃	104 000=	〃	2/3
30500—100000	〃	22 000 } =	〃	1/6
100500以上	〃	5 000 }		
		1 600 5000		100パーセント

【註三】 プロシヤ政府の統計年鑑（一九一三年）二八七頁以下。

勿論、此等の數字が完全に正當でないことは、吾々が安んじて認め得るところである、何故と云ふに、大抵の人々は租税申告の場合では、自分等の收入をあまりに低く評價するから。【註四】さうして吾々自身が、事實國民の一乃至二パーセントは、上掲の統計表が示すよりも多くの所得を有すると云ふことを認めるならば、其他は上に掲げた其の儘の表としても、十分に吾々を嚇しつけるに足るのである。

【註四】　序でながら　此の場合には一の除外例がある。プロシヤでは既に數年このかた、從つて上揭の統計表が造られた一九一三年には、企業家をして自己の使用する勞働者の賃銀を正當に稅務官廳に報告せしめる所、法律が發布されてゐた。彼等には勞働者のために重い懲罰に服する理由は毫も無かつたので、三〇〇〇マルク以下の微細な所得は、反つて租稅統計に正しく申告されてゐると認めなければならない。

上述の表によると、プロシヤ人の殆ど半數そこ〳〵は、一年九〇〇マルク以下で生活せねばならなかつた。それは各個人の生活費でなく、一家族全體の生活費である。一年九〇〇マルクと云ふと、一週に見積れば一七・五〇マルク足らずである。既に一九一三年では、これしきの金額で何を買ふことが出來たか！　此の數字を一瞥すると、國民の半數が赤貧に苦しんでゐたことが分る。此の際、吾々の忘れてならぬことは、かの人達が總て一週に約一七・五〇マルクを得るのでなく、租稅統計は、その所得が九〇〇マルク以下の者をも總て平均しての結果である、と云ふことだ。彼等の中には、三〇〇マルクにも達しない人々がある。

かやうな文字どほりの赤貧とまでは行かなくても、更に國民の五分の一は、似たり寄つたりのものである。全く國民の二〇パーセントは、九〇〇マルク乃至一二〇〇マルクの所得である。此の際また、一二〇〇マルクの最高額を彼等の全體に當嵌まる所の標準としたならば、(それは既に眞の物的關係をあまりに都合よく表示するものだが)、一週の收入は二三マルクとなる。

そこで前二者を合せて見ると、國民の約七〇パーセントとなる。だから一九一三年では、いつも百人に對し七十人までが、一週二三マルク以下の收入であつた。

今吾々は、一九一三年に於て、これしきの金額で何を買ふことが出來、又どんな生活が出來たかと云ふ問題を一瞥して見やう。

一九一一年以來リハルド・カルヴアーは、此の問題に説明を與へるところの、一の統計をやつてゐた。彼は規則正しく各週毎に、獨逸の殆ど二百個の場所より生活資料の價格を蒐集し、さうして戰前一人の獨逸海軍兵士が日々食ふ所の食量を基

礎として、その三倍は、夫婦と二人の子供から成る家族が、只滿腹するため日々食物として消費する所の最少のものだ、と假定してゐる。これは云ふまでもなく非常に低く見積られてゐる、蓋し此の場合では、各子供は大人の半分しか食はないと云ふ、誤つた前提に立つてゐるから。十二歳から十四歳へかけての子供は大人の半分以上を食ふは當然のことで、二人以上の子供のある家族は、若し皆が滿腹しやうとするならば、固よりもつと多くの食料を必要とする。だからカルヴアーの見積つたのは極く節約した最少分量であるが、それだけでも一九一三年の一月では、一週二六・〇一マルク掛かつたのだ。が、此の價格は段々下つて行つて、一九一三年の十二月には、一週二五・四六となつた。そこで此の一年中の價格を平均すると、一週二五・六九マルクになる。

卽ち、一九一三年の五十二週の月日に於て、僅か四人暮しの一小家族が只腹を一杯にするには、飮み食ひだけに一三三六マルクの金額を支出せねばならなかつた筈

である。が、吾々はたつた今、プロシャ國民の七〇パーセント――これは住民總數の殆ど四分の三である――は、一二〇〇マルクの取得さへもなく、而もその中から衣服、住居、熱料、掃除、燈料などの如き、飮食以外の總ての生活欲望にも支拂はねばならぬことを看取した。若し吾々が總て此等の、飮食と同樣に必要欠くことの出來ないものをも勘定に加へ、さうして其等には食費の半分だけを見積るならば、一九一三年に於ては、質朴な生活をするにも一八〇〇マルクの所得が必要であつた、と云ふことになる。プロシャではその國民の十分の九以上――即ち九十一パーセント六分の一――は、これだけの所得を有して居らなかつた。さうして獨逸聯邦の他の諸國に於ても、プロシャに於けると同樣の事情である。それはザクセン、バイエルンなどの政府の統計書を見れば、容易く分ることなのである。

だから吾々は、獨逸國民の大多數の者　卽ちその十分の九以上の者が、赤裸々の生活に必要なだけの取得がない、と云ふ悲しむべき結論に達する。

或はひよつとすると、吾々はあまりに惡く書き過ぎたのではあるまいか？　吾々は——社會主義的の『煽動』に乘せられて——書き過ぎたのではあるまいか？——否、悲しいことには、このやうな事柄が實在することを示す文書は澤山にある。

一九一〇年十月廿九日、ベルリン日々新聞は、市會議員カール・ゴールドシュミットの一文書を發表した。ベルリン日々新聞は自由主義の新聞紙であり、ゴールドシュミット氏は、『ヒルシュ＝デユンケルシュ』職業組合——勞働者を社會民主々義の影響より遠ざけるため、彼等を非社會主義的組合に集合せしめることを、正にその目的とするところの——組合長であつた。當時、ベルリン市の街路掃除人より成る『ヒルシュ＝デユンケルシュ』支部は、市廳へ賃銀値上を嘆願し、その根據として多數の家計簿を呈出した。此の家計簿に依り、ゴールドシュミット氏は次の如き報告をしてゐる。

『最初に揭げる概算書は子供のない家族に關してゞある。主人は一日に付き四

一五マルクを收得し、さうして賃銀は一週間を七日として支拂はれるから、彼れの年取得は一五一四・七マルクになる。一週間の支出總額は肉四・三〇マルク、パン及び饅頭類三・一〇マルク、コーヒ〇・九五マルク、砂糖〇・五六マルク、バター一・五〇マルク、ミルク〇・九三マルク、野菜〇・九〇マルク、切リ肉二・七〇マルク、豚脂一・〇五マルク、馬鈴薯〇・六〇マルク、洗濯具〇・七五マルク、燃料一マルク、石油〇・三〇マルク、剃髭〇・一〇マルク、燃燒物〇・〇六マルク、妻の生命保險〇・三〇マルクである。一年の支出總額は家賃三〇マルク、靴修繕料七〇マルク、衣服及び洗濯費七五マルク、火災保險及び埋葬金五マルク、疾病保險及び養老保險三六・四〇マルクである。此處では新聞紙のためにも、又娯樂、煙草及び麥酒、會合などのためにも、只の一ペンニヒも記載されて居らないが、それでも支出總額は旣に一四七九・六〇マルクに達し、全收入は僅かに三五・一五マルクしか殘つて居らない、此の僅かの殘額で、その他の支出をやつと充

してゐるのだ。又上掲の必要欠くべからざる生活欲望に對する支出額は、全然少なく見積られてゐる。だから何か他のものを買はうとする時に、若しその代金が妻の内職で調達できないならば　忽ちその代金に欠乏する。

『子供のある家族の生計はもつと苦しさうである。今その概算を語らんとする家族には、七才と十才との二人の子供がある。主人は一日に付き四・六五マルクを儲けるから、一年を三百六十五日とすると　一六九七・二五マルクになる。一週間の支出總額は、饅頭類及びパン（四ブロートを五〇ペンニヒとして）四・八マルク、ミルク（一日一リートルを〇・二二マルクとして、一・五四マルク、肉（二分の一ポンドとして）二・八〇マルク、肉片二・一〇マルク、野菜及び莢豆一・四〇マルク、馬鈴薯〇・八〇マルク、コーヒ〇・六〇マルク、砂糖〇・二五マルク、融脂及びバター二・二〇マルク、碾割及び香物〇・四二マルク、石油〇・三〇マルク、燃料一・〇〇マルク、擦附木〇・〇六マルク、石鹼〇・一〇マルク、

四週間毎の大仕掛の洗濯が一年一八マルク、剃髭調髮、煙草其他が一週一・三〇マルク、主人の小遣ひ錢が一週二・一〇マルク、疾病保險及び養老保險が一週〇・七七マルク、生命保險一マルクである。一年の支出額に關しては、家賃二六四マルク、埋葬金及び火災保險五・四〇マルク、稅金三二・八〇マルク、夫婦及び二人の子供の靴——靴具の支給と共に靴墨及び革脂を含んで一一二・二〇マルク、家計簿類及び子供の敎科書二〇〇マルク、組合費四・八〇マルクが記載されてゐるから、其の支出總額は一八六一・二八マルクに達し、一六三・九三マルクの缺損が生ずる、これは又、子供のある世帶として出來るだけ、妻の共稼で補償されねばならぬ。此の概算書は、家族員の完全な健康を條件としてゞある、との言葉で結ばれてゐる。これでは、とても病氣の起る餘地がないであらう。』家父は偶に日曜日には、妻子と共に郊外で過すこともあらうし、偶には音樂會や芝居に行くこともあらう。又果物の一つも食べることもあり、その他色々の支出がある。

さう云ふ時、此種の支出は衣食の方で節約されねばならぬ。

『吾々は今もう一つ、十一人の子供のある家族の概算を說明しやう。主人は日々四・四〇マルクを儲けるから、彼は一六〇六マルクの年收を有つてゐる、一週間の支出總額は肉九・四〇マルク、パン及び饅頭類七・〇〇マルクであるから、此の二つの總額だけでも、旣に一年八五二・八〇マルクに達してゐる。家賃は三三〇マルクだ。一年の支出額は全體にて二五八八・四六マルクを要するから、卽ち九八二・四六マルクの缺損が生じて來る。玆では、總て十一人の子供が兩親の世話にならねばならぬか、それとも其の中の幾人かゞ旣に生計の足しになり得ると認められないかは、なんとも云つてない。妻は何時も共稼をするわけにいかないし、それかと云つて、上述の缺損を支出額の制限で補ふことは、固より出來ない相談だ。主人は云ふまでもなく、全然端正であらねばならぬ、何故なれば、彼れの小遣ひ錢は一日たつた一〇ペンニヒであるから。…………

『賃銀は一寸目には決して低くないやうだが、併し家計上の事實を見る時、只だ何うしても欠くことの出來ない費用を支出するため、如何に總てのものが節約されねばならないかゞ明かである。

『勿論、老後のために少しの準備金も造る必要がない事情は、以上の事柄を多少緩和する、何故なれば都市の勞働者は、全く官吏の年金規則に倣つて、自分には年金を、又寡婦や孤兒には扶助料を獲得することになつてゐるから。

獨逸職業組合長

市會議員　カール・ゴールドシユミツト

次に吾々は上掲の統計表に於て、比較的多くの取得を有つ人々の數を調べて見やう。先づ、一八〇〇マルク乃至三〇〇〇マルクの取得を有つ者が、三パーセント三分の二（四捨五入すると、四パーセント）ゐる。彼等は一九一三年の物價では、丁

度腹一杯に食ふだけのものを有ち、着ることが出來、又自分等の居間を暖めることなどが出來た、約言すると、彼等は丁度必要なものだけを有つてゐた、併しそれ以上は少しの餘裕もなかつたのだ！　又彼等に於ては、生活の享樂とか、生活の特別の愉快及び喜びに對しての金錢でも支出することなんかは、てんで出來ない相談であつたから、國民全體のまる九五パーセントは、純然たる無產者の生活を送らねばならなかつたのである。

併し、其他の五パーセントの人々でさへも、その殆ど大部分は、やつと無產著的生活の境を少しばかり飛び越した所の、階級に屬してゐた。彼等は、三〇〇〇マルクから六五〇〇マルクまでの取得を有つ三パーセント三分の二の人々である。彼等には、その一部分の者が旣に指導的地位に達してゐた所の、中年輩及びそれ以上の年輩の使用人や、官吏や、又は商家の支配人などが屬してゐた。彼等の總ての者は、丁度其時〳〵の生活の要求には事欠かなかつたが、若しも長病ひや失業などの、一

寸した不幸に出喰はせば、忽ち自分等の全生活を破砕されて、何處から自分等のパンを得るかを知らないで其日〳〵を送つて行く、大軍の中へ捲き込まれて仕舞ふのである。

玆に始めて、年取得六五〇〇マルク以上の階級が問題となる。此の階級の人となつた以上は、最早や一片のパンを食ふに就けても、他の貧しい階級の人々のやうに、果して此のパンを食うてよいのであるか何うか、明日も亦此のパンにありつけるか何うか、と心配さうに尋ねる必要はない。が、左様な人々は吾々の知る如く、國民のたつた一パーセント二分の一、卽ち二百人每にたつた三人の割合だ！　しかも本當に富める人々――それは、年取得三〇五〇〇マルク以上を有つ所の人々である――の數は、六分の一パーセントそこ〳〵であり、卽ち六百人に對して常にやつと一人の割合である！

* * *

今まで吾々は主として數字に依つてのみ說明して來た。けれども數字のみを算へ立てるのは各人の能でない。只だそれのみでは、各人は明白な觀念を讀み取ることが出來ないから、吾々は其の補助として、もう一つ他の手段を取ることにする。世には、勞働者生活に關し、信用すべき多くの記述がある。吾々は此等の記述に依つて、吾々の主張を維持しやうとする者である。而も此の場合、吾々は所謂『煽動者』や社會民主々義者を證人として呼び出すのでなく、寧ろ『國權を維持する所の』意向に就いて何んの疑問も挾まないやうな人々のみを呼び出すのだ。

少し以前に故人となつたベルリン大學敎授パウルゼンは、哲學上の一論者を公にしたが、彼はその中で、富者と貧者との生活關係を述べてゐる。【註五】勿論　吾々が玆に引用し得るのは、彼が述べた極く僅かの部分だけである。先づ富める者に就いて、彼が述べし所を讀んで見やう。

【註五】 Friedlich Paulsen, „System der Ethik.“ Berlin 1903, Cotta, 6. Auflage. Band II, Seite 351 bis

（三七〇頁）『……（富者の近世的家屋に於る）敷物を敷きつめた廣い晴れやかな階段の傍に、吾々は屢々『主人のためのみに』と云ふ、一つの注意すべき題詞を見るであらう。之れは、此の家には人間の二つの階級、卽ち主人と召使とが棲んでゐることを示す。召使のためには、中庭の上に通路が掛けられてゐるし又裏手の階段がある。このやうなことは、十八世紀の有產者の家には未だ知られて居らなかつた構造である。棲居も家屋のとほりである。部屋には、少くとも前室には、古風の壁布の代りに優美な壁板や革掛毛氈を、又寒さうな白い陶土煉瓦製の暖爐の代りに煙突とマジヨリカ燒の暖爐とを、見るであらう。彫刻された室內裝飾器具、繪畫及び樂器、磁器及び銀の食器は、『有產者的』住居の設備としては珍しくない。五十年以前に祖母が誇りし美術品は、孫——序でながら、孫は祖母と同じ社會階級の上に立つてゐるのだ——が有つ最近の裝飾品の傍では、如何に素朴に見えることよ。吾

々はまた忘れずに、男女の友達から若い夫婦に贈られる所の婚禮の進物を考へて見やう。彩色された皿、彫刻された蓋ひ物、模様の散らされた小箱、燒木にされた小枠、刺繡された繪畫、織物にされた日覆と敷物、その他種々の優美な贈品は各人に役立つことは事實だが、併し實際的の使用には少しも役立たない。……』

『……生活方法は家屋の構造に適應する。彼等は宴會や舞踏會や晩餐會を催し、その都度人手を借りることになる、彼等は又毎年夏に温泉旅行をやる、總てこれらは「有産者の」家族が爲すべき社交上の禮儀的義務に屬してゐる。……』

『獨逸の至る所の山邊と海邊とには、大なり小なりの集團となつて、突然に多くの都會風の家が建てられた。之れはベルリンや、ハンブルグや、ライプチッヒや、ミューヘンの富有な家族が、自分で建てたり又賃借して棲まふ所の夏別莊である。三十年前は、此の邊はまだ森や牧場であつた。』

（三七二頁）『次に吾々は此の事情を他の側面から觀察して見やう。資本家の社會

的集團は、他の一つの…………集團に對立する、卽ち何物をも有たざる所の、大都市に住居する大工業の勞働者の集團に對立する。……』

(三七七頁)『近世の勞働者は、都合よく有福に暮してゐる時でも、彼は猶ほ無一文者であり又隷屬者である。彼は其の全生存を擧げて、一人の雇主の意志に隷屬するその一つの言葉、一つの瞬きは　何時にても隷屬者をして職を失はしめ、彼れの食道を斷つことが出來る。………勿論、雇主は資本を失ふ譯にいかぬ、それを失へば、彼はいつでも突然に、自己の全生存の破滅に曝らされるのである。………』

(三七八頁)『工業勞働者に取つては、彼れの全經濟的進路が最初から明かに示されてゐる、彼は恐らく二十歲か二十五歲で最高の賃銀を得、さうして旨くゆけば、初老の頃まで同じ仕事を繰返しつゝ、同額の賃銀を得るであらう、彼れの全境遇を改善するなんかは、到底望みのないことである。……』

『吾々の旣に示した如く、現代の大企業の創設者の中には、殆ど有るか無いかの

財産で、彼等のスタートを切つた人々が居る、從て彼等は、技能と才能とが巨萬の財産を造つたと云ふ證據を提供したことになる。各人が勇氣を振つて企業家になることは願ひ得るが、いざ自分が多分企業家になれるであらうとは、どんな樂天家といへども、よもや進んで考へて見やうとはしないであらう。出世の緒をつかむ者は數知れぬ幾千人の中の極く僅かである。幸福な者は認められるが、その他無數の競爭者は、個人的才能では出世した幸福な者に劣つてゐる譯ではないが、彼等よりも都合惡い境遇に廻り合つた爲に、いつまでも暗黑の中に認められずに居るのである。且つ又、新しい企業を創設するには、勞働者自身が有して居らない所のもの、卽資本をば、大工業が構成され且つ確立されて行くにつれて益々多く必要とするとは、少しも疑ひを入れない所だ。……まだ苗畑にあるうちは、總ての若木が發育して喬木になることを望み得られるが、大森林にあつては、若木に斯樣な望みをかけるのは殆ど無駄である。吾々は勞働者に向つて、ベンヂヤミン・フランクリンの言

葉を發する。「誰かゞ、人間は勤勉と節約とに依らないで幸福に達し得ると云つても、それを信じてはならぬ、彼は毒害者であるからだ」と。全く正鵠を得た言葉だ。勿論之れには例外があり、而も多數に且つ明白に存在する。卽ち土地の投機、株式賣買、賭博、結婚並びに相續政策――玆では、適法な相續に就いては語つて居らない――是れである。總て此等のものこそは、又金持になる所の手段である。序でながら、もう一つ附け加へて置かう。誰かゞ諸君に向つて、勤勉と節約とはどんな場合でも幸福に導くものだと云つても、又それを信じてはならぬ、彼は欺騙者であるか或は度し難い樂天家であるからだ』と。

（三七九頁）『……人が此の世に於て最も欠くことの出來ぬものは、恐らく心配と希望とであらう。其等なくしては、人間の生活は趣味なきものであり又無意味なものであらう。其等を全然奪はれた生活は、奴隸――働いて養はれ、さうして明日のとを考へないところの――の生活である。經濟的才能は衰へて仕舞ふ。企業精神や

活動心が働く所の餘地は全然無く、それらは自然のまゝ發展せずに止つて仕舞ふ。斯樣な境遇の下では、所得を用心深く使用して節約すると云ふことさへも、十分に行はれ得ない。好景氣と健康と小家族――又は全然家族を有たないと――の三拍子が揃つたならば、勞働者の賃銀は、可なりの貯蓄をする餘裕を與へるであらう。けれども、大都市の賃勞働者の境遇全體は、とても彼等をして貯蓄せしめるやうに勸告したり又さうすべく元氣を與へるものでない。……彼等は自ら考へる、こんな僅か許りの金が何の足しになるか？　俺はとてもランティエにはなれない。こんな譯で出來る時には贅澤をし、さうして後になつては當然苦むのだ。……好景氣不景氣に關係をもたず、又好景氣の時に不景氣の時の準備もなし得ないところの、斯くの如き手から口への生活は、疑ひもなく、近世の賃勞働者の全經濟的境遇に依つて促進されるのである。』

(三八一頁)『それで吾々は、無產者生活を特徵づける標準を有つことになる。そ

れは、彼等自身並びに其の子孫に對して、連絡も、思慮も、希望も、未來も無い所の生活である。』

（三八五頁、或る經濟的恐慌の描寫による。）『斯くてカール・マルクスが産業の豫備軍と名づけ、「國富」を形成するに際しての重要な一要素と稱した所のものが發生する。彼等は自己の經濟的生存に對して、確固たる故鄕も無ければ又確固たる土臺をも有しない浮動的住民である。彼等は不景氣の時には公の費用――縱令公私の貧民保護にせよ、不生産的勞働の支辨にせよ、さうして終に監獄や感化院に入れられるにせよ――に依つて養はれるが、景氣が好くなれば忽ちに、彼等は企業家の命ずるが儘に生産の急激なる增加に從事しつゝ、低き勞賃を甘受せねばならぬ。で、表面上危險を負擔する資本家に取つては、好景氣の場合には勞働の剩餘利得を獲得することが出來るし、又不景氣の場合には、勞働者を罷免して損失を社會全體に轉荷することが出來る。』

（三八九頁）『此處に一時と、彼等の仕事と避難所とを見出して行く故郷のない隷屬的無産者は、教育家には適當して居らない。密集する大都市の裏長屋の狹い、不十分な、且つ其上に同居人によつて煩はさるゝ借家棲居。父は權力者の前にあつて、獨立も權威も尊敬も有せず、母は夜の二三時間のみ家に歸ることが出來る。このやうな環境の下では、どんな種族が出來るであらうか？　又どんな子孫が敎育されるであらうか？』

『大都市の住居關係は、やゝともすれば、勞働者の家庭及び家庭生活を破壞しやうとする。………ベルリンの住居三十三萬戸（一八九六年）に對し、年に十四萬乃至十五萬の移轉が行はれる。云ふまでもなく、大抵は小さい住居へ移轉するのだ。此の數字によつて、如何に莫大な費用、損失及び障害の重荷が表はされてゐることよ！かやうな境遇の下では、家庭を愛する心なんかは思ひもよらない。住居は、夥しい浮浪軍の各員が毎度の移轉季節の逼迫と困難との中に見出すところの、一時的の

避難所である。それで、永住的の住民に發生する永續的の個人關係――隣人や親屬に對する關係、主人や顧客に對する關係、敎師や牧師に對する關係――は、總て消え失せる。總てのものは、荒凉たる擾亂の中に、相次いで轉げ去つて仕舞ふ。さうして子供は、幼ない時から獨法師にされがちだから、放逸になる。學校は彼等の面倒を見るが、併し家庭――幼少の頃より、遊戲並びに勉强に場所と機會とを與へる所の――が敎へる重要な事柄――萬人に取つては、あらゆる學問よりも早速に重要な事柄である所の――を、一般に敎へてくれるものではない。』

上述の如くパウルゼンは、都市の工場勞働者の事のみを述べてゐる。だから、農業勞働者の地位に關しては、又一瞥を投げる必要がある。

社會民主々義と戰ふため、殊に保守派の地主や敎師や牧師などに對し、帝國議會の選擧に臨んで社會民主黨を攻擊するに必要な材料を提供するため、牧師ヘルマン

ケーラーは、一九〇三年、『社會民主黨の地方煽動と其の道德的矛盾性』("Die sozialdemokratische Landagitation und ihr sittlich anstössiger Charakter")【註六】と題する一の論著を公にした。ケーラーは其の論著に於て、當時の主農論的諸新聞より、例へば獨逸日々新聞――常に地方の情勢を正確に知るものとして推奬されてゐたところの――より、次の所を引用してゐる。

【註六】 Leipzig, 1903, J. C. Hinrich Buchhndllung.

（七五頁）『本來廣汎な土地所有の利益に迷はされず、又自分勝手に勞働者階級の欲望と權利とを低く評價する傾きのない人々は、爭ふとの出來ない報知を讀めば、シユレスウイツヒ＝ホルスタイン、ハンノーフエル、ザクセンの祝福された州に於てさへも、ブラウンシユヴアイグ、アンハルトなどに於けると同樣、農業勞働者は大部分慘憺たる生活を送つてゐる、と云ふ事實を認めざるを得ないであらう。』

今や科學（即ち有名な醫者カール・フオン・フオイト及びマツクス・フオン・ペツ

テンコーフア）の研究の結果、一人の人間が只滿腹するためには、一日如何ほど食はねばならぬかと云ふことが報告されてゐる。それは少くとも、七五〇瓦のパン、一〇〇〇瓦の剝皮馬鈴薯、二〇〇瓦の鹽漬魚、二〇〇瓦の腸詰、五〇瓦の粗末なコーヒである。此の『メニユー』――此の書は後になつても左樣に『メニユー』と云つてゐる――は、帝國衞生局も明かに認めてゐるやうに、一九二〇年に於ては、六〇ペンニヒ以下では献立できないのである。さうして王領（卽ちポーゼン州に在る移民局の領地）では、一人一日の食料は僅か四〇ペンニヒで足るのであるが、其處では日傭人は、彼等が滿腹するに必要である三分の二しか儲けないのだ。これでは、私有地は思ひやられる。「如何に手の勞働で生活する日傭人の家庭でも、こんな端金では食つていけない！　地方通常の日傭賃銀高は、……貨幣並びに現品給付に於る全收益を包括して、例へばブレミツシユ地方の如きでは唯一の例外として三マルク以上に上つてゐるが、之に反し東プロイセン、ポーゼン、シユレヂイエンの

各地方では、男子勞働者に對しては一マルク、女子勞働者に對しては五五ペンニヒに下つてゐる。子供は平均約その半額である。考へて見給へ、――妻子の共稼は常に計算に入れる譯にいかないから、二百五十日乃至三百日の勞働日では、通常妻子四五人を持つ一日傭人は、總計五〇〇マルク乃至七五〇マルクの年收を得ることが出來ると見るのが、平均して善く當つてゐると云ふことを。が、かう云ふ年收では、十分の營養なんかは思ひもよらないことだ。………』

それは、云はずとも明かだ！　何故なれば、上述の計算によると、夫婦と三人の子供は、食ふだけでも毎日二・一マルクを費し、從つて一年七六五マルクを越えるのに、一年の全所得は七五〇マルク以下であるから。只食ふだけでも斯樣に困難であるに拘らず、ケーラーは尙次のやうなことを云つてゐる。

（七七頁）『田舍に於ける有らゆる困難の中、最も酷いものは住宅難である。例へば此の狀態は、所謂牧師の訊問によつて曝露されてゐる如く、安樂や善良な趣味を全

然度外視するにしても、健康や道徳の要求する總てのものを馬鹿にしきつてゐる。……田舍の貧しい、殊に年とつた人々が使用せねばならぬ所の、住居——と云ふよりも寧ろ洞窟及び廢墟に關し、又斯の如く時々刻々に移り行く純然たる浮浪生活に關し、身の毛のよ立つほど怖しい話は澤山にある。』

此の最後の點に關して、もう一つの證據を擧げて見やう。一九一〇年一月八日、ベルリンの有產者の一新聞プルータス紙上に、地方勞働者の貧窮に關するルードルフ・ストライヒの一論文が發表された。長年の間農業に實際從事してゐた論者は、その論文に於て殊に次の如きことを云つてゐる。

『一度、地方勞働者の住居を觀察するがいゝ、原則として、小形の居間と寢室とから成立つ彼等の住居は、低い一つの茅舍である。最も原始風な人間だけが、斯樣な窖を造るのだ。尙その外に、小さい家畜小屋があり、又家の前には小さい庭がある。かう云ふこと、全く人聞きが善くて、その住居は詩的に解せられるが、それには人の

氣付かない暗黑面がある。卽ち、彼等の住居は粗末なものであり、又一家族に取つて十分の廣さが與へられてゐない。旣婚の勞働者は、契約によつて一人の――屢々二人のことさへもある――賃仕事勞働者を雇はねばならぬ、從て此等の勞働者に寢屋を分たねばならぬ。ところで、尙此の上に每度の事であるが、冬の間は豚と家禽とを寢室へ入れねばならぬ。若しさうしないならば、家畜は原始的な小屋の中で凍えるであらうから。だから大抵の家族は、粘土の床附きの小さい居間を使用してゐる。通常此等の『小室』は步く每に塵埃が立ち昇つて、人々が床の上の凹みの中に足を滑して脛をくじかない樣に注意しなければならぬ如き狀態にある。――此の寢室――それは殆ど寢室と云ふことの出來ないものであるが――には戶がついてあるが、それは冬になつても締めることは出來ない　何故なれば、寢室は居間の煖爐で溫められねばならぬから。で、その結果として、私生兒が馬鹿に多くなるのだ！『普通の家庭にあつて、居間や寢室で煮焚がされたり、靑魚が燒かれたり、又馬鈴

薯菓子が、別して芳しい臭氣を發する安油であげられたりすることは、——一般に何でもないやうに見えるだらう、何故なれば、地方の人々は皆逞ましい健康體を樂しんでゐるやうだから。なる程地主はその通りだ。併し、これは一般に通ずる事柄では決してない、特に勞働者に於てさうである。いつも冬には多くの疾病が流行し、時には熱病までが勃發するから、彼等は年若うして斃れて仕舞ふのだ。

『四五人以上の家族の住む住居又は住宅に便所の設備のないものを、何うして文明人として考へることが出來るか！　人間らしい住家には何うしても便所がなければならぬ、それだのに多くの立派な御方（地主、家主などを指す——譯者）は村中に唯一つの便所を設けることすらも必要とは考へてゐない。さうして今「コレラ」蔓延の恐怖より餘儀なく便所を散り〳〵に設けた場合でも、それを綺麗に整へる（清潔に保つ）ことをしない。だから人々が便所のすぐ周圍を不潔にするのも驚くに足らない、さうして斯樣な住所に詰め込まれて居る多くの人々の間では、事實あること

だが、農業勞働者の住家にはいる迄には、眞の文字どほりに、先づ全同居人の糞尿の中を捏ね廻はして行かねばならぬやうになつてゐるは、當然のことだ。』

紡績業に於ける幼年勞働に關しては、嘗て米國勞働省の書記官であつたダブリユー・エフ・ウヰロービーが、とりわけ次の如き報告をなしてゐる。【註七】それは黑人の子供に關してゞあるが、黑人といつても人間である以上、彼等の爲す勞働は、奴隷勞働でなくて、正則な資本家的賃銀勞働である。氏は次のやうに論じてゐる。

【註七】米國の勞働立法に關する諸論文——一九〇三年の佛譯（Paris, Giard & Brière）に據る。

『此等幼年勞働者の多くの者は一日一〇仙（四〇ペンニヒ）でこき使はれ、中には僅か五仙乃至六仙の者もゐる。然るに其の勞働は一日十二時間で、或者は朝の六時から夜の六時迄働き、或者は夜の六時から朝の六時迄、（卽ち夜通し働くのだ！）。苦しい最後の時間を眠らない爲に、夜業に服する子供は、時々頭を冷水の中へ突

込まねばならぬ。私はアラバマで、正味四十日間ブッ通し夜業した七歳の子供や、又六歳の時まる十一ヶ月間ブッ通し夜業に服した他の九歳になる子供と語つた。『ジョージヤでは、多數の子供が夜業を終へて歸宅する所を見た。彼等は、やつと戸口へ轉げ込み、着のみ着のまゝで貧弱な寢臺の上に身を投げかけて、食事する力さへもない位疲れてゐた。南カロリナでは、或る最新式の設備をして紡績所で、ゼーン・アダムスと云ふ五歳の女の子が、十二時間の夜業に服してゐるのを見た。コロンビヤでは、嘗て自分の年――と云つても、九歳か十歳を越えてゐさうもないが――を知つたことのない、不幸な子供の夜業するを見た。彼等は一分の休みもなく夕の六時から朝の六時まで、濃密な水蒸氣の充ちてゐる空氣の中で、常に薄暗い部屋の中で、大抵の子供は半ば聾にされしところの、絶えまなき轟々たる機械の響を聞きながら、根限り働きぬいて、只休養と一片のパンだけを得るに過ぎないのである。

『私はつい此等の貧しい子供達の年のことを云つたが、實のところ彼等の年を見拔くのは、非常に難しいことである。此等幼年勞働者は皆、事實よりは四つも五つも若く見えるからだ。上述の生活方法はかくまでに彼等の成長を妨げ、彼等を去勢し彼等の脊柱を曲げ、彼等の顔に大馬鹿の刻印を押しつけてゐる。……

『去る一月（一九〇二年）アラバマ州のハンツ村で、八つになる一人の子供が、聯動機で右の手の人差指と中指とを失つた。或人は私に、一ヶ月前同じ方法で左の手の拇指を失つた七つになる一人の勞働者を示してくれた。ジョージャ州に住む或る醫者は、彼が開業してから十年の間に、同樣の災難の犧牲に落入つた百人以上の子供の指を切り落さねばならなかつた。又アトランタ市の或る有名な商人の云ふには、此の町の周圍の村々では、兩手に拇指のなくなつたところの、又總ての指や時には兩手までも無くした所の、澤山の子供に出喰はすと云ふことだ。實に彼等は、紡績業の犧牲となつた「老朽の勞働者」に外ならない。

『序に云ふが、大抵の紡績の工場主とか支配人とか云ふ者は、たつた一人の子供を募集する時でも、その兩親に一つの契約を締結せしめる。それがため工場は、各場合の不幸に對する總ての責任から解放される。』

ところで吾々は、遠い米國を去つて再び祖國獨逸に歸つて見やう。一九〇三年八月から一九〇四年一月にかけて、クリミツトシヤウで紡績勞働者が閉め出しを喰つた。これに刺戟されて、アリイス・ザアロモン夫人——彼女は社會民主々義に屬する者でなく、有産者的婦人運動に携つてゐた一婦人であるが——はクリミツトシヤウに旅行し、彼女自身が觀察して來た所のものを、ベルリンの種々の會合で次の如く報告した。

『女一人の收益は八マルク乃至一〇マルクで、一夫婦一週間の收益は約二三マルクである。十二歳になれば、娘は既に工場の人となり、十四歳からは毎日朝の六時から夕方の六時まで働く、假令結婚しても、大抵の者は同じことを繰り返すだけで

ある。食事は工場で皆と一緒にやり、風呂も工場ではいるのだ。子供は「養育所に」やられ、極く幼少の頃からクリミットシャウの型にはめられ、一週間に定額七五ペンニヒを給與される。幼兒は原則として、毎日半時間以外には兩親を見ることは殆ど無い。クリミットシャウの女工は棲居を有つが自宅を有たない、彼等は子供を有つが母ではない、彼等は生計を立てるが生活を有つて居らない。或る女の辯士は、ストライキをやつてゐる人々の中で、こんな家族が千あることを算へ立てた。』

同じ頃帝國議會で同一の問題が論爭された時、代議士フレースドルフは次の報告をなすことが出來た。『職業組合の報告によると、ザクセンの紡績業にては、勞働者は一年に平均六五五マルクを、既婚の熟練勞働者は八一一マルク三分の二を、儲けると云ふことだ。』

斯樣な境遇の下では、勞働者の生活は如何なるものであるかは、一九〇三年のクリスマスの前夜、（非社會民主々義の）ベルリン國民新聞紙に發表された次のスケッ

チが、一の感動すべき洞察を加へてゐる。

『貧しい子供たち。今日の夕方までは、ベルリンの有らゆる町々に、色々の年恰好をした子供達が、繪葉書や、呼子や、厚紙細工のガラ〳〵や、操人形や、クリスマスツリーの飾りや、繪本などを商つてゐる。多くの通行人の眼は、小さい蒼白い顏を情深さうに見つめてゐる、その口は絶えず「操人形一ゼクセル」「クリスマスの繪葉書一組一グロッシエン」と呼ばゝり續けてゐる。このやうに子供等を街上へ驅り立てるには、いろ〳〵の理由がある。が、此の現象を深く究め、又此の子供商人の一人〳〵に其の理由を尋ねてみるものは、大都市の不幸を看取することが出來て、深く感動せしめられるだらう。ポストダームの橋畔に、一人の小さいまだ八つに足らぬ所の子供が、一つの陳列箱に凭りかゝりつゝ立つてゐる。極く微かな聲で聞きとりにくいが、切願する眼だけは明かに語つてゐる――彼は商品を賣つてゐるのだ。それは、彼れ自身が十月及び十一月の長き夜に、長病ひの母と四つになる妹との爲、

少くともクリスマスの月には何物かを買ふことが出來るやうに造り上げた操人形である。彼は飢を、烈しい飢を感じたので、立ちながら自分が得たバター附きのパンを二口三口貪り食うてゐる、殘りの部分を、彼は外衣の中へ收めた、母も少しは食はねばならぬからだ。又更に四人の子供がゐる。彼等は一緒になつて、繪葉書の商賣を始めてゐた。多分兩親は其のことを少しも知らないであらう。彼等は收益金を算へてゐる――少し儲かつたのだ。彼等はそれ〴〵近所の商店で一對の温かい手袋を買うた。他の一つの光景は、七つになる小さい繪葉書賣りが示してゐる。彼れには病身の母と三人の弟や妹があつて、一日二マルクほど儲けねばならぬのに、彼はたつた一マルクしか儲けなかつた。彼れの目には深き憂が宿つてゐる。向う側の階段には、腕に賣れ殘りの二品を有つた、十ばかりの子供が居る。其處から遠くない所に、母が他の子供と一緒に立つてゐる。彼等は熱心に顧客を呼び寄せてゐる。又姉は十であり弟は八つである一組の兄弟が、蠟燭を商つてゐる。家にはまだ六人

の幼ない弟や妹が居り、父は病床に臥し、母はそれを看護せねばならぬ。此の二人の年嵩の子供が家族を養つてゐるのだ。また十二になる一少年は、呼子と時計とを賣らねばならぬ、彼れの傍には六つになる妹が屈みつゝ、小籃の中に繪本を有つてゐる。彼等は熱心に呼子を鳴らしてゐる。母は肺癆を、父は關節レウマチスを病んでゐるのだ。夫婦共例れで多くの費用を要したので、貯金はぢきに無くなつて仕舞つた。少年は小さい妹の手を引いて、ライプチッヒ街からゾルディン街の方へぶらついて行く、【註八】かくて彼等は幸福さうな顔をして、僅かの金を家へ持ち歸り得るに過ぎない。注意すべきは、どちらの子供も、自分がいくら儲けたかの問ひに答へられない。總て得たものはポケットに投げ入れて、家で母が計算するのである。』

【註八】大人にさつて一時問あまりの道程で、此の大都會の最も雜沓する群集の間をぬけて行くのである。

*　　*　　*

總て上述の所は斯くも感傷的なものであるが、それにはまだ、正しく主眼となる所のものが欠けてゐる。勞働者は勞働そのものに於て如何に生活するか？　勞働こそは全生活を充たし、その內容を與へるものだから、勞働そのもの丶內容は、生活の構成を決定することになる。それでは勞働者は、彼が每日十時間、十二時間、又は十四時間を捧げねばならぬ勞働に於て、如何に生活する者であるか？　それに關しては、既に上述のパウルゼン教授が、一の見界を立て丶ゐる、即ち彼は次の如く述べてゐる　彼れの論著三五一頁）。『勞働として喜ぶは、本質的には、多樣の活動を爲すことに依つて、工作者の藝術が稱揚するところの、一の完成物が完成されると云ふ點に在る。多くの古代藝術品には、工作者が愛を以て、その藝術を案出し成就したことがあり〳〵と見えてゐる。然るに勞働の近世的組織のため、勞働者の手から完成物が取り上げられた。彼は只だ一定の個々の給付、即ち恐らくは少しばかりの單純な絕えず同一の事を繰返して行く手仕事を、爲さねばならない。かくて彼

は、一つの生きたる道具、卽ち機械の一部分になつて仕舞つた。來る日も來る年も、彼れの仕事は、石炭を爐口に注いだり、ブリキの小片を一の模型に押し付けたりすることだ。……』

【註九】

けれども、佛蘭西の偉大なる詩人エミール・ゾラは、彼れの小說『勞働』で、此の問題をもつと包括的に取扱つてゐる。玆に最も力强い章句の二三を引用しやう。

【註九】 一九〇一年に獨逸の書店(スツツトガルト及びライプチツヒの)で發行された、ローゼンツヴアイグの獨譯に據る。總て引用文は第一卷からである。

(六三頁)『……工場內の最大作業場の一つである此作業場は、晝の內は展延機の恐しい響で充たされてゐたが、今や夜となつては、此の展延機は靜かに止まつて、巨大な作業所の半ば以上は、深い暗黑の中に橫つてゐる。十の鍊鐵爐の中たつた四つが燃えてゐて、二つの壓碎鎚が其れに依つて働き、此處彼處に弱い瓦斯の光が風

にめらめき、大きな黑い影が作業場を覆うてゐる。吾々は、その屋根を支へる所の頑丈な、煙で眞黑にされた梁を殆ど見分けることが出來なかつた。水音が暗黑の中から響いて來、踏み付けられた土地は起伏して溝となりさうして此方には惡臭の水溜りを造り、彼方には石炭灰と殘廢物との貯藏物を造つてゐた。此の黑い、燻ぶつた、不快な洞窟内の到る所で、人々は有らゆる快樂を奪はれたところの、忽にされた勞働を罵り、又呪にまでなつた蠱惑的な勞働を罵つてゐた……

（六六頁）『リュックは丁度、一つの坩堝爐が充された時にやつて來た。勞働者は、以前から熱せられてゐた耐火粘土製の坩堝を下し、漏斗の助を借つて、鐵片の充滿してゐる錫函を坩堝の中へ振ひ落してゐた。各坩堝に對して、錫函は三〇キログラムの割合である。三時間か四時間で、此等の鐵片は鎔けて仕舞つた。それから殺人的勞働が始つた。卽ち坩堝を爐から取り出し、その中の鎔解物を穴にし、更に其を注ぎ出して一定の鑄型に流し込む。次いでリュックが、丁度助手が長い棒で鎔解

が十分であることを確めてゐた他の爐に近づいた時に、彼は坩堝を取り出さねばならぬ職工がフォーシャールであることを知つた。彼は、青白く憔悴した顔をして、腕と脚とに滿身の力をこめてゐる。彼が十四年このかたやつて來た、恐しい單調な勞働は　只彼れの身體をゆがめたのみでなく、寧ろそれよりも以上に、彼れの精神を害したのだ。彼れに在る有らゆる個性（彼れ自身の精神生活）は絶滅されて、彼は何の考へる所もなく、いつも種々の運動を繰返しつゝ、自己の勞働を果し行く機械に墮し、又他の要素である火と絶えず鬪爭してゐる所の、生命なき一要素に墮して仕舞つた。つり上がれる肩、病的に肥え太れる手足、火に燒かれて視力の弱れる眼――此等總ての身體上の損害に加へて、彼は又自己の精神上の萎縮を認めてゐた。何故といふに、十六歳で怪物に捕へられて、極めて不完全な敎育も突然に止めてから は、彼は、自分は曾て相當の頭を有つてゐたが、それは殺人的な、殘害的な勞働のために破壞され、又彼が盲目の一動物の如く勞働せしめられる無情な踏み車の

ために殺されて、今日ではもうから駄目だと云ふことを、今も猶憶ひ出すからである。それでも彼は、たつた一つの欲望を、たつた一つの喜びを有つてゐる。飲酒だ――彼が働いた時に、毎日又は毎晩、飲む所の四リートルの酒だ、爐が彼れの乾き切つた可燃物の如き皮膚を焼かないため、彼が飲む所の酒だ、粉砕されないために、彼が飲む所の酒だ。さうして最後に殘された一つの幸福感を味ひ、彼れの生存を絶えざる酩酊の鈍き快樂の中に暮らすがために、彼が飲む所の酒だ。……

（七四頁）『……彼方では一人の鍛冶工が、灼熱したる鋼鐵片を掴んで鐵鎚の鐵砧の上へ持つてゆくと、忽ち鐵鎚は烈しく上下に動きつゝ舞踏し始めた。それは耳を聾し目をくらますばかりである。大地は振動して、鐘の如く空中に轟き渡り、革の短袴を穿き革の手袋を嵌めた鍛冶工は、降りしきる火花の雨の中に消えて行つた。火花はのべつに降りしきり、恰も霰彈火の如く四方に轟き渡つた。鍛冶工はぢつと此の荒れ狂ふ擾亂の中にあつて、塊鐵を種々に廻し、その各側面を鐵鎚でたゝきつ

けて、展延機に渡されねばならぬ所の、長楕圓形の鑄金を造らうとしてゐた。鐵鎚は彼れの命ずるまゝに彼方此方を打ち、或はその打擊を遲めたり早めたりしてゐたが、彼が鐵鎚の指揮者――高く上の方で、自分の座席に座りつゝ槓杆を取扱うてゐる所の――に與へた相圖をば　吾々は少しも知ることが出來なかつた。

『リユツクが近づいて見ると、その鐵鎚の指導者はフォーシャールの若い義理の兄弟であつた、彼は空中の高い所にぢつと坐り、自分が發する喧騷の中に、一寸した機械的の手の運動をやりながらやつと生活して行く者である。槓杆が右へ行けば鐵鎚は下へさがり、槓杆が左へ行けば鐵鎚は上へあがる――只、これだけだ、卽ち此の少年の精神生活は、此の狹い範圍の中を回轉してゐた。吾々はちらつと火花の發する際に、靑白い顏と、色澤のない髮と、鈍つた目とを有つ所の、極く小さい弱々しい彼れを、又その身體と精神との發育が、喜びも無ければ自由撰擇もない慘忍な勞働に縛られてゐた所の、一人の憐れな人間を、見ることが出來た。』

ゾラは斯くの如く描いてゐる。勿論、之れは一つの詩であるが、併し勞働者生活を知る者の中一人として、此の詩の恐ろしく眞を穿つてゐることに、異存を挾まんとする者があらうか？　勞働者のうち果して何人が、此の詩の中に自分の生活そのものが、事實ありのまゝに描かれてゐることを知らない者があらうか？

第二章　心的改造か物的改造か

――善意並びに惡意に付いて――

境遇――それから勞働者の不平と熱望とが說明され、また其處から社會民主々義が發生したのである。吾々の描寫には欠陥が無いではない。そは、勞働者階級の生活關係より、一の重要な點を拔き出さうとしたのみであるが、それだけでも、吾々が出發點としたところの問題・卽ち其點に勞働者階級の苦痛が存在し・從つて彼等が其の排除を熱望するところの問題を、解くには十分である。

試みに勞働者の上に懸る災害として、凡そ次の如きものを揭げ得る。

1. 貧窮（卽ちあまりに少ない賃銀）。
2. あまりに長き日々の勞働時間。
3. 勞働をなす場合の、あまりに大なる努力（勞働の强度）。

4. 勞働の沒趣味。
5. 生活の絶望。
6. 婦人並びに幼年勞働（及びその結果としての家庭生活の破壞）。
7. 個人的不自由及び個人的隷屬。
8. 常に威嚇しつゝある失業。

勿論、此の目錄は完全と云ふを得ない。それは、最も多く吾々の眼に映る勞働者階級の苦痛をば、只だ性急に排列したに過ぎない。

云ふまでもなく、有産者の境遇に居る人々のうちでは、玆に揭げた災害が一般に存在するを爭ふ所の人が、今猶存してゐる。而も斯く爭ふ人々は、彼等自身の利益のため、無產者の苦痛に對して盲目であると云ふよりは、寧ろ彼等の大多數の者は、既に第一章で述べた如く、公平且つ偏頗なしに判斷せねばならぬ境遇に居る。それだのに一九一〇年のこと、かの有名なハンス・デルブリュック敎授の如きは、獨逸

では社會立法の御蔭で、『經濟的不幸は、根こぎにされたと同樣』であると放言したのだ！　事實的境遇に對する斯くも明白な盲目とは、固より議論する餘地はない。ところで、吾々が專ら有產者の方から取つた引證こそは、反つて有產者の中には、かの先きに揭げた不幸を認めるに吝かでないところの、善き心の持主が居ると云ふことを示してゐる。彼等は無產者が重き苦痛に堪へ忍ぶのを見、それに同情し、それを排除せんことを願つてゐる。卽ち、彼等はかの苦痛の存在することを認め得る、彼等はそれらの排除されんことを願ひ得る、彼等は更にそれらの排除のために努力することさへも出來る。而もその爲に、彼等は社會民主々義者たることを決して要しないのである。只だ社會的不幸を認識し、或は又それに反抗せんことを希望し且つ努力するだけでは、彼等は決して社會民主々義者と云ふことは出來ない。

卽ち玆では、鬪爭の樣式が問題となる。若し思慮ある人が此の不幸と戰ふために何事かをしやうとするならば、彼は先づ第一に、その源泉を尋ねるであらう。さう

して玆に、單なる悲歎と思索とを越えて實行に移らうとする第一歩で、既に有産者的見解と社會主義的見解との道が分かれるのである。

果して勞働者階級の不幸が、何によつて生ずるかを自分自身に問ひかける時、囚へられない人は、先づ此の答へのために決して狼狽しないであらう。勞働者は惡くなる、何故なれば、彼等はあまりに酷く掠奪されるからだ、而もその掠奪は、彼等を雇ふところの、工場主及び企業家に依つてゞある。企業家が之れを爲すは、とりもなほさず、彼等の無情、自利、我欲のためである。各人は自分のことのみを、自分自身の利益のみを考へて。他人のことを少しも顧みない。それだから、企業家の惡性卽ち惡意こそは　勞働者の不幸の本質的な源泉であらう。

之れは實に有産者的博愛家が、經濟的不幸の原因に對して答へるところの、唯一の返答である。それは只だ勞働者にも　企業家に對すると同樣の責任を負はしめるのみだ。勞働者も亦――彼等の意見によると――我利であり我欲である、彼等も亦自

分のことのみを考へて、他人を少しも顧みない。彼等も亦『履行の出來ない』要求や『不正當』な要求を提出する、さうして此の相反抗する惡意が、現代横行するところの、悲しむべき狀態を造り出したのである。

けれども此の簡單な一寸目には尤もらしい說明は、もつと深く考へて見ると、全く不十分であることが分る。只もう少し考ふれば澤山だ。事實、人間の惡意や我欲が不幸を惹き起したとするならば、救濟の手段は自ら生ずる譯だ。吾々は人間から我欲を追ひ立てねばならぬ。吾々は、各人が自分のことばかりでなく、他人のことをも考へ、又他人のことをも顧みるやうにせねばならぬ。斯樣なことは、何うして爲すことが出來るか？　吾々の子供をヨリ善き敎育によつて、幼少の頃から尊敬と博愛とに慣らしめ、又大人に於ては善き說得に依つて。卽ち一言で云ふと、道德的說敎に依つて。――さうして事實、上述の困難を輕減し排除するために、有產者的博愛家が提出し得る總てのものは、此の點に觸れてゐるばかりだ。バウルゼンの

論著は、徹頭徹尾倫理であり道德哲學である、卽ち人を改善し敎訓するところの大きな道德說敎である。ケーラーの論著も全く同樣である。然り、これらの人々は地主の良心に訴へて、農業勞働者の恐るべき境遇を改善しやうとしつゝ、一方に於てはその代り、地主に一つの期待を有たしめてゐる、卽ち社會民主々義の撲滅是れである。同樣のことが、もつと明かにストライヒの論文に現はれてゐる。彼れの目的は、農業に於ける勞働の不足を救ふことである。そこで彼は地主に向つて、改心さへすれば直ぐさま利益があると云つてゐる。卽ち彼は次の如く書いてゐる、『若し勞働時間を輕減し、勞賃を增加し、更に進んで勞働者を人として取扱ふならば、彼等は必ず遙かに良好な結果を收めるに相違ない。……農業には、今日工業が使用する勞働力の大部分が、殘されてあるべきだから、只いつの日か心に描かれた誤謬が根本的に取り去られさへすれば、彼等はそれぐ、工業を捨てゝ田舍へ歸つて來るであらう。……此の見地から考へて見ると、旨く地主に向つて忠告されてゐるなら

ば、彼等は自分自身で現代の狀態を排除するであらう。更に彼等が進んで、勞働時間を今日の關係と見解とによつて規律し、日出から日沒まで働かしめる古き制度を根絕してゐたならば、かの勞働者の不幸は全然廢止されてゐた筈である。……』

だから所有者の善意に關しても、同樣に云ふことが出來る。上述のところによると、論者は、此の悲しむべき境遇の眞實の源泉を、所有者の惡意のうちに、彼等の邪曲及び卑賤のうちに、求めねばならなくなる。卽ち所有者は、純粹の惡性並びに慘酷性から、又は少くとも限りなき貪欲や冷酷から、勞働者を兇暴に取扱はざるを得なかつたのである。

思ふに、思慮ある人々は必ずや次の如く自問せねばならぬであらう、――然らば所有者なるものは、本來悉く猛獸の如きものであるのかと。否、そんなものは、ほんの例外に過ぎない筈だ！　換言すると、ストライヒ自身は次の如く說明してゐる――假令我欲が彼等を追ひ立てやうとも、假りに或る他の組織に於て、自ら永續的

に今よりも多くの利益を得るとしたならば、彼等自身は改心するであらうと。さうして既に一九〇二年に、說敎師のケーラーは同樣のことを言つてゐる。ところが所有者は悉く、此等の事實を洞察しないほど愚鈍であるのか？　さうとは思はれない。

且つ又、道德說敎は新しいどころか、既にかなり以前から用ひられてゐる。道德が盛んに說敎されたのは昨今のことでなく、一寸想像のつかない程昔からのことである。基督敎こそは、その根本に於ては、二千年このかた行はれた道德說敎に外ならない。果してさうだとすれば、吾々は本當に考へねばならぬであらう、――若し人間の惡性が事實社會的不幸に對する責任を有ち、而も此の惡性に對しては、既に數千年このかた道德說敎なる唯一の可能的手段を以て戰はれてゐるとするならば、吾々は必ず今迄に、一度たりとも何等かの結果を見ることが出來た筈である。然り、不幸は、もと〳〵ずつと以前に、根本的に撲滅されてゐた筈である。が、それに就いては、何物をも認めることが出來ない。これは驚くべきことであり、疑ふべきこと

である。それでは、不幸の源泉を人間の惡意のうちに求める思索過程は、恐らく全然誤つてるのではなからうか？　その源泉は恐らく、全然他の場所に存してゐるのでなからうか？

今、此の疑ひに强められて、有るがまゝの事物を觀察して見るならば、吾々は直ちに、益々疑ふべき材料を多分に見出すのである。

人間の意志に經濟的の責任を負はしめる者は、明かに次の如き見解――人間の意志は經濟的境遇を支配すると云ふ所の、或は他の言葉を以て言ふと、人間は自分の欲するまゝに、自分の經濟的境遇と經濟的地位とを構成し得ると云ふ所の――から出發してゐる。之れは確かに有產者的見解であつて、例へば『各人は自分の幸福の鍛冶屋である』と云ふ諺に現はれてゐるやうなものである。が、これは現實と全然一致しない。現實にては、人間は彼等の運命の主人公でなく、寧ろ之とは全然反對に彼等の運命に隷屬してゐる。ほんたうに吾々は躊躇する所なく、人間は自己の運命

の手中に在る一のボールに過ぎない、と屢々言ふことが出來る。これは既に各人が彼れ自身の生活で體驗し得た所である。然らば吾々のうち果して幾人が、自己の思ひのまゝに生活し得る地位に在るであらうか？　實に寥々たるものだ。大抵の人々は――確かに殆ど總ての人々は、最小の影響をも運命に及ぼすものでない。彼等は來るがまゝに運命を受け入れねばならぬ。若し吾々が經濟的過程を總括して觀るならば　それは一層明白になるであらう。上述の點を、吾々の鬪士フェルディナンド・ラッサーレは、多數の實例によつて明かにしてゐる、そこから吾々は二三の例を引いて見やう。彼は就中、彼れの論著　„Herr Bastiat-schulze von Delitzsch“　に於て）次の如く云つてゐる。

『若し今日に於て、コリント及びスミルナに於ける乾葡萄の收穫や、ミシシッピイ谷の穀物の收穫が、ドナウ地方やクリムに於ても非常に豐饒になるならば、ベルリン及びケルンに居るコリント商人は、店に以前の價格に於て多數の仕入品を

有つ穀物商人と同様に、恐らく乾葡萄の減價のため、彼等財產の半分を失ふであらう。』

これは殊更に取り立てられた事件ではなく、極めて屢々事物の通常の進行に於て起るもので、次に示すのもさうである。

『之れに反し、吾々の穀物の收穫が不作であるならば、此の年に於ては、勞働者は彼等の勞賃の半分又はそれ以上を失ふことになる、何故なれば、勞賃は貨幣表示に於て同一であつても、それは勞働者に向つて、常に比べて遙かに僅少な食量しか供給し得るに過ぎないから。』

以上述べしところは又、人間の經濟的境遇なるものは、人間が其れに對し絕對的に何事をも爲し得ない過程に依つて、或は高められ或は低められたりしつゝ、絕えず影響されるものだと云ふことを示してゐる。尙一例として、特に著しい事件を引合ひに出さう。一八六〇年米國では四年間續いた戰爭が勃發し、その結果綿花の栽

培をなすことが出來なくなり、英國へは少しの綿花も供給されなかつたので、忽ち英國の綿花紡績や綿花機業は、その原料を無くして仕舞つた。彼等は事業を著しく縮少するより外に道はなく、かくて英國の綿花勞働者に取つては恐るべき饑饉となつた。二十五萬人は全くパンを奪はれ、十六萬人は逐次失業し、幸に勞働に殘ることを得た十二萬人といへども、著しい賃銀の低下に苦しまねばならなかつた。當時英國に蔓つた飢えは、今日に至るまで忘れられないほど酷いものであつた。それだのに英國の紡績業者と紡績勞働者とは　米國の戰爭に對して何を爲すことが出來たか？　彼等は何事かを爲して戰爭を終了せしめることが出來たか？　否、全然何事をも。——而も戰爭の效果は擴まる一方であつた。このやうな事情の永引いたことは、英國の資本家をして何處か他の場所に於て、此の欠乏した綿花を償ふやうにならしめた。かくて印度では、米作から奪はれた廣汎な地域が綿花栽培のために整理されたが、米は生粹の印度人の最も重要な食物であるから、忽ち一八六六年には印度に

一の新しい猛悪な饑饉が起り、百萬人足らずの人間がその犧牲となつたのである。事實はこんなものだ。人間の運命はかくも密接に、數千哩を距てゝ遙かに大洋の彼方と絡み合ふ、然るに猶人間の意志が、境遇の上に決定的の影響を及ばすものだとこの子供らしい考へに耽る者は、必ずや現實に對して、彼れの目を力一杯に鎖さねばならぬであらう。

このやうに熟慮することは、卽ち社會民主々義者をして、一般に勞働者の不幸の源泉をば、人間の意志の裡に求むべきで無いとの、確信に導いたのである。【註】

【註】勿論、吾々は上述の所をば、社會主義の反對者が殆ど常に爲してゐるやうに、誤解してはならぬ。吾々は上述の點を以て、人間の意志なんかは全然存在するものでなく、又全然協働するものでないと云ふことを謂うたので無いことは勿論だ。次の章で說明されてゐるやうに、社會主義は、勞働者の不幸を資本家的利潤に歸してゐる。その利潤をば、資本家は造らうと欲してゐるものだ、若しも彼等が利潤の造出を欲しないならば、此の世には少しの利潤も存しないであらうし又それが伴ふ所のものも存しないであらう。けれども、資本家の意志は自由ではない。彼等は利潤を造らうと欲するに相違ない、

從つて彼等は、此の意味に於て貪欲であらればならぬ。即ち貪欲なるものは、彼等の自由意志から發したものでない。だから意志は存在し且つ働くも、それは自由に變更されない。意志は源泉でなくて、ヨリ深き源泉の一作用に過ぎない。カール・カウツキーは此の點をば、(彼れの小册子 "Der Weg zur Macht" の三十一頁に於て) 次のやうに說明してゐる『

『總ての經濟上の理論なるものは、有らゆる經濟上の出來事の動力は人間の意志であると云ふ認識から出發しない各人に取つては、空虛な概念の遊戯となる。勿論、謂ふところの人間の意志は、自由意志ではなくて……それは一の決定された意欲である。總ての經濟の基礎に橫はるものは、終局に於て生きんとする意志である。……此の生活意志が如何に特別な形態をば……各個の場合に於て取るかと云ふことは、生活のそれぞれの條件に依存する。……例へば玆に一人の資本家があつて、若しも利潤を目的としないならば、彼は、自己が生活する所の條件の下に於て、生存することが出來なくなる。彼れの生きんとする意志は、彼れをして利潤を獲得せしめ、又彼れのヨリ善く生きんとする意志は、彼れをして利潤の增加に努力せしむる。……此の同じ方面に且つ一層力强く、競爭戰——若し資本家にして其の資本を絕えず增殖して行くことが出來ないならば、彼は忽ち沒落するを免れないところの——が作用する。……同じく勞働者の方にも、資本家を鼓舞するところの、生きんとする同じ意志が働く。が、彼等の生活條件は資本家のそれと異なつてゐるから、彼等に於ては、生きんとする意志は他の形態を取る。……勞働者の生きんとする意志は、彼等をして資本家の意志に對抗せしめる。そこから階級鬪爭が發生するのだ。

かくて吾々は、意志を全經濟的過程の動力と見る。……經濟的必然性と意志の鉄陷とは別物である。經濟的必然性は、生きんとする人間の必然性と、その爲、彼等が見出す所の生活條件をば利用する不可避性とに、適應する。それは卽ち、決定された意欲の必然性である。』

だから、若しも社會民主々義の教義が、現在の境遇に對し、人間の意志に責を負はしめることが不合理であると云ふならば、それは上述の如く考へてゐるからである。意志は存在し且つ働くも、それは自由ではない。意志は境遇を思ひのまゝに變へることは出來ないで、反つて境遇の一作用に過ぎない。だから又、個人の意志に感化を及ぼして、境遇の變化を希望すると云ふことは不合理なのである。

人間の惡意は勞働者階級の不幸の原因ではなく、寧ろその原因は他處に求めねばならぬ、——之れこそ、社會民主々義者が前章にて例證された事實から歸納した認識である。

第三章　資本主義的生產の本質

然らば、その原因を何處に求むべきであるか？

かの有產者的見解、例へば『總ての人間は自己の幸福の鍛冶屋である』との諺に現はれてゐるやうな見解に對して、吾々は社會民主々義的の認識を、『人間は自己の關係（社會關係）の生產物である』との一句に要約することが出來る。社會主義は、人間がその中にて生活する關係卽ち狀態の中に、彼等の生活が依つて以て構成される所の、決定的原因を認めるものである。

今日諸文明國民が生活する狀態の總體を、吾々は、『資本主義的經濟』なる名稱の

下に包括する。

生産（消費の爲にする貨物產出）は、今日では徹頭徹尾資本の使用に依つて行はれてゐるが、資本に取つては、欲望（消費欲望）の充足が、第一位の且つ最も重要な生產目的ではなく、夫の主眼とする所は寧ろ利潤である。此の事實は、何人に依つても、社會主義の反對論者に依つてさへも、爭はれない程に明白である。今日何人かゞ、羊毛ズボン工場を經營して居るとするならば、その人は、人々に此の重要な衣服を供給する目的で、それを經營してゐるのでは決してない。若し人々が之に向つて代價を拂ふことが出來ないならば、彼は彼等に一つのズボンさへも渡さないであらう、さうして人々は凍えつゝ裸體でうろつき廻らねばならぬ。更に一例を實際から引くならば、獨逸では一九〇九年の始め、格別に嚴しい長い冬が續いたので、石炭の需要は通例の時よりも大であつた。扨て生產が、人間の使用するものを供給し、人間の欲望を充足すると云ふ目的を追求するとしたならば、その冬には他

の年よりも多くの石炭が、鑛坑から運搬されねばならなかつたであらう。ところが獨逸では、一九〇九年の始めの四ヶ月には、一九〇八年の同じ時よりも、石炭は二百萬噸以上も、さうして褐炭は二十萬噸以上も、ヨリ少なく鑛坑から運搬されたことを、統計は示してゐるのだ！　これは何故であるか？　當時は一九〇七年から翌る八年にかけての恐慌の餘波がまだ芟除されないし、從つて勞働者の失職するものもまだ多くあつたので、數十萬の人々は石炭を熱望しつゝも、それを買ふ所の金を少しも有たなかつたからである。そこで彼等は凍えつゝ寒い部屋に座つて居らねばならなかつたし、資本は石炭を鑛坑から運搬することを制限した。何故なれば、資本が商品の賣却に依つて得やうとするところは、代價の支拂即ち利潤であるからだ。

資本主義的生産の本質は利潤を造らんとする欲望に在る、さうして全體の生産が利潤産出の目的に局限されてゐると云ふ此の事實は、社會民主々義的の主張によると、其處から勞働者階級の多くの苦痛が涌出するところの源泉である。

以下吾々は此の主張を證明せねばならぬ。

吾々が今日在るがまゝの生産を觀るならば、最も重要な生産手段として、機械が目につくであらう。吾々は機械の時代に生活してゐるのだ。勿論今日と云つても、機械が決して唯一の生産手段ではなく、機械以外に他のものがあつて、多くの仕事は依然として機械なしに行はれてゐる。が、機械は確定的、決定的の生産手段であり、それは總體の生産に、從つて全體の時代に、特別の印象を與へるものである。

然らば機械とは何う云ふものであるか？——それは本來、ヨリ少ない勞働でヨリ多くの生産物を産出することを、吾々に許した所の一機關である。だから、勞働を容易くし、勞働時間を短縮し、富を增大するための手段であり——萬人のための祝福である。

ところが、資本の手中に在つては、機械は少し之と異なつてゐる、卽ち利潤を造

り且つ増大する爲の手段である。さうして此の小さい附けたりの事情が、萬人の爲の祝福であるべき機械をば、勞働者階級に對する恐しい呪ひとして仕舞つた。

始めて機械が使用されたのは、英國では一八〇〇年頃で、その直接の結果は婦人勞働並びに幼年勞働であつた。それ以前には、婦人勞働並びに幼年勞働と云ふものは、此の言葉が今日有つてゐる意味に於ては、決して存在しなかつたのである。勿論以前から女も常に働いてゐた。彼等は家政を支配しつゝ、織物や編物や又は蠟燭などのやうな、吾々が今日商店で買つてゐる多くの生産物を家庭内で製造し、さうして未婚の女は既に中世又はそれ以前に於ては、獨立した職業勞働に依つて、彼等の生活資料を獲得してゐた。同樣に子供も勞働をしてゐた。彼等は原則として早く見習奉公に上り、さうして此れは、七年又はそれ以上の長い間、彼等が一人前の職人に敎育されて仕舞ふまで、繼續したのである。

併しながら此處で問題としてゐるのは、全然異なつた或るものである。此處では、

家族の生計を補ふためにしてゐる、既婚の女及び未丁年者の賃銀勞働が問題となる。さうして此れは次のやうにして發生したのだ。

機械が使用されるまでは、生産は全然勞働者の人格に依存してゐた。仕事に成功するためには、一定の肉體上の力や、道具の使用に關する一定の程度の技能と練習や、又は原料などの取扱ひに關する一定の程度の知識が必要であつた。此等は原則として成年者のみが成し遂げてゐたやうに、長い成長の道程が必要であつた。さうして夫れに應じて、彼等には、家族や子供をも養ひ得る程度の相當の報酬を支拂はねばならなかつた。

今や機械が出現して、――直ぐに總てに亘つてゞはないが、多くの產業部門に亘つて――體力や種々の技術を不用にした。作業の有らゆる纎巧や、抵抗に對する有らゆる征服は、最早や人間には屬しないで、鐵の器具に屬することになつた。彼等には只だ、機械の監視や、又は特別の技術が無くても、槓杆の作用に依つて行は

れ得るやうな、機械の操縱のみが殘された。だから、男子の代りに女子や子供を使ふことが先づ技術的に可能になつた。果して此の可能は事實となるに至つた、何故なれば、女子や子供は男子よりも安い賃銀で働く上に、女子や子供を使用すれば、依然勞働に從事してゐる男子の賃銀をも低減させ得るからである。蓋し男子は今や全體の家族を養ふ必要なく、家族は自分で彼等の生活資料の一部分を獲得し得るに至るからだ。ところでヨリ少ない賃銀はヨリ高い利潤を意味するものだから、そこで資本は、女子や子供の大群を工場に追ひ立てるやうになつた。斯やうなことが彼等に如何なる影響を及ぼしたかは、既に一八〇四年——機械が使用されてから僅かに數年を經た頃——に、英國政府が、勿論何の助けにもならなかつたが、幼年保護法を制定すべきだと考へた事實を見ても分るのである。一方では女子や子供の勞働によつて、勞働者階級の家庭生活が根本的に破壞された。

機械——それは本來勞働時間を短縮する手段である——の使用から生じた第二の

結果は、勞働日の限りない延長であつた。既に早くから、殊に十八世紀を通じて、資本は引續き、勞働者の日々の勞働時間を延長しやうとしてゐたが、併し之は資本に取つて旨くいかなかつた。ジョン・レーは、一八九四年に發行した彼れの『八時間勞働日』【註二】と題する論著に於て（一頁乃至九頁）、『八時間勞働日は英國にあつては決して新しいものでない、比較的大經營の或るものでは、それは既に百年前から、從つて一七九四年から、一般的に行はれてゐた』と述べてゐる。アダム・スミスの記述（一七七六年に發行された、彼れの有名な『諸國民の富の本質及び原因』と題する論著に載する所の）によると、當時石炭坑夫に取つては、一日八時間が通常の勞働時間であつたことが分るであらう、さうして彼れの陳述の正しいことは、一七六五年にイングランド並びにスコットランドの鑛山を視察した、ガブリエル・ヤールスなる鑛山技師の報告によつて確證されたのである。ヤールスは、坑夫がスコットランドの二つの坑層では七時間乃至八時間を、さうしてニューカッスルの二

つの坑層では六時間乃至七時間を勞働してゐた、と報告してゐる。ヂョン・レーは同樣のことを農業に對して確めたのである。イングランドの仲仕は十八世紀では、稀に一日に八時間から九時間以上を勞働したが、これは農夫に就いても同じことである。一七九〇年頃イングランドの大部分では、農夫の勞働は、只朝の六時又は七時から午後の一時又は三時まで續くのが通常であつた。さうしてヂョン・レーは工業に關しては、一八三三年の議會に於ける工業委員會の公用文書に依つて、一七五〇年頃にあつては、例へばノッチンガムの靴下製造業では、一週間の中たつた五日のみ十時間宛働かされて、殘る土曜日は自由であつたことを確めてゐる。

【註一】獨譯一八九七年、Weimar, Felber.

勿論資本に取つては、かやうな短い勞働時間は決して正當でなかつたので、資本は有らゆる手段を以て、勞働時間の延長を强ひやうと企てた。その事に就いて、政府の法律なり命令なりは、大きな役割を演じたのである。既にエリザベス女王の時

代（一五五八年――一六〇三年）に於て、政府は日々の勞働時間を十四時間又はそれ以上に確定したが、ソーロルド・ロージャーズの主張してゐるやうに、【註二】『かやうな處分は通常と思はれなかつた。』カール・マルクスも亦（資本論の第一卷で）、資本が今よりも數百年の昔にあつては、政權の發動によつてさへも、何等の長い勞働時間を强ふることが出來なかつた、多數の證據を提供してゐる。彼は云ふ、『略ぼ十八世紀の間は、英國では資本が、まだ勞働者の全體の週を占領することは出來なかつた。』【註三】寧ろ人々は一週に四日乃至五日のみを働いたのである。

【註二】 Thorold Rogers, Die Geschichte der englischen Arbeit. Stuttgart, Dietz, 1906.

【註三】 Karl Marx, Dae Kapital, Bd. I, Kap.8,5,

斯やうな事情は、十八世紀の終りまで卽ち機械の使用されるまで續いたが、機械の使用されてからは、直ぐに大きな變化が始まつた。機械につぎ込まれた莫大な資本は、資本家の希望――機械を利用し、さうして恐らくは又、一瞬間たりとも機械

を遊ばせないとの――を、著しく增進させねば止まなかつた。又機械は同時に、仕事の成功を勞働者の人格から獨立させたから、機械は勞働者に長い勞働時間を强ふる手段となつたのだ。何故なれば、これに從はない者は、容易く誰か他の者によつて置き換へられることが出來たから。これが正に、機械の時代を以前の時代から本質的に差別するものである。以前にあつては、勞働者が資本家を賴つてゐたやうに、資本家も亦勞働者を非常に賴つてゐた。勞働者が欲しなかつたものは、資本家も亦欲しなかつた、さうして資本家は、同じ技倆や體力や又は能力などを有つ他の勞働者を見出すことが確かでない限り、勞働者を容易く罷免することは出來なかつた。が、今や機械は、これら總てのものをば不用にし、又各人は機械の使用に必要である二三の技術を直ぐに學び得るやうになつた。かくて、本來は勞働を短縮すべき機械が、資本の手中にあつては直ぐに、利潤增大の要具として、勞働時間を恐しく延長する手段となつた。ヂョン・レーは此れに關して次のやうな意見を吐いてゐる

（七頁）、

『かやうに過度に長い勞働日は、實に工場制度から一歩づゝ現はれた結果であつたやうに見える。高價な機械を備へつけた人には、機械を一瞬間でも遊ばせて置くのを見るのは不愉快であつたから、人は勞働時間をば最初は十二時間、次いで十三時間、十四時間、さうして屢々十六時間まで延長した。食時々間の休息さへも、彼等は不愉快に考へたのである。工場法改正案（一八六七年）の當時マンチエスターでは、晝飯を食ふための一時間を除いては、朝の五時から夜の九時までブツ通しの仕事が通過した。極く甘くいつたところで、人々は立ちながら朝飯を食はねばならなかつたし、又彼等は食事中も機械に注意してゐたのである。』

一八六〇年ノツチンガムでは、議會に請願書を送つて、男子に對する日々の勞働時間を十八時間に引き下げるやうに願つた。カール・マルクス【註四】によつて引用された此の事實をば、吾々が認めねばならぬとは、何んと云ふ恐しいことだ！【註五】

【註四】 Kapital, Bd. I, Kap. 8, 3. これは、一八六〇年一月十四日、ロンドンの一新聞,,Daily Telegraph"から引用されたのである。

【註五】 詳細は Julian Borchardt, Grundbegriffe der Wirtschaftslehre, 四五頁以下參照。

ところで斯やうな事情は、結局長く續かなかつたが、併し斯やうな過度の不法によつて、國民の生命力は根こぎ害せられた。既に述べたやうに、英國政府は十九世紀の初めから、勞働時間に干渉するやうになつた。從來引き續いて、勞働時間を延長するため種々の法律が發布されてゐたから、今やその反動が來たのだ。法律は三四十年から、日々の勞働時間を短縮させる爲に續々と發布された。最初其等は全く努力がなかつたが、勞働者は只、漸次彼等の勞働組合を造つて、資本家の掠奪に對抗するための、又少くとも其の法律の部分的履行を强制するための、合法的手段を見出したのである。が、英國資本家自身の極めて健全で實際的な性癖が助けなかつたならば、萬事は到底甘くいかなかつたであらう。彼等資本家は――假令やつと數十年の長い經驗の後とは云へ、――彼等自身の金錢上の利益が、かやうな法外な

勞働時間によつて害せられてゐた、ことを悟つたのだ。ヂョン・レーは彼れの論著（九頁）に於て云ふ、『最近六十年の間に、吾々に取つて漸次ではあるが、勞働時間を容赦なく延長してゆくことは、それは、英國の勞働者群の身體から殆ど心臟を喰ひ取つて仕舞ふやうなもので、工場主自身の金錢上の利益から考へても非常な間違ひであつた、ことが明かになつて來た、自分が機械裝置に拂つた損害を取り戻さうとあせりつゝ、工場主は事實に於て、彼等が所有する最も高價な機械』、卽ち人間の勞働力を『荒廢せしめたのである。』經驗は、價値の產出であり從つて利潤の產出である勞働力の給付は、只だ勞働の長さにばかりではなくて、又その强度にも倚據するものであることを嚴肅に敎へた。實に、人間が、十六時間も機械の傍に立ち續けるならば、彼は其の次の朝には、既に肉體上並びに精神上疲れ果てゝ、勞働に就かなければならぬので、假令彼がその仕事を好むにしても、日々八時間だけ働いて、その間十分に休息して氣分を爽快にしてゐた場合ほどに、强度に働くことは出來ないの

だ。

此等の事實は、獨逸の資本家が甚しい無知に耽つてゐた爲に、今日になつても猶洞察しやうとしないのであるが、それをば、大規模で商業上抜目ない英國の資本家は、既に一八六〇年代に十分に感知したのだ。で、彼等は、勞働時間の短縮に反對することを止めたので、それ以來英國にあつては、過長の勞働日の時代は過ぎ去つた。（獨逸に於ける一九一八年の革命は、悲しい事にはまだ一度も、一般に八時間勞働日を强行することは出來なかつた！）と云つて、英國の資本家が之を行つたのは、社會的又は人間的思慮からではなくて、寧ろ商業的利益からであつた。なる程、彼等は勞働時間を短縮したけれども、それは、過長な勞働時間が勞働强度の減少によつて彼等の利益を害したからだ。言ひ換へると、彼等は、勞働の强度を適當に增進させやうとして其れを行つた迄である。だから時間を短縮したのは、彼等の洒落事ではない。彼等は、勞働者が今や短い勞働時間に於て、以前の長い勞働時間に於てよ

りも、遙かに多くの物を自分等に給付することを望んだのである。さうして機械は再び、これを强行する手段をば資本家に手渡した。そこで人々は、益々速かに機械を廻轉させたから、勞働者は機械に仕へるために益々多く精神的並びに物質的の力を費さねばならなかつたし、從つて個々の勞働者は、益々多く機械に仕へるやうに强ひられた。かくて、機械の進步と勞働者數の減少とは、勞働の强度を增進させる手段であつた。之れに就いて二三の例を擧げて見やう。

勞働者（又は婦人勞働者）は紡績機械の側にあつて、絕えず運轉する機械に追從しなければならぬから、彼は休みなく一米乃至一米半の長さを往き來しては、少し解けかけた麻糸を結び直すために、機械の側を狂奔的速力で廻轉する總ての紡綞に注意せねばならぬ。個々の機械に紡綞を增加したから、忽ち勞働はヨリ强度のものとなり、從つて機械は最も生產的となつた。紡綞は八十又は百二十から二百四十又は其れ以上の數に增加し、それと同時に機械は益々速かに運轉された。紡績機械が

十二時間の勞働時間內に運轉する道程を見積ると、一八一五年では只だ八英哩に過ぎなかつたが、一八三二年には二十英哩そこ〱となつた。又一八二五年には十二時間內に千六百四十回の運轉をしてゐたが、一八三二年には同じ時間內に四千四百回の運轉をするやうになつた。蒸氣機關は一八一九年には一分に六十を打つてゐたが、一八四二年には既に百四十を打つやうになつた。一八五六年から一八六二年に亘つて、英國の絹物工場では次の變化が起つた。それは紡綞の數は二十七パーセント、機械の數は同樣に十五半パーセント增加してゐるのに、斯くも非常に增加された機械に仕へねばならぬ勞働者數は、同じ時の間に七パーセント減少したのだ！ところが、此の非常に減少された勞働者數の中には、子供の數が增加してゐる！

【註六】

【註六】 此等の事實が、又ヨリ多くの他の事實が、英國の工業に關する公文書から、マルクスによつて引用されてゐる。Kapital, Bd. I, Kapitel 13.

かやうに著しく增進された勞働の强度に伴うて災難も亦增加し、勞働者の生命と

勞働力とが極めて速かに破壞されて仕舞ふのは、云ふまでもない事である。かくて人々は勞働者となつた以上は、既に四十五で『あまりに老い』て、彼等には何の職業も、從つて何の生活資料も、最早や見出すことが出來ぬ境遇に落ちてしまふ、何故なれば、彼等にはもう十分の給付能力がないから。誰しも今日まで、或る敎授や或る醫者や或る說敎師や又は或る銀行頭取を見て、彼等が四十五で、職業に對して『あまりに老い』てゐると、思うたことは無かつた。かくて、本來は勞働を容易くする手段たる機械が、資本の利潤要求のために、勞働を最も恐しく困難にする一の道具となつたのである。

で、利潤の生んだ直接の結果として既に示されたものは、――婦人並びに幼年勞働と其の結果である家庭生活の破壞、日々の勞働時間の延長、勞働の堪へられない苦痛――である。

併し機械は、資本の手中にあつては利潤增進の道具となつて、益々勞働者の生活

に喰ひ入つた。それは、勞働者から有らゆる生活内容を奪つたのだ。機械は人間から其の本來の活動を取り去るものだから、その本質には、勞働を簡單にし從つて其れを荒廢させるものがある。只だ、槓杆を動かしたり、石炭などを注ぎ入れたりする勞働は、精神に何物をも捧げることは出來ない。併し、そのため必ずしも、生活が荒廢される必要はないが、事實は正に反對だ。若し勞働が簡單であつて、誰しも直ぐに出來るものであれば、人々は互に交代することが出來る。來る日も來る年も極く簡單な手仕事を追ふのみが、或る人の『一生の仕事』たる必要はない。例へば毎日一時間宛總ての者をその勞働に就かすことが出來、さうして他の者が彼れと交代することが出來るならば、機械は一日に十二時間も十八時間も廻ることが出來て、而も尚總ての人々に取つては、他の有要な、快活な仕事に就く時間が殘るであらう。

【註七】若しも勞働を以て、その本來の目的であるところの、欲望の滿足のみに役立たさうとしたならば、吾々は勞働を以上述べたやうに組み立てることが出來たし、

又さうしたことであらう。が、さうしたならば、資本の利潤は極めて少なくなる！蓋し機械の所有者は、從業勞働者の各個人に對し、之に相應する賃銀を支拂はないで、何うして斯やうな勞働交代の制度を採用することが出來やう？　が、若しさうしたならば、賃銀の合計額が今よりもずつと高くなるから、其れに伴つて、利潤はずつと低くなるであらう。かやうな譯で、利潤は勞働者の生活を荒廢させるものである。

【註七】勿論、これは總ての機械に當嵌らないが、多くの機械に當嵌まる。例へばショーディの打綿機に襤褸を投げ入れるのは、誰でも直ぐに出來ることであるが、若し勞働が、例へば機關手に於けるやうに、ヨリ多くの專門知識と技倆とを必要とする場合には、その勞働は面白くもあり有意義でもあつて、生活を殆ど荒廢するものではない。

下層勞働者に取つては、特別な能力を有つ必要は少しもなく、又彼は何も學ばなかつたし、何かを學ぶ必要もないから、さうして此等沒趣味な活動が彼れの全時間を食み、彼れの精神と肉體とを鈍くしてゐるから、彼れには自分の力で何かを學ば

うとする暇も元氣も殘されない、【註八】故に彼は只、無產者生活の濁つた灰色の絕望のみを有たねばならぬ。個性は全然不用のものであり、幾分かは有害のことさへもある。如何なる勞働者が如何なる地位に立たうと、それは全く無關心である。各人は個性としてゞはなくて、寧ろ數として計算される。故に其處からは、未來に對しても、全生活に對しても、かの荒寥たる絕望が生れて來る。努力しがひのある目標が、一度でもほのめいたことはない。彼はほんたうに二十年又は二十五年、暮して來たと云ふだけである。

【註八】ゾラが（彼れの『勞働』と云ふ小說で）、十六歲の汽鎚手に就いて描いた、かの感傷的な描寫を考へて見よ。

さうして又、個人的自由の褫奪も同じ原因から出てゐる。本來。多數人が共同して何事かをしやうとする時には、各人が自分の手腕ごほりに行ふことの出來ないのは尤もである。其處では共同的の計畫が確立されねばならぬし、また各人は其れに

服從せねばならぬ。扨て機械は本來多數人の共働を必要とする裝置であり、且つ又近世の工場は、精密に組織された有機體を形成し、その中にて多數人の活動が精細に決定されつゝ關係し合ふのであるから、各個人が全體に適應してゆかねばならぬのは、云ふまでもなく自明のことである。が、機械並びに工場全體は、資本家的企業家の個々の私有財產であつて、彼は只管利潤を生む目的の爲に其等を經營するものであるから、勞働の計畫は、彼れ一個人の個人事業となる。彼は只一人でその計畫を決定するのであるから、それは勞働者全體に取つては、法律のやうな命令力を有つてゐる。勞働者は果して其れを理解してゐるか何うか顧みられない、否彼等は一般に、全體の計畫に就いては何事をも聞き知らぬ。更に各人に取つては、彼が爲さねばならぬ所のものが、果して如何なる目的に役立つものであるかを知らない儘に命ぜられる、さうして監督長や、職工長や、其他の資本家の代表者が、彼れを勵ましたり監督したりせねばならぬ。かくて彼れの全體の勞働は、絕えざる服從とな

り絶えざる隷屬となる。が、勞働は彼れの全生活を滿すから、それによつて個人的自由は、彼れの生活から全然奪はれて仕舞ふ。尙ほ吾々は續いて、如何にして且つ如何なる理由から、隷屬と不自由とが勞働時間を越えて、極めて一身上の私的生活にまで立ち入るかを見るであらう。

若し吾々が更に失業、卽ち勞働者の生活に於ける彼の恐しい刑鞭を注意して見るならば、失業は——婦人並びに幼年勞働と同樣に——一般に機械時代の出現以來始めて存在せることが、極めて明かになるに相違ない。勿論失業は以前にも旣に存在した、さうして時々、例へば三十年戰爭の間や又はその後に於けるやうに、失業が多量に出現したこともあつた。が、失業はその時にあつては、戰爭や、不作や、又は流行病のやうな、特別な或る不幸の結果であつた。それは經濟生活の正常な進行の中に起る一つの擾亂であつた。之に反して失業は、十九世紀の始めから全く別種の性質を帶びて來た。吾々はそれ以來、周期的にやつて來る全般的の失業（產業恐

慌）を見る、さうしてその前後の期間には、常に一の『産業豫備軍』が、卽ち失業勞働者の偉大なる群れが、存在する。失業は、其れが正常に働く時は、經濟生活の正常の現象に屬するのである。

又機械の使用は利潤の增進を目的とし、機械の本質は元來勞働を節減するにある。ヨリ少ない勞働でヨリ多い生產物の產出さるべきが、機械の目的であり、機械存在の理由である。だから機械は萬人のための祝福であつた筈であり、それに依つて解放された勞働者は、彼等自身の利益のために、引いては萬人の利益のために、他の有要な仕事に就くことが出來た筈だ。が、此點に就いても、機械は資本家に屬し彼れの利潤を增大すべきものとなつてゐると云ふ事情が、矢張り邪魔になつてゐる。利潤のために、その所有者のために、機械は勞働者を、從つて勞銀を、節約せねばならぬ。だから過剩勞働者は直ぐさま罷免せられ、街上に曝され、貧窮と不幸とに委ねられる。資本家は、勞働者が自分のために働かぬやうになつた時は、最早や鐚

一文も彼等に支拂ふことはしない。

之れに依つて同時に、資本家にもう一つの利益が生ずる、卽ち、絶えず多量に存在する失業者——女子や子供をも加へた——が、彼等自身の競爭によつて勞銀を引き下げることである、かくて又、勞働者階級の貧窮は、資本家的利潤經濟の直接の結果として現はれる。

*　*　*

かくて上述の所に依ると、——勿論非常に短簡であつたが、——勞働者階級の社會的不幸の原因たる總ての惡は、利潤卽ち資本家的生產の結果であると云ふ論證が齎されたであらう。さうして、此の不幸を排除するためには、人間の意志へ或る直接の影響を及ぼすことが必要ではなくて、寧ろ資本家的生產の排除が必要であると云ふ結論が生れて來る。

これこそが、社會主義の有らゆる方面に亘る根本思想である　此の根本思想に、

更に發展する所の思想過程と問題との全列が、自然のまゝ直接に結び付くのだ。

第四章　空想的及び科學的社會主義

カール・マルクスによつて創設された近世社會主義――その教義をば、此書で述べやうとするのであるが――は、人も知るやうに、科學的社會主義なる名稱を導き出した。此の名稱は彼れの說を、他の社會主義的理論から、殊に所謂空想的社會主義から分つ所のものである。先づ吾々は、兩者の間にどんな關係があるかを觀察しやう。

一樣に總ての社會主義的理論には、目的――卽ち勞働者を貧窮と不幸とから解放せんとするところの――がある。更にその理論には、貧窮の源泉は人間の意志の中には存しないで、人間が生活するに際して入り込む所の環境と生活關係との中に、卽ち資本主義的生產の中に在る、と云ふ共通的の信念がある。故に一樣にその理論から、不幸を排除するには、資本主義的經濟の排除が必要欠くべからざるものであ

ると云ふ結論が生れて來る。

以上述ぶるところは、社會主義者の一致する見解であり信念であつて、彼等をその敵手から卽ち有產者から、區別する所のものである。此の見解と信念とを分たないものは、又これらを誤りであると信ずるものは、只その一點のみで、彼は旣に社會主義者でない。

併しながら、嘗て數十年の間、環境は人工的に變ずることが出來、從つて資本主義は人工的に排除せられ得ると信じた、多くの社會主義者があつた。彼等の考へる所によると、資本主義的にあらざる人間社會や、利潤を認めざる人間社會が、如何なるものであるか、又そのやうな社會は啻に存在し得るのみでなく、如何に資本主義的社會より立派なるものであるかを示すのは、何よりも必要である。彼等（空想的社會主義者）は、現存する社會狀態の正確なる描寫と批評とに次いで、自分等にとり最も切迫したる問題は、一の社會主義的社會組織の典型、卽ち『社會主義の未

來國』に關する計畫を發表して、人々を乘氣にさせるにあると考へた。先づ宣傳によつて、更に出來得べくんば生きた實驗によつて。このやうにして始めて、人は理性を獲得し、此の理想の完全であり且つ卓越してゐることを認識するであらうし、又このやうな社會主義的國家に於ては、啻に不幸な人や虐げられた人ばかりでなく今日の富める人までも含むところの總ての人が、遙かにヨリ善く生活し得ることを洞察するであらう。さうしてさうなれば、このやうな未來國は、法律や命令やの改正によつて實現されることになるであらう。かやうに彼等は考へた。

かの社會主義者エンゲルス【註】は次の如く書いてゐる。

『社會は只だ欠陷のみを示した。此等の欠陷を排除することは、思慮ある理性の職責であつた。さうするには、一の新しき、ヨリ完全な社會秩序の系統を發見し、さうして之を外部から、宣傳によつて　又出來得べくんば實驗の雛形を示すことによつて、社會に强ふることが必要であつた。』

【註】 Friedrich Engels, Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft. Ausgabe 18 1 (Berlin, Vorwärts-Verlag), S. II.

だから此派の社會主義の特徴は、未來國の典型を示すことに　彼等の主要なる職責を見出さうとするに在る。このやうな未來國に關しての空想を、人は外國語でユートピイ（utopie）と呼ぶ。（これは希語で、u は『新しき』を、topos は『場所』又は『何處にもない』と云ふことを意味する）。故に人は此種の社會主義を空想的社會主義と呼ぶ。

扨てマルクスによつて創設された、吾々の近世社會主義は、之とは全然正反對である。總ての未來に關しての空想は、マルクスの屢々非難する所である。未來に關しての理想化又は空想化は、彼れの與り知るところでない。彼はしつかりと冷かに科學の基礎の上に立つ。故に吾々はこれを、科學的社會主義と呼ぶ。

併しながら、彼がしつかりと冷かに科學の基礎の上に立つとは、そも〳〵何を意

味するのか？

それを理解する爲には、吾々は先づ、科學とは何であるかを問はねばならぬであらう。

この疑問に答ふるのは、決して難しいものでなく、何等の科學的敎育を受けなかつた人にも、恐らく一瞥して分ることであらう。

科學（Wissenschaft）には、――それは文字の中にも含まれてゐるが、――先づ知識（Wissen）が屬するのである。然らば一體吾々は、何を知り得るのか？――第一に知り得るものは、事實、卽ち實際に存在し又は存在して居つた事物である。だから當然に、科學は事實のみを基礎とすべく、又その研究範圍は、未來ではなくて、現在及び過去のみに限られてゐるものだ。何故といふに、事實は未來の中にはなくて、現在か又は過去の何れかに屬するものだから。

故に吾々は何よりも先づ次のことを胸に止めねばならぬ。科學は、恐らく未來には

一度はあるかも知れない、あり得るであらう。又はあらねばならぬことに關しての空想化と豫言とには關係なくして、現在に實在するもの、並びに過去に實在したるもの、のみに關係する。事實に付いての知識、卽ち現在又は過去に關しての知識から、總ての科學は出發せねばならない。

併し斯く云うたのみでは不十分である。人は事實以外の、ヨリ多くのものを知ることが出來、又事實の種々の關係をも知ることが出來る。それは、人が通常原因及び結果と呼んでゐる所のものである。

終りに臨んで、科學には尙第三のものがある。卽ち、それ無くしては科學が成立しない所の、事實及び其の關係に付いての知識を。人は如何にして獲得することを得るか?――曰く其等の知識は探究され、研究されて始めて得られる。かくて所謂研究も亦、何れの場合を問はず、本質的に科學に屬する、何故といふに　それなくしては知識は全く存在しないから。

そこで三つの必要物が、科學の本質を構成する譯だ。

1　事實に關する知識、

2　事實の諸關係に關する知識、

3　絕えず發展し行く知識に對する研究、

故に科學は全然事實の上に、卽ち現在及び過去の上に立つて、未來に關する總ての空想化を排斥せねばならぬと云ふ結論になる。

勿論、科學は未來と全然沒交涉であつて、未來に關する總ての考察は、如何なる場合に於ても、非科學的であるが如く解してはならぬ。寧ろ科學は未來のことも取扱ふと言つて可い。ひとり社會科學がさうであるばかりでなく、一切の科學が未來を取扱ふ。只茲で問題になるのは、科學が如何に未來を取扱ふかの問題である。未來を取扱ふものには、科學的のものと非科學的のものとがある。一例として擧げると、天文學（星學）の如きものは全く冷かな科學であつて、只計算と事實とによ

つて研究され、而も未來に起る所のものを豫言すると云ふことは、各人の知つてゐる所である。日蝕や月蝕や又は彗星などの諸現象は、幾百年幾千年の間　正確に豫言されて、未だ曾て何人からも『非科學的』と攻撃されたことはない。他の總ての自然科學といへども、もつと狹い範圍に於ては、同じやうな巧みさで同じことをやつてゐるのだ。かの化學者は、レトルトの中で一定の原料を一定の狀態の下に混合すれば　何が起るものであるかを。正確に豫知することが出來る。

天文學者の外に、常に星によつて未來を豫知する他の人達、卽ち占星者とか卜者とか云ふ人達が居る。吾々は、彼等を科學と呼ぶことは出來ない。彼等の態度は非科學的だ。然らば彼等の行爲と天文學の科學的豫言との間に、如何なる差別が存するのか？

此の問題は至極簡單である。天文學者は何よりも事實を――卽ち、現に爲されつゝあり又は既に爲されたる、星の諸々の運行や　それらの運行から生ずる諸々の關

係を――正確に認識した。さうして彼は總てのものを正確に知つた後に、更に此の事實に關する知識から――若し途中で、何等か未知のものがやつて來なかつたならば――未來の運行の上に、一つ〳〵一定の結論を下すことが出來る。一つ〳〵の一定の結論をする、只それだけのことである。之に反して占星者は、總てこれらの事物に付いては何等の知識もなく、たゞ徒らに、青い空を眺めつゝ豫言するのみだ。

これで明かに差別がついた。科學的に未來を取扱ふと云ふのは、現在並びに過去(卽ち事實及びそれから生ずる種々の關係)の正確な知識の上に立ち、且つ此等の知識から一つ〳〵一定の結論を引き出すことに、其の仕事を限定してゐる場合のことである。

勿論、以上述べた總てのことは、科學的社會主義にも通用する。科學的社會主義が未來を取扱ふべきは、云ふまでもないことだ。若し未來との關係を『非科學的』として排斥しやうとするならば、只その一點のみで、科學的社會主義は、自己の職

責から逃れたことになるであらう。科學的社會主義は、一の科學だと云ふ信仰が非常に廣く行はれてゐるが、併し實際は決して科學ではない。只それは科學の上に立脚してゐる、それ故『科學的社會主義』と云ふ名稱を有つてゐるのは勿論正當だ。併しそれ自身は決して科學ではなく、未來に突き進むところの、一の活動である。

社會主義と社會科學との關係は、技術と自然科學との關係と同一である。科學の職責は只だ一である、それは眞理を探求すること、卽ち眞理の影響する範圍に現存するところの、種々の關係を確定するにある。卽ち數學、物理學、化學の如きもので、それらを媒介として、吾々は、知識の一の領域を獲得する。然る後に技術家が出來て、何か或る實際の仕事をするために、例へば橋を造り又は電氣軌道を敷くために、科學によつて獲得された此等の知識を利用するのである。同樣に社會科學（經濟學、統計學、史學など）の職責は、人間の社會生活に實在するところの　種々の關係を確立することに、はつきりと限定されてゐる。卽ち社會科學は知識を媒介し、

只だ事實を示すだけのものである。之に反して社會主義は、社會科學の導きたる知識を利用して、一定の問題を解き、更に未來にまで突き進まねばならない。

從つて社會主義も、未來を取扱はざるを得ない、只それは科學的であらねばならぬ。卽ち、吾々が前に說明したやうに、社會主義は現在並びに過去の事實に關する知識の上に立脚し、且つそれらの知識を基として、未來の上に一つ〳〵一定の結論を引き出すことに、自らを限定すべきものである。

上述の所から結論すると、吾々が科學的社會主義を了解するには、何よりも先きに、未來を全然遊戯から取り去らねばならぬ。吾々は未來から始めてはならない、何故といふに、さうすることは、占星者や豫言者に倣つて、青い空を出鱈目に判斷することになるであらうから。それよりも吾々は、現在並びに過去の事實に關して、出來るだけ正確な知識を創るやうに探求せねばならぬ、かくて、吾々がそれを摑んだ時こそ、始めてそれから、如何なる結論が未來の上に引き出され得るかを問題とす

べきである。

吾々が既に研究して來たのは、此の意味に於てゞあつた。吾々はこれまでの章に於て、現代の種々なる社會的事實を觀察し、然る後社會問題の心髓をなす所の、勞働者階級の苦痛を叙述し、その源泉として、吾々は最後に資本主義的生產を認めたのである。

そこで吾々は、此の現代の事實の檢討へ、過去の研究を結び付けねばならないのだ。

第五章　經　濟　史（その一）

勿論、經濟史と云つても、吾々は、過去の總ての時代に發生した總ての社會的事實を、吾々の觀察の範圍に引き入れやうと考へる者でない。それらの事實は全然知られて居らないと云ふことを暫く措くも、上述のやうな研究を完成するには、最長の人間生活を以てしても、不十分であるほどに、極めて廣汎なものであらう。固より吾々は、知られたる過去の事實から、一定の撰擇を行はねばならぬ。卽ち吾々は此の廣汎な範圍から、吾々の目的に取つて最も重要である所のものを探求せねばならない。

過去に於て資本主義が何うして發生したかは、明かに一個の問題である。此の問題の答案を探求すること――その點に、吾々の過去の研究が制限されねばならぬ。ところが、斯様に制限しても、此の宿題は依然として廣汎である。蓋し吾々は、

資本主義が何うして發生したかを知るためには、資本主義の前代に遡らねばならぬからだ。さうして其の生成を理解するため、吾々は更に、吾々の歴史的知識の及ぶ限り、一般に人間發展の最初にまで遡つて行かねばならぬ。

以下述ぶる所に於て、吾々は此の問題に關し、只一個の簡單な梗概――それは根本に於て、單なる示唆に止まる所のもの――を與へ得るに過ぎないことは明かである、さうして其れを深く究め且つ完全なものとすることは、根本的な專門の著述を利用する所の各人に殘されてあるべき問題である。吾々は此の場合深淵に落ち入らないため、斯く制限しても猶廣汎である所の範圍から、一定の、吾々に接近したる部分を擇ぶであらう、卽ち獨逸國民の社會史是れである。

* * *

我が紀元の始め頃に、又それよりも凡そ百年前に、獨逸人――羅馬人から日耳曼人と呼ばれてゐた所の――が、既に今日の獨逸國に住んでゐた。今日波蘭人やエン

ド人によつて占領されてゐる地方も、彼等の住んでゐた所である。彼等の營める經濟方法は、原始文化の一定の時代に於て、總ての國民に見出され得る所と殆ど同一のものであつた。それは所謂自己生産（Eigenproduktion）である。自己生産とは、各人が自己の使用する所のものを、自ら生産する狀態を謂ふ。彼等はまだ賣買に付いて毫も知る所はない。が、自己生産と云つても、それは各個人が自己の個人的欲望を充すため、自分一人で勞働するのを謂ふのでなくて、――斯樣な狀態は、一般に歷史の全過程を通じて存して居らないのである――寧ろ彼等が集團を成して、共同的に勞働することを謂ふ。このやうな集團が、ゲルマン族に於ては世帶であり家族であつた。だから、此の世帶の各員は共同的に勞働しつゝ、世帶が使用するものを造り出したのである。【註】　ゲルマン族は當時まだ完全な定住國民では決して無かつたが、固有の遊牧生活の狀態をば、彼等は既に越えてゐた。彼等は既にいくらか耕作をしてゐたが、それはほんの初期に過ぎなかつた。全土はまだ原始林で覆れ、

さうしてその中を多くのゲルマン氏族が絶えず漂泊うてゐた。それは、その後數百年も續いたところの、只一つの偉大な國民移動である。彼等は自已の食物をば、戰時の掠奪に次いでは、主として狩獵によつて、さうしてほんの僅かの部分をその折々の耕作によつて獲得してゐた。斯やうな場合では、田畑は共同して耕され、その收穫物は彼等の間に分配された。かくて羅馬の將軍シーザーは、吾々の紀元前五十年に、彼れ自身はゲルマン國に居つたと云つてゐる。シーザーより凡そ百五十年後に生活した所の、かの羅馬の文學者タシタスは、耕作地は毎年開拓者によつて、變る〲占領されてゐたと語つてゐる。が、彼は、少しも獨逸國に生活して居らないで、只風說に付いて語り、且つ又彼れの論著を以て特定した黨派の政治的目的を追求したのであるから、吾々は彼が事實として述ぶる所のものに對し：極めて注意深くあらねばならぬ。だから吾々は、ゲルマン族の經濟生活に關して完全に明確な洞察を有つ者ではなくて、只だ概略的なスケッチを描き得るに過ぎない。それに依ると、

ゲルマン族はその頃丁度、自己生產の狀態を少しばかり越えやうとしてゐたのである。

【註】誤れる觀念を豫防する爲め、既に他の國民との間には、原始的商業が存在してゐたと云ふことを言つて置かう。併しながら、その詳細は茲に述ぶる限りではない。そは總ての獨逸經濟史から學ぶべきである。

扨て吾々は、經濟史の全般を通じて最も重要な意義を有するところの、否一般に經濟史をば最も理解し得べきものとする所の一つの要素を、即ち人間の欲望は決して靜止するものでなく、寧ろ絶えず增進するものであると云ふことを、注意せねばならぬ。何故なれば先づ第一に、人間の數そのものが絶えず增加して行くから。一般に歴史上益々發展し來り、終に一の重要な地位を獲得した總ての國民に於ては、年代毎にその人口が全然規則的に增加して來たのである。これは云ふまでもないことだ、と云ふのは、靜止は歴史的衰退を意味するものであり、さうして斯やうな國民は、短日月――高々二三代――の後には、歴史から消えて仕舞ふであらうから。

で、一國民が歷史的に存在すると云ふ單なる事實は、卽ちその國民が絕えず增加して行くことを意味するのだ。——第二に、各個人の欲望は增大する。卽ち各個人が、後の時代にては前の時代に於けるよりも、多種多樣の欲望を有つに至ると云ふことに、正に文化の進步は存するのだ。

それだから、充されねばならぬ欲望も亦、法外に且つ速かに增大する。此の如く常に增大して行く欲望を充すためには、常に勞働の生產力が增加されねばならなかつた。卽ち人間は　滅亡に脅かされつゝ　絕えず手段及び方法——それは彼等をして、同量の勞働支出を以てヨリ多くの生產物を造らしめし所のもの——を發見して行かねばならなかつた。

斯くて吾々は事實、最古の時代より今日の時代に至る世界史の全過程を通じて、人間は絕えず倦む所なく、斯樣な手段や方法を發見すべく努力して來たのを見る。

此の道程の第一步は　分業 Teilung der Arbeit)であつた。人間は各人が總てのも

のを造る自己生産に止まつて居らないで、彼等は專門化した。卽ち一人がこれを造れば、他の一人は別のものを造るやうになつた。かくて種々の職業が形成されて、手工業（Handwerk）が發生したのである。

手工業は法外に長く續いた。例へば希臘人は、既に詩人ホーマーの時代――紀元前九百年――に於て純粹の自己生産を越えてより可なり久しく經つてゐた。が、羅馬帝國に於て、手工業が十分に發達したのは、やつと紀元後三百年乃至四百年の頃であつたから、此の間には、千二百年乃至千五百年の時間が過ぎてゐる。ところでその時、羅馬帝國はゲルマン族によつて征服され、ゲルマン族自身は、紀元五世紀及び六世紀になつても、まだホーマー時代の希臘人よりも、もつと原始的な狀態の下で生活してゐたのである。だから彼等のために、此の全發展は再び始めから繰返されて、彼等が十分に發達した手工業を造り出したのは、尙千年以上も後のことであつた。これはやつと、中世紀の終り、千五百年頃の事柄である。

之と關連して、一つの異なつた發展が起つた。吾々がもう一度自己生產に歸つて見るならば、其處では何物も買はれないと云ふことは——既に述べた如く——自明の事柄である。何故なれば、各人は自己の屬する團體の內に於て、正に彼が使用する所のものを見出すからである。ところが手工業が發生し、一定の程度まで擴張するや否や、人はひとりでに賣買を始めねばならなくなる。と云ふのは、若し一人が深靴のみを造つて、それ以外には何物をも造らないとするならば、彼は自分の欲望を只深靴の販賣によつてのみ償ふことが出來るから。勿論、獨逸の中世では、手工業者は最初主人の欲望のために働いて、自分の生活資料を主人から獲得してゐた奴隸であつた。が、分業によつて、彼等の生產力は益々高まつて行つたので、終に手工業者が、主人の使用し得る所より多くのものを生產し從つてそれらをば賣り始める時代となつたのである。

販賣は始めの間、手工業者の手を殆ど煩はさない。彼等は自己本來の活動である

生産の傍ら、それを片手間にやるのみだ。又彼等は・はけ口のため少しも困難を感じない。只だ、最近の隣人への販賣のみを取扱ふから、その需要をば、彼は大抵の場合正確に知つてゐるのである。さうして手工業者が奴隷の境遇を脱却し、多くの都市では支配階級にさへ成つてより後數百年の間も、彼等は組合を組織して、各個人に對しはけ口を正確に調節して來た。

併しながら、勞働の生産力は益々高まつて行き、賣られねばならぬところの、生産量は益々增大して行つた。販賣は益々多くの時間を要するやうになり、從つて手工業者に對し益々多くの損害をば其の生産的活動に與へた。同時に市場は擴大し、販賣は最近の隣人のみへではなく、他の都市や他の國へも爲されるやうになつた。これを行ふには、其の土地の欲望を一瞥する必要があり、從つて特別に商人的知識を必要とするものであるが、手工業者は一方で生産を營まねばならぬから、彼等は此等の事に沒頭する譯にはいかない。終に販賣は、特別に商人的才能をも必要とす

るに至つたのである。確かに或る人は、最善の時計を製作し得る堪能な時計工たることを得るが、若しも客が此の店に來るならば、恐らく前の堪能な時計工は大いに面喰つて、客が必要とする時計を出して、それを彼れに推めることは出來ないであらう。時計を造ると云ふことゝ、時計を賣ると云ふことゝは、別種のものである。卽ち兩方が理解されねばならぬし、又兩方が學ばれねばならぬ。

斯くて手工業者が、一般に販賣を其の生産的活動の傍でやれなくなつて、商人の仲介を必要とする時代が來た。

商人は旣に久しい以前から居り、最古の時代では、例へば羅馬人とか猶太人とかの外國人が居つた。九世紀及び十世紀になつては、此等の外國商人は、その間に造られた都市――元來、市をたてるために、四方を圍はれた廣場又は中庭に外ならなかつた所の――の內に、貯藏所や移住地を建て始めたが、その時特に猶太區も發生したのである。だから商賣は行はれて居つたのみか、旣に十分の繁榮に達してゐ

た。扨て商賣は益々多く自國手工業の製產物の販賣をも引きうけたので、終に其の職分は、主として外國の生產物を供給することゝなつた。

今や吾々は始めて、完全な商品生產（Warenproduktion）――序でながら、それは最初工業の爲のみに行はれ、未だ農業のために行はれなかつた――の時代に入る。手工業は其の全活動をあげて、益々多く販賣の欲望に應ぜねばならなかつたが、農業はまだ大部分生產者自身の欲望を充してゐた。當時の手工業者は悉く農民であつて、彼等は大部分、手工業の傍ら城壁の內部――とは云へ、屢々その外部にて營んだところの、彼等自身の農業の產出物によつて生活してゐた。が、農業も亦、その原料を手工業に提供することによつて、それは商業と關連することゝなり、從つて商業の影響に支配されるやうになつた。

ところが、手工業者の販賣と商人のそれとの間には、一の本質的差別がある。例へば靴工は、彼れの販賣行爲を靴の所有と共に始める。彼はそれを賣つて貨幣を變

得し、それを以て彼が必要とする何等かの他の商品を買ふ、それは新しい革である
こともあれば、一つのコート、一つの机、又は食物などであることもある。で、約
言すると、彼れの商行爲は次の如く現はれる。

商品——貨幣——商品 (商——貨——商)。

卽ち、彼は一つの商品を貨幣と交換し、さうして其の貨幣をば、更に他の商品と
交換する。新しい商品を獲得して、始めて彼れの商業は完結する。彼れの目的は、
自分で消費することの出來ない一つの商品を手放して、彼れの消費に必要な他の商
品を獲得することであつた。

ところが商人に於ては、取引は前者と正反對となつて現はれる。例へば茲に、靴
工より其の深靴の販賣を剝奪する所の、商人を擧げて見やう。彼は靴を賣らうとし
てゐるが、彼れの手には差當り一足の靴も無い。彼れ自身は、先づ第一に靴を買は
ねばならぬ。だから、既に出發點に於て、前者と異なつてゐる、手工業者は商品の

所有と共に取引を始めたが、商人は其れを貨幣の所有と共に始める。此の貨幣を獲得するため、彼は先づ靴を買ひ、さうして再びそれを賣る。だから彼れに取つては、此の取引は次の如く現はれる。

貨幣――商品――貨幣（貨――商――貨）。

手工業者は一つの商品を他の商品と交換した。貨幣は彼れに取つては、二つの異なる商品を互に交換するための、手段としてのみ役立つた。卽ち此の作用の目的は、彼れの消費欲望の充足である。

商人は一定の貨幣額を他の貨幣額と交換する。商品は彼れに取つては、手工業者の場合と正反對に、兩方の貨幣額に對する交換手段としてのみ役立つ。さうして此の作用の目的は、彼れに取つて如何なるものであるか？　今となつて見れば、第二の貨幣額が第一のそれよりも大であるべきは、自明の事柄である。確かに、彼が十マルクで靴を入手に渡すとするならば、彼は手工業者に十マルクを決して支拂はな

いで、恐らく八マルク位で濟ますであらう。それにも拘らず、手工業者も亦この取引で利益する。蓋し、彼は此の場合、靜かに自己の勞働に止まることが出來、從つて其の八マルクで、若しも彼が十マルクを得やうとすれば、莫大な時間の損失――販賣や、顧客の探索や、市場の需要の調査などが、彼れの上に惹き起すであらうところの――を引きうけねばならぬであらうよりも、ヨリ多くを利益するからである。

商人は如何なる場合を問はず、その全活動をあげて、貨幣からヨリ多くの貨幣を造り出す目的のみを追ふ。商業は商人に利潤を齎らすべきものであるから、商人は本來一個の資本家である。何故なれば、利潤を獲得するため使用される總ての富は資本であるから。

『されば商業の存するや、資本及び資本家がまた存在する。古代――フェニキャ、アテネ・コリント、カルタゴ、ローマ――に於ては、可なり發達した商業があり、從つて又資本と資本家とが存してゐた。古代のゲルマン族に於ても同樣であり、又

ハンザ同盟や、フッガー家及びヴェルゼル家の如き金持を有した中世に於て、特にさうであつた。だから昔から資本と資本家とは存して居つたが、まだ資本主義も資本家的生產も決して無かつたのである。

即ち、總てかの昔にあつては、資本は商業や利益などのために働いてゐたけれども、そはまだ生產に喰ひ入つては居らなかつた。そが生產に喰ひ入つたのはやつと中世の終り頃で、茲に始めて資本主義の時代即ち資本家的經濟並に資本家的社會が始まるのである。

* * *

ところで、此の變革の最も重要な原因こそは、手工業が舊態のまゝでは、最早や絕えず高まり行く商業の需要を充すことが出來なくなつたと云ふことゝ、之れと同時に、組合の親方が益々彼等自身の弟子との競爭をば避けることを考へるやうになつた、と云ふことゝであつた。オットーは、獨逸の手工業に關する、彼れの論著

頁）に於て次の如く云つてゐる。『彼等は此の目的を果すためには、組合加入の條件や、親方權の獲得條件やを、出來るだけ困難にしやうとした。徒弟や職人の支拂ふ可き入會並びに登記の手數料は、高められ、二重にされ、複雜にされた。彼等が親方に供給すべき僅かの酒代は、漸次彼等の仲間や其の家族に對し、燒肉や酒から成る高價な食事を與ふべき義務によつて置き換へられた。以後、「不正直」とは、自ら「不正直な」職業を營んだ人々のみでなく、又彼等の子供並びに子孫や、或る不正直者と何等かの血族又は姻戚の關係のある者をも謂ふやうになつた。縊死者を斬首した者や、不正直者と飲食した者や、又猫や犬を殺した者は、手工業を爲すことが出來なくなつた。ほんたうに、或る職人は、彼が仕事場で自分の傍に斃れてゐた子供を大膽にも救ひ上げたと云ふ理由で、親方權の獲得を根本的に拒否されて仕舞つたのである。』殊に、或る職人が傑作を造つた場合には、色々と奸計をめぐらして、彼れの親方權の獲得を妨害すべく企てられたのは明かである。『傑作は高價な材料よ

り造らるべきは當然であるのに、職人の命ぜられる仕事は、長い時間と過大の勞力とを必要とするやうなものであり、親方は　全く流行に外れて、賣ることの出來ない、作物の完成を望んだ、最も無意味で最も過勞な仕事が課せられたのである。けれども、組合の親方の子供や養子や寡婦は、總て此等の不正手段から除外されてゐた。

正直な組合の親方は、彼等が此の喰ひ止め制度を考へ出した時、極く狹く運用しやうとした。事實、彼等は最初のうち其の目的を達した。親方の數は低く保たれ、彼等が目前に見てゐた競爭は制限されて仕舞つた。が、丁度さうすることに依つて、彼等は自ら他の、遙かに危險な、さうして終に殺害的に作用した競爭を惹き起したのである。なる程、彼等は腕のある職人が親方になるのを妨げ得たであらう。が、彼等の生存すると云ふ事實は、何うすることも出來ないのだ。かくて、此等の人々——親方並みに手工業を善くしたが、併し親方に成ることが出來なかつた爲め、正當に生活をする譯にいかなかつた所の——から、多數の無産者が次第に發生して來

た。商人資本 Kaufmannskapital は、手工業がその增大して行く欲望を最早や充さなくなつた時、此等の無產者をば捕へたのである。丁度その時以來、商人は斯の如くパン無しになつた職人を雇ひ入れて、彼等を自己の利益のため、自分の仕事場で働かしめるやうになつた。玆に始めて、資本は直接に生產に喰ひ入るのだ。卽ち資本家的生產が發生するのだ。

旣に此の最初の最も原始的なる形態に於て、直ちに資本主義的生產は、手工業に勝れて居ることを示した。勿論資本家は最初から、手工業の場合よりも、大きな仕事場を立て、その中で一人ではなく、多數の、否出來るだけ多數の職人をば、働かしめた。彼は、各個人からは何も取立てた利益を得なかつたが、單なる共働卽ち協業(Kooperation)は、親方の個々の活動に比べてヨリ生產的であり、從つてヨリ廉價であつた。それに對する有らゆる根據を示すといふことは、(それらはマルクスの「資本論」第一卷、第十一章で明かに說明されてある)玆では餘りに廣汎に失するであら

う。吾々はそれを歴史的に確立されたものとする。玆で始めて、あらゆる歴史的起生（Werden）に關し最も深き內的根據を與へるところの事實が、卽ち共同的（集合的）勞働は個別的（孤立的又は個人的）勞働よりも多くの生產物を供給すると云ふ事實が、極めて明かに示されたのである。

此の點を出發點として、資本は自覺的に、益々進み行く勞働の社會化（集合化）に依り、その利得（生產力）を益々多く增進せしめる道程を辿つたのである。

資本は此の單純協業に長く止まつて居らないで、それは間もなく進んで、規律的共働となつた。吾々はその點を再びカール・マルクス（『資本論』第一卷、第十二章）によつて說明しやう。『彼等の手によつて一の生產物が仕上げられねばならぬ所の、種々の獨立的手工業を營める勞働者達が、同一の資本家の指揮の下で、一つの仕事場に結合される場合が其の一つである。例へば一つの四輪馬車は、車匠、馬具匠、裁縫師、錠前匠、帶匠、旋盤工、緣飾匠、硝子細工匠、畫工、漆工、鍍金師などの

如き、多數の獨立手工業者の勞働から成る共同生產物であつた。四輪馬車の手工的工場工業は、總て此等の種々なる手工業者を一の勞働場に結合し、其處で彼等は同時に協力する。……同樣に、布の手工的工場工業や、その他多數の手工的工場工業は、同一の資本の指揮の下に在る所の、種々の手工業の結合から生じたのである。が、手工的工場工業は、之と反對の道行からも發生する。例へば紙とか活字とか又は針とかを製造する者の如き、同一又は同種類の仕事をする多數の手工業者が、同一の資本によつて、同一の仕事場で使用される場合が是れである。此等手工業者のおのおのは、……」（最初のうちは）舊來の手工業的方法で引續き勞働するが、やがて外部の諸事情は、同一場所に於ける勞働者の集中並に彼等の勞働の同時性をば、異なつた風に利用させるやうになる。例へば、ヨリ多量の完成商品が、一定の期間に供給されねばならぬやうな場合があると、勞働は分割され、又同じ手工業者をして相次いで種々な作業を爲さしむる代りに、これらの作業のおのおのは、それぞれ他

の手工業者に割當てられ、その總體は同時に遂行される。此の偶然の分割は繰返されて、その特有の長所を發揮し、さうして次第に組織的分業となるのである。』

此の如く完成された資本家的手工的工場工業は、凡そ十六世紀の中頃から十八世紀の終りに至るまでの三世紀間を通ずるところの、事業の經營形態であつた。それが單純協業から區別される點は、マルクスの上述の說明が示すやうに、勞働の規律性である。その以前にあつては、資本家は只だ個々の勞働者を搔き集め、さうして彼等を多くの小さい仕事場に分ける代りに、一つの大きな仕事場に結合したに過ぎなかつた。それは只だ勞働者を機械的に集めたのである。だから其處から、ヨリ大なる勞働の生產力が發生したと云ふことは、或る意味に於て全く偶然的であり、又共働者たちの決して豫見しない所であつた。けれども時を經るにつれて、偶然的であり、單に表面的であつた勞働者の結合は規律的の結合へ、又機械的であつた結合は有機的の結合へ移つて行く。卽ちたゞの並行的勞働（Neben-einander-arbeiten）よ

り提携的労働（Mit-einander-arbeiten）となり、生産力の増加は、今や意識された目的となつたのである。

今や、個々の労働者の共屬性は、之を切り離すには、あまりに内面的であり、あまりに強くある。單純協業では、各個の勞働者は、總ての他の勞働者が造る所のものと、丁度同一のものを造る。一人の勞働者が餘計に來ても、又一人の勞働者が去つて行つても、それは、彼等自身やその事業の經營に對して、殆ど問題とならない。が、規律的分業より成る手工的工場工業では、全然趣を殊にする。吾々は、英國の國民經濟學者アダム・スミスによつて名高くなつたところの、十八世紀の後の三分の一年代に於けるピンの手工的工場工業の例を引用しやう。スミスはそれを次の如く（彼れの一七七六年に出版された論著『諸國民の富』の第一卷、第一章にて）說明してゐる。『一人の人は針金を引つぱり、他の一人はそれを伸ばし、第三の人はそれを細切し、第四の人はそれを尖らし、第五の人は、その上端――頭がつけら

れる所の――を研く。この頭を完成するには、二三の異れる操作を必要とする。頭をつけることは特種の一仕事であり、針を白熱することは又別の一仕事である』と。例へば吾々が此等の勞働者の列から、細切した針金を尖らす所の勞働者を取つて見るならば、彼が其の列の順序に於て、彼れの前に來る人と、彼れの後に來る人とに常に倚存してゐることは明かである。若し彼れに對して、彼れの前に來る所の人が針金の細片を十分速かに又十分善くして渡さないならば、彼は秩序的に勞働することは出來ない。同じく彼は、彼れの後に來る所の人――彼れから原料を受取るところの――に對して責任を負ふ。活字の手工的工場工業では、勞働者の相互的倚存性はもつと明かである、そこでは、マルクスの陳述によると、鑄工は一時間每に二千個の活字を鑄造し、分切工は四千個を分切し、磨き工は八千個を磨く。だから其處では、一人の磨工と二人の分切工と四人の鑄工とが共屬することになるから、彼等の一人が足並を亂すと、忽ち全經營は停止し、總てのものは損害を受ける。終りに、

英國のガラス手工的工場工業では、常に五人の人々が一つの竈の前で共働し、さうして彼等のおの〳〵は、それ〴〵異なる所の職務を行つたのである。此處では、共存の關係が最も密接である、何故なれば、若し此處で一人の共働者を缺き、又調子とか質とかに於て一致しない所があるならば、その他の人々は一般に何事も爲すことが出來ないから。が、事業の經營にはそれ〴〵の勞働者が必要であると同樣に、又勞働者の方もその經營から離れることは出來ない。勞働者は、單純協業にては、猶ほ一寸した僥倖によつて金持になることが出來、又傑作を造つて獨立手工業者となることが出來たが、手工的工場工業にては、自己に課せられた部分的作業を行ふ以外に、何事も理解する所がなかつた。彼は、例へて云ふと、最早や針の製造人でなく、寧ろ針金の切斷工であつた。若しも、彼れの生產物の殘餘の部分を產出する他の勞働者を缺くならば、彼れ一人では、全く何事をも爲すことが出來ず、從つて生存することが出來なかつた。だから彼は、事業の經營と自分との結合をば、解か

う と考へる譯にはいかないのである。

手工業的手工的工場工業の發展――生產力を益々增進せしめると云ふ結果を有するところの――は、凡そ千五百年から千八百年までの、約三世紀間を包含する。かくてそれは、更に著しく生產力を增加せしめ、さうしてその效果は、吾々が前章に於て既に記述した所の機械によつて交代されるのである。

第六章　勞働の社會化

以上、過去に於ける經濟的發展の短かいスケッチを回想すれば、次の二つのことが示されてゐる。

第一に――常に、人間社會の絶えざる進歩の動機となつたものは、絶えず急激に增加して行く欲望であつて、それが卽ち、人間をして絶えず勞働の生產力を增加せしめた所以である。

第二に――此の如き生產力の增加が依つて以て達せられたところの手段は、漸進的の、常に益々進んで行く所の、勞働の社會化であつた。

之れと共に、次の事情が起つた。

吾々は個人的勞働と集合的勞働とを區別する。個人的とは一人〳〵を謂ひ、集合

的とは共同的を謂ふ。――個人的勞働は、此の語の嚴格な意味に於ては、本來決して存して居らなかつた。吾々の歷史的知識が及ぶ限りの如何なる時代に於ても、人間は全然個別的に勞働しないで、常に他の人々と共同して勞働した。人間は、總ての他の人々と別れて、自分一人で決して生活し得なかつたやうに、彼は又決して、全然自分一人では勞働をしなかつた。假令その團結は弛きものであらうとも、假令その團結は家族や小氏族の成員間に限られてゐやうとも、兎に角團結は存在して居つたのだ。吾々が知る最も單純な勞働形態は、自己の欲望に對する勞働（自己生產）である。が、自己生產と云つても、各個人が自分一人で產出したのでなく、寧ろそれは集團によつてゞあつた。それを特徵づける所のものは、（卽ち、それを他の勞働形態から差別する所のものは）、その生產された物體が個人の使用に役立つことであり、從つてそれが賣られないと云ふことである。

これは個人的勞働に最も近い形態である。此處を出發點として、發展は絕えず集

合的勞働の方向へ進んで行く。

自己の欲望の爲に働く社會では、各人は彼れ自身の煉瓦積みであり、錠前屋であり、靴工であり、建築者であり、紡績者であり、織工である、約言すると各人又は各集團は、彼等の生活資料に必要な總ての勞働を自分自身で行ふのである。此のやうな狀態は分業によつて廢止される。かくて、種々の職業が構成されて、煉瓦を積み、錠前を造り、靴を直したりすることなどは、今やそれ〴〵多くの人々を必要とするところの、專門的の仕事となつたのである。

一寸目には、斯う云ふことは勞働の個性化の如く見えるだらう。以前にあつては、例へば一家族は、卽ち父と息子とが、家族の使用する總ての物體を共働して造つたのであるが、今では、父は煉瓦積みであり、一人の息子は錠前屋であり、他の息子は農夫であるといふ工合に、彼等各人は自分一人で勞働するのだ。――それにも拘らず、之を勞働の個性化と見るのは、一つの謬見である。

問題となるのは、集合的勞働の解釋如何である。勞働者が同一の場所に直接同居すると云ふことは、それだけで一つの役割を演ずるのであるが、そは主要なものではない。寧ろ主眼となる所は、勞働の共同的目的である。以前には、一個人（又は一つの小集團）の欲望は、彼れ自身によつてのみ生產されてゐたが、現代では、多數の他の人々がそれに協力する。多數の人々が――假令恐らく空間的に分れてゐやうとも――一定の多數人に共屬する生產物――卽ち一定人の欲望――を產出する目的のために共働する。で、その本質的の側から見ると、分業は勞働の社會化への第一步である。

ところで吾々は、旣に分業が如何に著しい程度で、その生產力を增加せしめたかを看取した。分業の結果として、以前よりも極めて多くの生產物が產出される。さうして吾々は、第一の結果として次の如きことを看取する。卽ち多數の勞働者の共働によつて、ヨリ多くの生產物が產出されたと云ふことが是れである。

之れは、その後今日に至るまでの、有らゆる時代に當篏まる。中世の終りに至るまで幾千年を通じて、勞働の專門化は進んで來た。新しい職業は益々多く古い職業よりの分割によつて形成され、又それによつて益々多く、勞働の收獲力（生產力）は增進した。かくて新時代（凡そ千五百年代）の始まると共に、資本家的生產が始まり、そは直ぐに、今迄分離してゐた勞働者を空間的に結合した。中世の手工業者は職人や徒弟と一緒に自分の仕事場で仕んでゐたが、資本家は直ぐさま、自分の使用する多くの手工業者をば、自分に所屬する大作業場に集めて仕舞ふ。今では、如何なる社會的色盲といへども、勞働が益々集合的になり、益々社會的になることを認めるであらう。同一場所に於ける勞働者の結合は、更に著しく生產力を增進せしめるのみでなく、又作業場內の分業を進展せしめるもとゝなり、かくて共働は規律的になる。從來は一人が指物師であれば、他の一人は鍛冶屋であつたが、今ではもう指物師には、垣專門の者や机專門の者などが居り、又鍛冶屋には蹄專門の者や針專

門の者などが居る。さうして間もなく、一つの机をつくるに付いても　緣飾、表板、脚などの製作に分割されるやうになつた。かく論じて來ると、どの點が重要であるかゞ明かになるであらう。以前には、一つの机をつくることは、一人の人間の仕事であつたが、今日ではそれに對し多くの人々が必要となる。その結果、起る所のものは、更に著しい勞働生產力の增進である。

終に、總てのものは、機械によつて交代される。けれども機械は元來集合的勞働にのみ役立つ一機關である。機械は個人に取つて何の役にも立ち得ないし、又個人的勞働にも適しない。それは共同的作業にまで結合された勞働者數を著しく增大したと共に、彼等勞働の生產力をも著しく增進させた。

機械時代に於ても、その發展は正に上述の如き方向を進んで行く。最初、各工場は益々大きくなつて行つた。百年前では、一つの工場で千人の勞働者を使用する事は稀であつたと云ふよりも、恐らくそんな工場は一つも無かつたであらう。ところ

が今日では、例へば一九一〇年五月のプロシヤ政府の統計報告によると、大經營（其等のおの〱は千人以上を使用するのであるが）の數は、プロシヤだけでも一八九五年には二百八であつたが、一九〇七年には百八十五に增加してゐることが分る。それら工場の從業者の總數は、四十萬九千人から九十九萬人に增加した。之を平均すると、おの〱の大經營は、一八九五年には千九百六十五人の勞働者と使用人とで仕事をしてゐたが、一九〇七年には二千五百六十五人になつてゐる。が、これは只だ平均數に過ぎない。各工場に付いて見ると、數萬人の勞働者を使用する工場もあつた、實に、獨逸最大のクルップ會社の如きは、戰前約七萬五千人の人々を使用して居つたのである。

併し、此の發展は餘程以前に、個々の工場内の單なる膨脹を乘り越して仕舞つてゐた。

七十年代の中頃から——米國ではもう少し早くから——最早や個々の工場を別々

に働かせて置かないで、相互に結合させる運動が始まつてゐる。その根本的原因は中世の初めに於けるものと同じである。即ち競爭の制限是れである。彼等は確かに十五世紀の正直な組合の親方と同じく、非常に喜んでそれを爲したであらう、さうして一定數を超過する新しい工場の設置をば、只わけもなく禁じたことであらう。が、當時はまだ幸にも營業自由の時代でなかつたので、彼等は先づ自由契約によつて、相互の最低價格を決定しやうとした。これが即ち、近世の所謂カルテル、(Kartell)の最初の形態である。從つてそれは、最初のうちは全然弛き結合であつた。當該工場主は相互に一つの契約を結んで、共同の支拂期日と支拂條件とを約束する。が、此の極めて弛き形態から、そのまゝ價格の協定が生ずるのである。即ち、カルテル契約で最低價格が確定され、その價格を以て、當該工場主は、彼等の生產物を販賣せねばならぬ。これでもまだ極めて弛い結合であつて、個々の工場主は、このやうなカルテルからは何時でも脫退することが出來る、事實正に來らんとする不景氣が自

己の商品を約束よりも安く賣り飛ばすことを望ましく思はせるや、彼等は直ぐさま脫退するのである。だから、斯樣な單なる價格カルテルは、決して長續きしたことなく、いつも不景氣が起るや、忽ち相並んで沒落して仕舞つた。

彼等は、價格を高く維持する目的を達せねばならなかつたので、別に他の事を始める必要があつた。單なる協約だけでは、吾々が旣に見破つたやうに、不十分である。彼等は、價格の構成そのものに對し、影響を及ぼすやうにせねばならなかつた。ところで、有產者的國民經濟學の敎義に依ると、商品の價格は、只だ供給と需要とに依存するものだから、彼等が供給を制限すべく企つべきは、云ふまでもないことであつた。だから此の定義は、カルテル契約に採用されたのである。

勿論、之れに依つて當該工場の結合が、前よりもずつと密接に爲らねばならなかつた。今や個々の工場主には、彼が思ふだけを生產するの自由は無くなり、それはカルテルの命ずる所となつた。が、そのためには、一つの完全な機關が必要である。

先づ各工場の生產量を確定するところの、一種の官廳とも云ふべき一の機關が造られねばならぬ。とは云へ、彼等は無雜作に、一つの工場は他の工場と同じ分量を生產すべし、と云ふ譯にはいかない。それは寧ろ、各工場の生產能力と從來のはけ口とによつて定めらるべきだ。それから此の官廳は絕えず職務に從事して居らねばならぬ、何故なれば、每年新しく豫想のはけ口が評價され、それによつて各工場の生產量や配當數字が確定されねばならぬから。又此の官廳は、事實如何なる工場もその生產量を犯したり、價格を不當に引下げたりしないやう、十分に監視せねばならないので、絕えず各工場の個人的生活に干涉する、一つの共同機關が存することになる。かくて他の工場との結合は、最早や偶然的でも一時的でもなく、規律的のものとなるのである。

併しながら、契約の滿期に脫退することは、依然として各工場主の自由である。此の階段を越える決定的の步みは、シンディケート Syndikat）への推移によつて

爲される。カルテルの機關は上述のやうに十分な監視を行ふが、それでも該契約の凡ゆる廻避を防止することは出來ない。事實各工場主が、各個の販賣に於てカルテル價格を守つて居り、又その生産量を犯さなかつたなど丶云ふことは、何人が之を調査するであらうか？　そこで彼等は、販賣そのものを各カルテル組合員から奪ひ去り、それを共通の事務所で決定せしめやうと考へついたのだ。此の形態の結合をば、人々はシンディケートと叫ぶ。で、今や各工場主は、一般に顧客と取引をしなくなつて、その全生産をシンディケートの事務所へ渡すこと丶なつた。事務所は各工場主から、彼等の指定された生産量よりも多量のものを剝奪することなく、彼等にはその代價として、シンディケートの定めた價格を支拂ふ。此の監視は必要缺くべからざるものである。何故なれば、若し一人の組合員がこれ以外に莫大な販賣を企てやうとするならば、それは自然直ぐに評判になるであらうから。

一度このやうなシンディケートに入つた工場主は、再び其處から脫退することは

甚しく困難である。ルードルフ・ヒルフアーデイングは、其の『興業資金』(Finanz-kapital)（二五一頁）に於て次の如く書いてゐる。『斯樣なカルテルから脫退するには、顧客關係の新しい締結や、古い販路の回復や、又は諸々の計畫——それは恐らく失敗し、又萬一成功するにしても、常に犧牲によつてのみ求められ得る所のもの——を必要とする。又之れと同時に、カルテルの繼續する限り存續する所の、可なり大きな忍耐が必要だ。』

勿論、シンデイケートといへども、破れる場合はある。が、餘程以前から、シンデイケートを乘り越えて、個々の企業家の脫退をば終極的に不可能ならしめる所の、資本家的企業の一層密接なる結合形態が見出されてゐた。これが卽ち、結合（又は混合）經營であり、ヒユーヂオン (Fusion) 及びトラスト (Trust) である。

これらの形態の中で最も簡單であり而も最も强固なのはヒユーヂオンである。それは、一つの工場が他の工場を買收することに依つて、二つ又はそれ以上の工場が

完全に融合し、唯一の企業となることである。今日では、かゝるヒユーヂォンは極めて多數に發生する。只の一日でも、商業新聞が大會社の合併を報ずることなしに經過したことはない。が、ヒユーヂォンはとゞのつまり、二つの融合された經營の突然で而も强固な膨脹と見るべきである。それは永久に行はるべきものでなく、次いで來る所の發展によつて交代される。既にシンディケート(共通の販賣事務所を有つところのカルテル)に於て、一つの新しき(益々發展して行く分業の芽生が現はれ、又その一部分は、單純な價格カルテルに於てさへも現はれてゐる。玆に謂ふ分業とは、異なつた工場間に行はれるものである(一度多數の工場が一つの團結に結合された以上(次いで吾々の考へに當然來るものは(最早や各工場で同一物を産出させることなく、一つの工場でこれを造れば、他の工場ではあれを造ると云ふ工合に、總ての工場で各自得意のものを造らしめることである。それに進む第一歩は、そこで爲される事業が何等かの理由で特別に利益の上らないやうな工場を一般に休

業せしめて、その代りに他の工場でヨリ多くのものを生產せしめることである。ルール地方に於ける炭坑の休業は有名なものである。併し、簡單なカルテルでさへも、事實上分業を行つてゐる。獨逸のカルテル調査（一九〇三年　一〇卷、二三六頁）に於て、シャルテンブランドの鋼鐵業團體の盟主は次のやうに云つてゐる。『吾々が研究せねばならぬことは、この團體の永續する限り、何うして吾々はそのはけ口を處理することが出來るであらうか？　吾々は、各工場が總ての生產物を生產する必要のないやう、ヨリ安く生產するためには、如何なる分業を導くことが出來るか？　と云ふことだ。』さうしてヒルフアーディングは、――吾々は彼れの『與業資金』（二五三頁）から、右の報告を得たのであるが――墺太利の機械カルテルも亦、個々の企業では遙かに進んだ分業を實行してゐた、と附け加へてゐる。『利潤は共通の金庫に流れ行き、分に應じて分割される。』

此の新しい分業は、一つの力強い前進を意味してゐる。さうして、分業そのもの

は――他の種々の事情と共に――シンディケート自體が示し得る如く、種々の工場の遙かに密接な結合を有意義ならしめるものであるは明かである。が、結局シンディケートに於てさへも、種々の企業の特別利益が猶ほ殘存する。けれども茲に必要なのは、結合された企業の劃一的事業利益である。それは最早や、晩かれ早かれ滿了する單なる契約の締結に依つてゞなく、一つの企業が他の企業の株券を自己の所有に移すことに依つて、達せられるものである。卽ち、株券の過半數を有つ者が、企業の全般に亘る事業方法を支配することが出來る。さうして過半數の企業又は多數の企業に決定的の影響を與へるものは、いつかその結合の再び破れる心配もなく、企業を劃一的に、一定の計畫に從つて處理することが出來、又一つの企業の生産を他の企業の生産に適應させることも出來る。

總ての企業を劃一的に處理し且つ經營するため、多數の企業の株券を合同することは、卽ち近世のトラストの本質をなす。此の言葉は英語であつて、我國の『信用』

と同意義である。吾々は此の名稱を以て、英國に於ても米國に於ても、一定の法律關係――其處では、一人の機密を託すべき人（トラスティー）に、他人に屬する財產の支配と處分とが任されてある所の――を表はしてゐる。ロックフェラー氏が一八八一年自己の石油企業をトラストに擴大した時、彼はそのために總ての當該企業が自己の株劵をかのトラスティーから成る委員會に委ねると云ふ法的形式を撰擇した。其處から、トラストと云ふ名稱が生れたのである。

トラストに於ては、各企業の獨立性が全然廢止されてゐる。其處では、尨大な機關――米國の鋼鐵トラストは、既に一九〇七年に於て、二十一萬人以上の使用人と勞働者とを有つ六十四個の工場を結合してゐた――が、全く劃一的に運轉される。此處では、全企業の規律性が、單なるカルテルに於けると全然異なつた方法で働くことが出來る。

獨逸に於ても企業の發展は全然トラストの方へ向いてゐる。然り、電氣業では、

既に今日事實上トラストに外ならぬ巨大な經營が行はれ、銀行業でもさうである。又獨逸では、寧ろ此の名稱を避けて『コンツェルネ』などゝ呼んでゐる。又獨逸では實のところ、トラストは米國ほどに發達して居らぬが、その代り所謂『混合經營』の範圍では、既にずつと深く突き進んでゐる。その發生と發展との跡を辿るのは、可なり面白いことだ。

吾々は一例として、一八九三年に創設されたライン＝ヱストファーレンの石炭シンディケートを擧げて見やう。それは、石炭の價格が本質的に下らないことを注意したり、又總ての炭坑（勿論、其のシンディケートに入つてゐる炭坑のみであるが）に如何程の石炭を採掘すべきかを指圖した。ところで二三の鎔鑛所と鋼鐵工場とは、自己の炭坑を所有してゐるから、石炭を買ふ必要なく、却つて自己の經營で其れを掘り出し、而もその幾分かを賣つてゐた。かくて自己が使用する石炭をば、自己の競爭者よりも安く用立てたのだ。と云ふのは、競爭者は石炭の爲にシンディケート

の高い價格を支拂はねばならなかつたのに、この方の工場は自己の炭坑のお蔭で—種々の事情の下で本質的に安くなれる所の——石炭の生產費を支辨すれば足つたから。勿論、損害を受けた鐵及び鋼鐵工場は、極めて善く此事情を看取したので、それらは——一八九九年以來遞增的に——自己の炭坑を開き始めた。さうしてたつた一度でも、炭坑と鐵工業との經營を結びつけた以上は、直ぐに斯樣な結合——そのいかいかいいい一方が他方に對して、製作材料を提供するやうな經營の結合——が、一般に利益のあるものだと云ふことを、考へ付いたのは當然である。此事に關しフライブルグのリーフマン教授は次の如く書いてゐる。【註一】

〔註一〕 Robert Liefmann, Kartelle und Trusts. 2. Auflage, Stuttgart, Moritz 1910, S. 70.

『鎔鑛所が鑛山と結合したやうに、更に加工を施す所の鐵工業の諸部門、卽ち鋼鐵業や種々の圓筒業や機械工場は、原料鐵のシンディケートから支配されないため、自分自身の鎔鑛爐を結合しやうとした。其他針金工場のやうな加工々場は、自ら

その半成品を生産することに依つて、半成品生産團體の高き價格から逃れやうと企てた。實に、斯樣な結合の傾向は、高度の專門的の生產物を生產する工場でさへ、カッセルのヘンシユエル父子の獨逸最大の機關車工場が、それ自身の鎔鑛所と炭坑とを獲得したやうな程度にまで進んだのである。英國では可なり以前から、大きな紡績業と炭坑との結合が行はれてゐた。斯樣な結合は常に既存企業の結合から起るのでなく、大抵の場合は、膨脹して行く企業部門のため、新しく附加されるのである。今日、大きな鐵工場や鋼鐵工場では、鐵工業、軌道、支柱、水管、造船材料、橋、各種の機械の如き、考へ得べき有らゆる生產物が、――ほんたうに、鐵道車輛までが、同一企業の下で產出されてゐる。』

このやうにして、今日既に鐵工業に蔓つてゐる所謂混合事業が生じたのである。さうして單獨事業もまだ其等の傍に存在して居るが、それは混合事業の爲に壓倒されて餘命幾何もないであらう。又此の發展は全然同樣の影響を石炭業にも及ぼした。

石炭のシンディケートは何うしても、一つの鎔鑛所と結合したる炭坑業と協同せねばならなかつた。若しさうしないならば、鑛山業はその石炭を、自分で消費しない限り、比較的安く賣つてシンディケートを滅ぼしたであらうから。一九〇三年石炭のシンディケートが起つた時には、鑛山業がこれを助けたので、その再興はやつと成功した。鑛山業が之を爲すには、シンディケートは鑛山業に向つて、自己の欲望に對する生産を十分解放せねばならなかつた。かくて其等は再び、他の單獨鑛山業を法外に壓倒するに至つた。『單獨鑛山業は强度の制限を以て――一九〇四年の當該數字によると、石炭では二八パーセント、コークスでは三二パーセント、壓搾炭では三五パーセントの制限であるが――採掘せねばならぬのに、混合鑛山業の方は自己が利用する莫大な石炭量を、自己生産の增加によつて造ることが出來る。』これは又、單獨鑛山業の方にも直ぐ分る事柄であつたから、今や其等の方でも、鐵工業を營まうと考へたのである。

『だから、獨逸最大の炭坑會社たるグルセンキルフエン鑛山會社が、二大鐵工業——アーフエンのローテ・エルデ鎔鑛所とシャルク鑛山及びその鎔鑛所——を併合したるは尤もである。此等二つのものも同じく旣に結合事業であり、後者は二三年前一つの大鑛山（プルートー）を獲得し、前者は現に自己の鑛山附設に從事してゐる。』

かくて十年ほどの間に、炭坑業及び鐵工業に於て——總ての工業の中で最も重要である所のものに於て——一つの完全な變化が起つた。單獨經營は滅んで仕舞つて、混合經營がその地位を占めたのだ。このやうな混合事業が現代如何に現はれてゐるかは、例へばベルリン日々新聞（一九〇九年十二月の）に發表された、ロートリンゲンの鐵工業アウメッツ＝フリーデに關する次の記事が示してゐる。『鑛山業に重要な地位を占める一大混合企業は、一つの炭坑と、八つの鎔鑛爐を有つ二大鎔鑛所と、大規模の一鑄造所と、大規模の一最新式鋼鐵工場及び圓筒工場とから成り立つ

てゐる』と。

戰爭前にあつては、か丶る混合經營は既に石炭業及び鐵工業に於て優勢になつてゐた。カルテル調査を基として、ヒルフアーディングは上述の論著(二七三頁以下で次の如く斷言してゐる。『ボーフム、ドルトムンド會社、ケーニッヒ及びラウラ鑛鐵所の如き大經營が、單獨の軌道車輛工場の競爭者として現はれる。此等の大鋼鐵工場は、只だ完全な軌道車輛のみでなく、それに附屬する總てのもの、卽ち緩衝機、十字把、聯機など、約言すると、車輛の總ての部分を造る。ケーニッヒ鎔鑛所及びラウラ鎔鑛所は　自己の造る車輛に必要な總てのものを、恐らく彈機、螺旋及び鉸釘を省いては、車から最後の切片に至るまでを造り、又ドルトムンド＝ユニオンは、自己の車輛工場や其他の小鐵工業品(例へば鐵道路盤用の螺旋)のために、殆ど總ての金具を造る。』

かくて吾々は、企業の發展が過去數百年の間一歩〳〵高まつて來たのを見る。曾

て個々の勞働者は、仲間と共に單純協業へ、次いで手工的工場工業の規律的分業へ召集された。然るに今や工場全體――それ自身既に多數の勞働者に依つて、巧みに組織された有機體であるところの――は、他の工場と共に單純なカルテルへ、次いでシンデイケート、トラスト、及び混合經營の規律的分業へ、召集されてゐるのである。

ところが特に注意すべきは、これらの發展が如何に激しい程度に於て、勞働の生産力を増進せしめたかと云ふことである。バラツト敎授の記述によると（一九一〇年のシユモーラー年鑑に收むるところの）、從業勞働者の一人に付き、生鐵の産出される高は次の如くである。

年代	
1860	62,3 噸
1872―1873	100,0 〃
1901―1902	254,0 〃
1906	295,0 〃

だから勞働生産力は、四倍よりもずつと多く增進し、特に鑛山に於て極めて著しくある。卽ち勞働者一人に付き、採鑛するところは次の如くである。

年代	石炭	渴炭	鐵鑛	
1800	149	232	78	噸
1874—1876	192	407	192	〃
1886—1889	285	564	294	〃
1900—1902	240	768	432	〃
1907	262	942	554	〃

一八六〇年このかた、勞働生産力は石炭採掘では七五パーセント、渴炭採掘では四倍、鐵採掘では七倍も增進した。當時獨逸では勞賃が安かつた結果、炭塊破碎機が一〇パーセントの費用を節減するに拘らず、採掘に殆ど使用されなかつたといふことは、注目すべきであらう。プロシャの石炭鑛山の全生産は、一八四二年では一の事業經營に付き、卽ち平均四〇人の勞働者每に五一一一噸であつたに拘らず、一

九〇〇年では、一二二四人の勞働者毎に、卽ち一の事業經營に付き、二二三三四三噸となつた。鎔鑛爐の經營は一八四二年では平均一三人の勞働者を使用してゐたに過ぎぬが、一九〇〇年では實に三二三人を使用するに至り、從つて個々の事業の全生產は、五七四噸から七八八八八噸に增進した。一八七〇年の獨逸全體の鐵鑛生產は、三四一二八人の勞働者を使用する一六八六個の經營で、五三〇〇〇〇噸(一人に付き一五四噸)であつたが、一九〇八年では四五九〇二人の勞働者を使用する五六一個の經營で、二四三〇〇〇〇噸(一人に付き五二八噸)を產するに至つた。この外總ての範圍に亘つて、原料をヨリ善く利用することが、卽ち合理的の經營方法が起つたのである。事業經營の生產力は滅法外に增進した。以前一つの鎔鑛爐では凡そ八〇噸のものが生產されてゐたが、今日(一九一〇年)では、二九四〇〇〇噸の鋼鐵と鐵とが生產される。英國の紡績業では、一人の勞働者が一八四〇年に於て、一日一四時間の勞働時間で造り出す一年の生產物は、今日の勞働者が三日間で

造り出す生產物と殆ど同じ分量である。

＊　＊　＊

吾々は、以上の觀察に依つて、何うして資本主義が發生したか、卽ちつい先きに述べられた風に、何うして資本が中世の終りに生產に喰ひ入つたかと云ふことを、極めて明かに認めることが出來る。が、これによつて、他のヨリ遙かに重要な問題、卽ち何によつて資本主義が發生したかと云ふ問題も亦、答へられたのであるか？

吾々は、生產增加の欲望が昔も今も常に存在することを看取した、何故なれば、人類は數に於ても文化欲望に於ても絕えず增加して行くから。だから生產增加の欲望は、中世の終りにも存在してゐた。それは當時にあつては、手工業から單純協業への推移によつて、卽ち從來空間的に分離したる勞働者を一の共同的な勞働場所に集めることによつて、充足されたのだ。で、かやうな勞働者の空間的結合は、當時にあつては一の經濟的（及び歷史的）必然事であつた。それは、吾々の旣に看取し

たやうに、資本によつて完成されたのである。――それでは、若し資本が無かつたならば、それは發生することが出來なかつたか？　手工業者は、自發的に且つ獨立的に集合することが出來なかつたか？【註二】これは本來考へ得べき事柄だ。手工業者は共通的の大きな仕事場では、ヨリ安く生產を續けて行くことが出來、又何等かの團體を造つて、共通的の仕事場を皆の費用で立てさせることも出來たのである。

【註二】云ふまでもなく吾々は、此の問題を殆ど歷史的の意味にとつたのではない。若しさうだとしたならば、それは全く價値なきものであらう。何故と云ふに吾々は、恐らく發生し得たであらうと云ふやうなものは、決して知ることが出來ないからだ。吾々が常に知るものは、實際に發生したものに限られてゐる。吾々は特にたつた一度だけ此の問題を提出して置く。それは一つの過程を論理的に明白ならしめるためである。

それから又、何が發生したであらうか？――手工業者例へば五〇人の靴工は、共同的の作業場に引き入れられて、それぐ自分達の仕事檯や原料などで働いたことであらう。が、各人は自分のために、即ち自分自身の利益のために働いたのである

から、總てのヨリ廣汎な混合や結合は除外されてゐたであらう。之に反して各人は、何人も彼れの領分を蠶食しないやう、又恐らく彼れの原料や仕事具などを利用しないやう、やき〳〵しながら注意して居らねばならなかつたであらう。何故なれば、總てこれらのものは、卽ち總てこれらの生産手段は、個々の手工業者の私有財産に外ならなかつたから。で、個々の手工業者は、若し他人がそれらを利用した場合には、損害を受けることになる。

けれども、原料や道具などの無差別の混合こそは、若しも手工的工場工業への進步が完成されねばならぬとすれば、そは必然的のものである。何故なれば、手工的工場工業の本質――それは手工的工場工業をして、以前の手工業に對しヨリ生産的にならしめる所のもの――は、多數の者が一つの生産物の産出に關與し、從つて多數の者が相互に且つ共同して、同一の原料や同一の道具などを利用することに外ならなかつたから。

吾々は、それに相當せる所の、最近の時代に現はれたる諸過程に於て、如何なる點が重要であるかを說明することが出來る。試みに、近世の百貨店（Warenhaus）と市場（Markthalle）とを相比較して見よ。兩者は驚くばかり多くの類似性を示してゐる。同じ建物內の多數の賣店に於て、種々雜多の商品が賣られてゐる。が、市場では、それぞ〳〵自分の爲に働くところの多數の獨立商人が並び存してゐる。之に反して百貨店では、總てのものは一つの下に結合され、各個の賣店は劃一的の經營に融合され、さうして其處では、總てのものが規律的に運ばれて行く。だから百貨店は市場を壓倒し、旣に可なり以前（戰爭前）から、例へばベルリンでは、百貨店と競爭の結果、市場の退却が行はれるに至つた。かくて一九一〇年頃、所謂拔け道通りにある百貨店（Passage-Kaufhaus）に於て、只一途に百貨店を眞似やうとした企ては、何の助けにもならなかつた。卽ち此處へ寄つて來るのは小商人でなく、それは一つの共同的の建物の中で、相互に獨立經營を營むところの、大商店の一列である。

思ふに百貨店の效果は、只だ、一般の顧客が一度に種々雜多の商品を見て、購賣を刺戟される點にある。百貨店を眞似やうとの企ては全然失敗し、拔ヶ道通りにある百貨店は、再び廢止されねばならなかつた。卽ち、此の決定的の要素そのものは、全體に亘る劃一的の、從つて規律的の給付たることが分つたであらう。

若し吾々が中世の終りを回想するならば、それは次の如き情勢であつた。卽ち、經濟上の進歩は、比較的多數の勞働者群の空間的共働のみでなく、又その規律的共働を必要とし、從つて仕事場內に於ける分業への推移を必要とした。そのために、かやうな勞働者群が、多數の生産手段卽ち多數の原料や道具などを必要としたのは明かであるが、それらは、彼等勞働者がその總てを共同的の使用のために處分し得るやう、小嵩に分散されて居らないで、大量となつて無差別に共屬して居らねばならなかつた。それは個々の小生産者の私有財産としては不可能であつた。けれども全生産手段は何人かの私有財産となつて存在し、それ以外の狀態は當時全く分らなか

つたし、又人間の到底考へ及ぶ所でもなかつたので、かやうな大多數に共屬する生產手段は、多くの生產者がそれを使用する場合には、只他人の私有財產に依つてのみ、彼等に提供されることが出來たのである。他の一人が、生產者の總てが一緒に使用するところの、かくも多數の生產手段を所有し、さうしてその人が共同的の製作のため、その生產手段をば彼等に委ねたと云ふことは、必要であつた。このやうにして、手工的工場工業への進步が、初めて完成され得たのである。

果してこのやうな事情であるとするならば、此の非生產者は、彼れ自身が全くそれらを使用し得ないほど、多數の生產手段を有することになる。彼は寧ろそれらをば、賃勞働者を雇ふために使用する。賃勞働者を雇ふために使用される生產手段こそは、資本であり、その所有者は生產的資本家である。

約言すれば、生產手段は私有財產として存して居つたので、當時生產力增進のため必要なりし勞働者の結合は、資本家的形態に於て發生した。卽ち資本は、生產に

影響を及ぼしたのである。或は、他の言葉を以て言ふと、資本主義が作つて以て發生した所の源泉は、生産手段に對する私有財産であつた。【註三】

【註三】之に關しては、Marx, Kapital, Bd I, Kapitel 23, 2 を參照せよ。『勞働の社會的生産力の發展が、如何に大規模の協業を前提とするかは、既に示した通りである。……生産手段が私人の財産であるところの、商品生産の基礎の上に於ては、……右の前提（卽ち協業）は只、個人的資本の增殖により、又は社會的生産手段及び生活資料が資本家の私有財産に變ぜられる程度に比例してのみ、實現されるのである。商品生産の地盤は、資本家形態に於てのみ、大規模の生産を擔ふことが出來る。』

上述のところから、一つの重要な結論が生れて來る。吾々は此の論著の最初にあたつて、社會的不幸の源泉は資本主義であると確言し、從つてその不幸を排除するためには、資本主義の排除が必要であると結論した。今や吾々は、資本主義の源泉として、生産手段に對する私有財産を認める。そこから、資本主義を排除するためには、生産手段に對する私有財産が廢止さるべきだと云ふ結論が、極めて明かに生れて來るのだ。

これ即ち、科學的社會主義の根本的要求である。此の思想過程を基として、例へば、嘗て獨逸社會民主黨が奉じたる（科學的社會主義に立脚する所の）エルフルト綱領は次の如き要求をなしてゐる。

『生產手段——即ち土地、鑛山、原料、道具、機械、交通機關——に對する資本家的私有財產の、社會公共的財產への變化……及び商品生產の、社會的……生產への變化』

商品生產の排除は、商品——賣らねばならぬところの消費物體——が必然的に私有財產を前提とすると云ふ理由の下で、之を要求せねばならぬ。吾々は、誰にも屬して居らないものを、賣ることは出來ない。種々の物體は賣るために生產されるから、それらは私有財產の上に立ち、且つ再び私有財產を導き出す。だから、上述の要求の第二のものは、第一の要求によつて自ら明かであるものを、今一度特別の言葉で言ひ表はしたに過ぎない。

之に反し、『社會的生産』なる言葉が如何なる意味を有するかは、吾々は後になつて看取するであらう。

第七章　經　濟　史（その二）

吾々は、科學的社會主義が到達するであらう目的を確定した以上は、その政策の方へ、卽ちその目的を實現するため爲されねばならぬであらう問題の方へ、轉換する。さうして此の問題も亦、科學的方法に於てのみ、從つて過去並びに現在の研究と其の知識の上に築かれた結論とによつてのみ、答へらるべきは明かである。

吾々は、先づ過去の事實に關しては、人間が昔から引續き勞働の生產力を高めて來たのを見た。其處からは、次のやうな經濟生活の發展列が發生した。

1　自己生產（集團が行ふ自己欲望の產出。未知の時代にまで遡るところの最も古く知られたる經濟形態）。

2　分業（職業的手工業の完成に至るまでの、少くとも二五〇〇年間を包括する所のもの）。

3　單純協業（ほんの短い過渡期に過ぎぬところの、資本家的生產の最初の形態）。

4　手工的工場工業（凡そ三〇〇年間、卽ち一五〇〇年から一八〇〇年まで續くところの、仕事場內に於ける分業）。

5　機械、大工業（凡そ一八〇〇年このかた）。

これらの事實並にその連續より、吾々は旣に勞働の社會化を認めたのである。が、それらは尙外の或るもの、卽ち生產方法の間斷なき變化を敎へてゐる。勞働の生產力を增進させるために、絕えず新しい勞働方法と新しい勞働手段とが考へ出された。之によつて生產の方法は、それが早かれ晚かれ根本的に他のものになつて仕舞ふまで、絕えず變へられて來たのである。

ほんたうに、一寸見たゞけでも、上述のことを敎へてくれる。吾々が只、種々の經濟形態を數へ立てゝ見たゞけで、それを示してくれるのだ。自己生產は、分業に

よつて發生した手工業と異なるものである。手工業は手工的工場工業――それはまた、機械を以て經營される近代的大工業と、全然異なつた生產方法を表現するところのもの――より、本質的に差別される。一の時代から他の時代へ移るにつれて、生產方法は全部變革される、さうしてこれは生產力の單なる增進によつて、或は寧ろその動力である所の勞働の社會化によつて、達せられたのである、

ところで社會秩序は、生產方法と極めて密接に關連する。人間は吾々の知る如く、共に無差別となつて生活するものでなく、彼等は社會內に於ては、血族、宗教團體、職業、及び階級などと云ふ、種々の集團に類別されてゐる。これら各種の集團のうち、階級が最も重要なものであつて、吾々は社會秩序を以て直ちに、階級秩序と解し得るほどである。だから社會秩序は、如何に人間が社會內に於て階級に類別されてゐるかの、方法である。此の階級秩序は、吾々の云つたやうに、生產方法に依存する。一般に一の社會（例へば一の國民）に於て如何なる階級が存してゐるか、各

個人が如何なる階級に屬し、又種々の階級が相互如何なる關係に立つてゐるかは、生產方法によつて定まるのだ。卽ち生產方法が變化されるならば、これら總てのものも亦變化する。

以上は又、簡單に歷史から讀み取られる所の事實である。勿論吾々は、もつと隔つてゐる時代を參照せねばならぬ。が、上に述べた種々の經濟期に於て、例へば獨逸人も亦、全然異なる多くの階級秩序を有つてゐた。原始時代に於て、彼等は經濟上既に述べたやうに、丁度自己生產の狀態から飛び出さうとしてゐた。彼等には社會上（社交上）猶殆ど完全な平等が行はれてゐた。彼等には猶種々の階級も、地位や身分に關する多少なりとの差別も殆ど無かつた、さうして酋長や諸侯や國王は、權力、尊敬、及び社會的地位に關して、他の國民達より極く少しばかり勝れてゐたに過ぎなかつた。勿論、彼等は一定の家族の成員から常に選ばれてゐた。だから此の點に關しては、此の家族の特權が疑ひも無く存在し、從つて一定の社會的不平等

が正に芽生えてゐたのである。

社會秩序は、その後一〇〇年足らずで全く變つて仕舞つた。增加する國民數とその欲望の增加とは、ヨリ多くの勞働を農作に使用せしめ、又新しい土地を獲得せしめた。これは直接に戰爭を導いたのである。吾々が國民移動と稱するところの、かの果てしなく數百年も續いた戰爭列に於て、酋長や國王の力が、他の國民達を支配する眞の權力となつた。土地の耕作は漸次移民と定住とを伴ひ、益々烈しくなる耕作の必然性は相續を導き、從つて吾々の紀元五世紀に既に存在したるところの、土地に關する事實的の私有財産を導いた。その私有財産から　更に四〇〇年乃至五〇〇年の發展を經て――吾々は此處にその一つ〳〵を説明することは出來ないが――大きな土地支配が發生したのだ。此の時分、卽ち紀元八〇〇年乃至九〇〇年の頃、獨逸國民は澤山に分れたる階級秩序を有つてゐた。その先頭は國王である。彼れに續いて、地位は彼れの下に立つところの、大領主がゐる。その傍とは云へ、ずつと

下層の社會的地位に立つところの、自由なる小土地所有者がゐる。この外、大きな土地支配には、明かに三乃至四に分れた等級に屬するところの、各種の非自由民が屬してゐる。

ところが分業が起り、全然新しい職業が、即ち手工業と商業とが、發生した。手工業者は最初領主の奴隷であつたが、永く數百年も續いた闘爭の間に、彼等はその支配から解放されて、多くの都市では商人と共に有產者なる新しい階級を構成した。之に反し地方では、土地を所有する貴族が依然として勢力を振つてゐたので、中世紀の全體は、貴族及び有產者なる二つの階級間の闘爭を以て充されることゝなつた。さうして終に新時代は、資本家及び勞働者の階級から成り立つ所の、資本家的社會秩序を齎したのである。

かくて吾々は、各時代に於て新しい生產方法が、又一の新しい社會秩序を齎したことを看取する。さうして生產方法の止まざる變革と、その結果として起る所の社

會秩序の變化との斯くの如き過程は、現に吾々の眼前に引續き行はれる。猶今日といへども、常に生產力を增進せしめる目的のため、新しい勞働方法と新しい勞働手段とが絕えず考へ出されてゐる。吾々は、此の目的が機械時代の始めから、常に新しい經營形態へ導いて來たことを看取した。百年以前の小工場が生產したものは、吾々の時代の大經營のものとは、全然異なつてゐた。が、近世の大經營の內部に於てさへ、生產方法は明かに變化する。メンツエルの叙述は、一八七三年に於ける一圓筒工場の內部を示してゐる。一九〇八年、金屬勞働者新聞は、同じ問題に關して一つの論文を公表したが、それによると其の間の三十五年の間に、圓筒工場の生產方法が全部變つて仕舞つたと云ふことだ。最近三代の間に起つた社會秩序の變化も亦、今や全然明かに認められてゐる。百年前にあつては、社會的に全然勝れてゐたものは、依然として貴族であつた。その傍に有產者階級が、社會階級としてやつと現はれて來たのだ。その當時無產者階級は旣に存在してゐたが、それは他の兩階級の傍に全

く隱れて居つて、有產者階級の重要ならざる附屬物であつた。然るに今日では――而もそれは生產變化の結果に外ならぬが――有產者階級と無產者階級とが決定的の階級となつて、貴族は階級としては滅びてしまつた。かくて社會秩序は、百年足らずで全く異つた外觀を贏ち得たのである。

以上の事柄は過去並びに現在の事實である。要するに、始めから今日に至るまで、勞働生產力の增進は生產方法を變革し來り、さうして正に之れによつて、終局は社會秩序をも變革し來たのである。

所で上述の點より、未來に對する最も重要な結論が引き出される。卽ち、現在に於ても、勞働の生產力は益々增進され、その生產方法は益々變革されて行くから、現代の社會秩序もまた止まつて居らないで、それは一の他の社會秩序に、未來の地位を讓るであらう。

これは一つの嚴正な科學的結論だ。それは只だ、數學又は天文學の敎義に見るが

如く科學的である。

勿論、未來の社會秩序が如何なる社會秩序であらうかは、上述のところからはまだ分らない。でも、此の結論のみで極めて有意義である、何故なれば此の結論こそは、社會主義に對する反對論者の一つの主要な議論に外ならぬから。未來にあつては、現在に於けると異なつた社會秩序が存するであらうと、吾々が確信する其の故を以て、彼等は吾々を夢想家と呼び、又空想家と呼んでゐる。が、實のところ、現代の社會秩序の永遠性を信ずるものこそ、最も愚鈍なる空想家ではないか？　何故なれば　假令吾々が未來の社會狀態に付いて全然何物をも知らないとしても、——少くとも吾々は、それが現代のとは異なつたものであらうと云ふことは、確かに知つてゐるからである。

第八章　發展の概念――階級鬪爭

發展の概念――階級鬪爭と云へば、定めし非人格的に響くであらう。が、總てのものは或る程度まで『發展』の途上ひとりでに發生したのだ。生産方法は漸次發展し來り、それと共に社會秩序も發展した。事實、この發展に關する思想こそが、科學的社會主義の根本的思想の一つである。これによると、萬物は『ひとりでに』ぐん〳〵發展し、人間は本來それに對し、全く無關係であるかのやうに見えるであらう。これこそは、好んで社會主義者に對して爲される非難の一つで、彼等は事實何事も爲さないのみか、寧ろ總てを『發展』に委ねつゝ、自分等の口に未來國なる燒鳩が落ちて來るまで待たうとする者だ、と云はれてゐる。

然らば、此の『發展』なる言葉は何を意味するのか？　注目すべきことだ！　この言葉そのものは、屢々日常の生活に使用される一つの善き獨逸語で、何人も其の

意味に付いては、話が經濟的發展や社會的發展や又は社會主義への發展に關してゞない以上、殆ど疑ひをさし挾む必要がないであらう。然るに話が一度これらのものに關すると、直ぐにいろ〳〵と不合理が此の言葉に秘められて來るのだ！

一例として一都會の發展に付いて語つて見やう。人は云ふ。此の都會は百年このかた美しく發展して來たと。これは何を意味するのか？――今や、住民の數は增加し、新しい街は敷設され、新しい美しい家が立つてゐる、且つ恐らく休息所や遊戲場のある公園が設立され、さうして不健康な區は破壞されて、ヨリ善き形に新造されたりなどしてゐるであらう。若し、一つの都會の發展に付いて語るならば、總ての人はこのやうに考へる。ところが其れは、總てこれらの美しい事物がひとりでに、人々の行爲なくして發生したと云ふことを、意味するであらうか？　只狂人のみがこのやうな事を考へ得るであらう。云ふまでもなく、總ての新しい家は人間の手によつて建造され、總ての新しい街は人間によつて敷設されたのだ。一つの石たりと

も、人間がそれに働きかけなかつた以上は、決して動かなかつた。これが卽ち發展である。それでは、此の言葉は何を意味するのか？　何故に人々はそれを使用するのか？——百年前に一人の賢人が現はれて、その人が豫め一つの計畫——それに依つて總ての未來が決定されて居り、それに依つて總ての家が、總ての街が、又公園の總ての樹木などが設けられねばならぬところの——を立てゝ置いたのでなく、人間はこれら總てのものを、眼前の欲望に依つて造つたのだ、と云ふことを示さんがためである。彼等は丁度此處に一つの家を必要としたから、彼等はそれを建造したのだ。十年の後には丁度彼處に一つの街が必要であつたから、それは敷設されたのだ。さうして再び二十五年の後には恐らくコレラ病が爆發して、一つの完全な區を敷設する必要が起つたであらう。かくて、都會全體の有らゆる變化は、百年間に亘つて行はれたところの、個々の意識され且つ意欲された行爲のみから發生したもので、それらは何人も豫見し豫望して居つたものでなく、實にその時〳〵の人間によ

つて造られたのである。

これが發展と云ふ言葉の意味で、經濟的發展に付いて語る時でも、また云ふまでもなく同一の意味を有つ。だから人間が、經濟的發展に臨んで何事かを爲さねばならぬかを、一度たりとも疑ふことは出來ない、――それは全く自ら明かである。人間が爲さないことは發生しないで――寧ろ常に問題にされ得るものは、彼等が何事を爲さねばならぬかと云ふことのみである。

此の問題に對しても、吾々は其の答へを再び科學に於てのみ、即ち過去並びに現在の研究のうちに、求めねばならぬ。

吾々は先づ過去と相談して見やう。果して社會秩序の以前の變化は何うして起つたのか？　當時、人間はそれに對して何を爲したのか？

それに付いて、歴史は、一つの完く明かな全く疑ひのない敎示を、吾々に與へてゐる。それは、異なつた階級間の相互の鬪爭によつて、即ち階級鬪爭によつて、發

生したのである。

吾々は再び獨逸の歴史を參照しやう。獨逸では、社會秩序の漸進的變化――原始時代の階級なき社會に始まり、中世初期の階級の多い階級的社會と、その後數百年間續いた封建的社會とを經て、終に近世の資本主義的社會に至るまでの――が、どうして起つたのか？

吾々は、王權が最初の數百年間續きたる戰爭――それは又、直接の經濟的欲望によつて、卽ち增加したる國民數とその增加したる欲望とに對し、何うしても新しい國土を獲得せねばならぬ必要によつて、發生したものである――によつて、他の氏族員を統治する權力になつたことを、既に語つた。戰爭は他面に於て、捕虜から非自由人――本來、氏族員よりも權利の少なかつたところの――の一階級を造つた。それから土地の烈しい開墾となり、漸次定住的となり、從つて土地に關する私有財產が起つたので、所有並びに身分に付いて差別が出來たのである。相續に際しては、土

地は總ての子供に分割されたので、代を重ぬるにつれ、子供の多い家族は益々貧乏になつたが、子供の少ない家族は依然として有福であつた。又土地は分割されずに一人の子供に讓られる場合があつた。その時には、他の子供達は忽ち無一文になる。が、吾々に取つて、遙か昔の數百年――紀元後最初の四百年乃至五百年のことを云つて居るのだが――に起つた、これらの過程の一つ〳〵は、大體に於て餘り分つて居らない。

之に反し大きな土地支配は、國王が將軍や官吏に土地を封じたことから起つたのである。廣大な地域の利用を指示されてゐた斯くの如き領主は、そのために、廣汎な經濟組織と共に多數の人々を必要とした。そこでは通常の農夫が居り、更に又小作農業者が居る、(これはラテン語の major から發生した言葉で、『偉人』とか『優者』とかと同樣の意味を有するもので、幾分か上層農夫である)。それから、官吏として土地所有の行政事務を處理したところの、役人が居る。さうして最後に騎士が、

即ち領主の爲に兵役に服したところの、非自由人が居る。

かくて勞働の生產力が益々增大し、又分業によつて（先きの章で述べられたやうに）手工業と商業とが成立するに至つて、始めて新しい階級秩序が完成されたのだ。この際注意すべきは、總てこれらのものは、階級相互の絕えざる鬪爭によつて生じた、と云ふことである。殊に、大土地の所有と小土地の所有との間には、數百年も續いた鬪爭があつて、終に自由な小農階級は殆ど殘餘なく滅んで仕舞つた。勿論彼等は、その後貴族が滅亡された場合には、再び奴隷から奮起した。總てこれらの過程は凡そ十二世紀まで續いたのであるが、その詳細はあまり傳はつて居らぬから、吾々は、それらを大ざつぱに見るより外に仕方がない。が、貴族の滅亡以來、從つて都市の有產者の成立以來、吾々は全然明かに、新しい階級秩序を、從つて新しい社會秩序を造つたところの、階級鬪爭の存在せしことを確言することが出來る。手工業者は――既に上述したとほりに――本來大地主の奴隷であつた。彼等は、殆ど

果しなく續いた階級鬪爭に於て地主から解放され、さうして大抵は地主を都市から驅逐して、其處で屢々支配階級にさへ成つた。之に反し地方では、貴族は彼れの權力を維持して居つたので、今や中世の全歷史は、市民對貴族間の鬪爭から成り立つことゝなつた。されば此の新しく成立した有產者なる階級は、或る程度まで旣に存してゐた階級の間へ突入し、鬪爭によつて彼等の地位を奪取し、さうして絕えず繰り返へされる鬪爭――獨逸では根強く十九世紀に至るまで、卽ち階級としての貴族の地位が破壞されて、資本家が支配階級として其の地位を襲ふに至るまで、繼續したところの――に於て、その地位を固守した。總てこれらの鬪爭は勝手に發生したのでなく、又恐らく二三の黨派の好爭性からでもなくて、寧ろ生活利益が、卽ち赤裸々なる生活の可能性そのものが、種々の階級を鬪爭に强ひたのである。古き封建社會の階級秩序並びに權利秩序に於ては、有產者は簡單に生存して行く譯にいかなかつた。彼等は絕えずその秩序を破壞し、又それに反抗せねばならなかつた。他面

にては貴族も同様に、自分等の滅亡することを欲しなかつたから、彼等は此の古き權利の絶えざる破壞に敵對せねばならなかつた。此の異なる階級相互の絶えざる鬪爭は、初期の中世から遙か十九世紀に至るまでの、獨逸歴史の內容である。【註一】

【註一】悲しいことには、此の書の範圍では、このやうに極めて面白い歴史上の發展を、詳さに説明することは出來ない。が、若しも、直接眼前に展開する日々の政治的鬪爭が時々許してくれるならば、別著『獨逸經濟史』でそれを補講するであらう。

＊　＊　＊

總て上述したところは、過去の觀察の敎へるところである。今や吾々は之に加ふるに、現在の過程を見るであらう。

現代の社會秩序は、云ふまでもなく資本主義的である。と云つたとて、資本家並びに賃勞働者の外に、他の階級が存在しないと思つてはいけない。が、彼等は多數ではない、さうして――重要なことは――かの兩階級が、今日の社會では決定的の

ものである。彼等は社會の本質と其の特徴を決定する。彼等の外に尙存在する所のもの――例へば自由職業者、官吏、本職の兵士などのやうなもの――は、百年前無産者階級が資本家的有產者階級の附屬物に過ぎなかつたと同樣に　多かれ少なかれかの兩主要階級のどちらかの附屬物に過ぎない。

このやうに組織された社會では、勞働と資本とは相互に階級鬪爭を導く。これも亦、單に一つの事實であつて、吾々が冷靜に科學的に認めねばならぬ所である。吾々は、階級鬪爭は偶然的のものに過ぎないとか、又は社會民主々義的の『煽動』によつて發生したに過ぎないとか、と云ふやうな偏見にとらはれてはならぬ。賃勞働者が資本に使用されてゐる處では、何處でも一般に、彼等勞働者は、曾て社會民主的の敎義が彼等の耳に入つたか否かに全く關係なく、資本に對して階級鬪爭を行ふ。基督敎的に組織された勞働者も、全く組織されざる勞働者も、それを行ふのだ。例へばストライキが階級鬪爭であることは、總ての人々の認める所であらう。ところ

が基督教的の勞働者や組織されざる勞働者も亦、既に數十年このかた屢々ストライキをやつてゐるでは無いか？　しかるにストライキなるものは、階級鬪爭の既に甚しく高度の發展をなした形態である。資本に對する如何なる反抗でも、資本の支配や利得をば勞働者の利益の爲に制限せんとする如何なる企でも、其等は皆既に階級鬪爭である。これは以前には、極めて未熟な種々の形態を取つた。英國では百年以前に、獨逸では稍後れて、勞働者は機械を破壞したり、工場を燒いたりなどした。これらが總て階級鬪爭なのだ。それは總て可能な方面に、動もすれば殆ど各々の想像も及ばない所に――外交政策の中に、關稅及び商業政策の中に、課稅の中に、學校並びに學課の構成などの中に、發生した。〔註二〕

【註二】　これに付いては、この特別な題目に關する社會民主黨の文書の中に、澤山の材料がある。勿論、世界戰爭前に書かれた文書のことだ。

だから階級鬪爭は、與へられた一つの事實である。それは社會民主的の『煽動』

なくとも依然存在する。それは社會民主々義が生れるより數十年の昔に、否數百年の昔に、存在してゐたのだ。正しく從來の歴史の有らゆる時代に於ける如く、吾々はまた現代に於ても約束することが出來る。反對の利益を有つ異なつた階級の存するや、忽ち彼等は相互に闘爭するものだ、と云ふことを。

吾々はこれらの事實から何を結論することが出來るか？

曰く、階級闘爭は過去にあつては、人間が依つて以て社會秩序の變革を實現したところの手段であつた。新たに立たうとする階級は、古くから勢力を振へる階級に闘爭し、反抗し、さうして終に彼等を驅逐して、一つの新しい階級秩序を造つたのである。——現在に於ても、全然同じことが起りつゝある。勞働者なる新興階級（無產者階級）は資本家階級の支配に反抗し、さうして彼等を驅逐してその勢力を粉碎しやうとする。

從つて勞働者の階級闘爭は、新しい未來の社會秩序の變革を齎すところの手段で

ある。その際人々が爲さねばならぬ活動や、又彼等が依つて以て發展を『造る』ところの活動こそは、即ち階級鬪爭を導くところのものである。

これと同じことを、エルフルトの綱領は語つてゐる。

『この社會的變革（即ち商品生産から社會主義的生産への推移）は……只勞働者階級の事業たり得るのみ、何故なれば、總ての他の階級の者は彼等自身の間にこそ、互に利益を爭ひつゝあれ……現代社會の基礎を維持することを以て、その共通の目的と爲すから。』

即ち此の綱領は、資本家階級の内部に於て、種々の、屢々相互する利害を有つところの、各種の集團の存在することを爭はない。それはあまりに明かである。諸君は只、農業、工業及び商業の異なる集團に付いて、總てこれらの三集團の中の大經營及び小經營に付いて、商業及び工業に於ける種々の分派に付いて、又同一産業部門の中の單純及び混合經營に付いて、考へて見るが可い。此等種々の集團が有す

る利益は、決して常に一致しないで、それらは能く屢々相鬪爭する。それは『甲の梟が乙の鶯である』ことが、明かに表はれてゐるところの、關稅及び貿易政策の問題に於て、特に明かである。が、總てこのやうな鬪爭は、利潤の分配に關する鬪爭である。各々の集團は、出來るだけ多くの利潤の分配——彼等が只他の集團のみから奪ひ取ることが出來るところの——を得やうとする。けれども彼等には其の總てに共通する利益があつて　それは『現代社會の基礎』たる利潤一般が維持されて居り、而もそれが出來るだけ大であることである。何故なれば、總體の利潤が大なるにつれて、各種の資本家集團間に分配さるべきものが益々多くなるからである。ところが利潤の維持は掠奪の維持を、卽ち社會的不幸の維持を意味する。從つて勞働者の利益は、一般に利潤の排除を要求する。さうして此の場合こそ、總ての異なつた資本家集團が、彼等相互の內部の鬪爭に拘らず、一致結合して勞働者に當るのである。彼等がどうして、自分達が座るところの枝を、斷ち切るのを手助けするで

あらうか！　有產者階級のどの部分かゞ、いつかは無產者階級を階級鬪爭で助けるであらうと望むのは、子供らしい空想だ。社會秩序の變革は、勞働者階級の事業たり得るのみだ。

* * *

かのエルフルト綱領の敎義には、更に他の重要な思想が存してゐる、社會秩序の變革、卽ち資本の支配と利潤との廢止、——これのみが勞働者階級を解放して、社會問題を解決し得るのであるが——それは人工的手段によつて達せられ得ない。私はつい先きに、資本家階級の異なる部分は、個々の問題では屢々互に烈しい鬪爭をやるものだと云つた。資本家集團が互に戲れにやるこのやうな鬪爭を、勞働者の爲に利用しやうとの考へがある。そのやうな作戰に於ては、有產者的外交の本質が明かに存してゐる。世界戰爭がその適例だ。もと〳〵、吾々の考へでは、獨逸と墺匈とは、かの偉大な敵の優勢を支へることは出來ないであらうとは、分り切つたこと

であつた。ところが其處に、有產者的見解によると、外交――敵國側に存在する利益の衝突を利用して、彼等と異なつた勢力の集團化を導き出し、さうして獨逸帝國にヨリ多くのヨリ力强い聯邦團體を得さしめるところの――なるものがあつたのであらう。それにも亦一理がある。世界戰爭は各國の資本家の利益對立によつて發生したが、それは資本主義の支配する限り、避けることは出來ない。と云つて、戰爭が正しく此の形態と此の勢力の集團化とで爲されねばならなかつた、と謂ふのではない。例へば、獨逸と露西亞との間には云ふほどの帝國主義的の對立は無かつたし、又獨逸と佛蘭西との對立は、佛蘭西と英吉利との對立よりも、決して大きくは無かつた。それにも拘らず英吉利の外交が、獨逸に對して斯くも力强い聯合を形成することに成功したのは、實に大部分は、獨逸外交の特別の不巧妙のためであつた。

ところで多くの人々は、階級闘爭の戰術をも丁度このやうに解してゐる。彼等の意見によると、階級闘爭に於ても、指導者の巧みな外交や、勞働者に都合よき法律

を制定するため議會で過半數を占める結合や、又は敵の地位に存する弱點をば、只だ議會の掛引によつてのみ利用することなどが問題となる。で、彼等は、總てを指導者の手に委ねやうとする。之によると勞働者の活動は、只出來るだけ堪能な指導者を擇んで、何時にても彼れの瞬き次第で議會へなり示威運動などへの用意を整へて置き、さうして彼等を自由に行動せしめて、その賢明な外交的手腕を妨害してはならぬ、と云ふ點のみに存することになる。これが修正派社會主義の心髓をなす思想で、最近世界戰爭の二十年前に獨逸の社會民主々義の中に勃興し、漸次社會民主黨内の正則の秘密外交となつたのである。かくて、總ては二三の少數の指導者から成る秘密會議で決定され、勞働者の集團は、只指導者の命令を實行するために、存在するに過ぎなくなつた。

此の戰術は、資本主義的國家の戰爭や又は資本主義的黨派間の鬪爭と、資本に對する勞働者の階級鬪爭との間の、根本的差別を全く忘れてゐる。例へば世界戰爭で

は勢力を結合して集團化することは、事實大部分は外交家の能力に依存してゐた。さう云つたゞけでは少し不滿足である。卽ち獨逸の外交が、內部の戰爭によつて腐敗し切つたハブスブルクの君主國よりも、もつと力强い同盟者を願つたであらうことは、吾々の善く想像し得るところだ。が、少くとも五十年進んだ發展は、獨逸をして墺匈國を固持せしめたのである。これによつて、只これによつてのみ、獨逸は露西亞と衝突した。だから有產者的外交の範圍、卽ち所謂『偉大な』政策の範圍に於てさへ、個人の能力は唯一の決定的要素ではない。且つ又吾々は、資本と勞働との階級鬪爭に於て、すべての資本家集團をして、常に繰り返しつゝ一致して勞働者に敵對させるものは、最後の偉大なる決　的利益、卽ち利潤の維持に付いての利益であることを、決して忘れてはならぬ。結合と援助とは、妥協によつて獲得される。獨逸政府は、英吉利に打ち勝つためには佛蘭西との妥協を、又は之に反し佛蘭西に對しては英吉利との妥協を　申し出づることが出來た。併し、勞働者の指導者が資

本と妥協しやうとするや、彼等はいつも忽ちに、利潤を保證するものを認めねばならぬので、彼等は無產者の階級鬪爭の目的に反逆する。さうして此の際行はれる此のやうな妥協こそは、資本家の遙かに强い共同利益と共屬的感情とを動搖させ得るであらうほどに、偉大では決してあり得ない。

それだから、修正派の戰術たる妥協は、事實長い年月を蹌踉して來て、勞働者に最少の利益をも齎さなかつたのである。階級鬪爭は決して、指導者によつて造られ得るものでない。如何に天分の惠まれた人であつても、——假令彼等は勞働者階級から身を立てた者であらうとも、又は同情して民衆の中へ飛び込んだ者であらうとも、彼等では資本家的社會秩序を排除することは出來ない。それはひとり、勞働者自身が爲し得る。それは只、彼等自身の事業たり得るのみだ。

*
*
*

若しも階級鬪爭が、新しい社會秩序を造るための手段であり、さうして勞働者は

階級鬪爭を以前から行つて來 又それは社會民主黨の助力なくして、それよりもずつと以前から存してゐるとするならば、――畢竟、社會民主黨は無用 長物ではないか? それとも階級鬪爭に於て、それは何事かを爲し得るのか?

階級鬪爭の行はれる方法如何によつて、卽ち目的の意識なしに、計畫を立てず、まち〳〵に、浪費的なのと、或は規律的に目的を明かにして行はれるのとによつて、大きな差別が生じて來る。階級鬪爭は計畫なきにつれて、その効力は益々少なく、又益々多くの力が無駄に犧牲にされる。

無產者の苦痛は昨今のことでなく、從つてその苦痛に對する反抗も、ずつと以前から存在する。が、この反抗が計畫なしに生じてゐた間は、それは支配階級にとつて何等の恐怖でもなかつた。それが激發した時には、一度に勞働者階級の勢力は打破されて仕舞ふ。警察の一干涉、一對のドラコ的判決、或は高々一度軍隊を召集すれば、それで全く十分であつた。ところが、殆ど五十年このかた、社會民主黨は、只

煽動するのみでなく、組織化するための、即ち無產者の勢力を相互に排列して、秩序的に共同的の活動へ綜合するための、仕事にとりかゝつてゐた。これは階級鬪爭に一新生面を開いたので、始めてそれが支配者にとつて恐しいものとなつた。彼等は恐らくこれを明かに意識して居らなかつたが、それ以來極めて明かに強く感じて來た。だから彼等は（世界戰爭前！）、狂信的に社會民主黨を嫌つたのだ。彼等は正確に看取したり、正確に示すことは出來なかつたが、而も彼等は極めて決定的に無產者の勢力がその綜合によつて、その秩序的結合によつて、即ち社會民主黨の活動そのものによつて、益々強くなることを感じたのである。

事實、社會主義的社會を導き出すには、直接の人爲的の細工では何うしても駄目なのである。寧ろ吾々が爲し得る唯一のものは、階級鬪爭を、即ち資本に對する無產者階級の反抗を、――それは、吾々が居らなくても、既に存在してゐたところの反抗であるが――出來るだけ有效に構成することである。この事は亦た指導者の人爲

的手段によつて行はるゝものではなく、矢張り多衆が自身でやらねばならぬものである。さうして其れは實に、無產者階級の有つ諸勢力を計畫的に綜合し、且つ彼等をば階級鬪爭が依つて以て發生する所の鬪爭目的物に導くことによつてのみ、卽ち吾々が組織と呼ぶ所のものによつてのみ、行はれ得る。ところで、多衆がこれを爲すためには、彼等は經濟關係の知識を有たねばならぬし、又彼等は、自己の不幸が資本主義的經濟から流出することや、これに對しては、結合された突擊によつてのみ敵對し得ることを、洞察せねばならぬ。このやうな知識は、說明や宣傳によつて彼等に傳へられる。で、吾々が勞働者階級の解放の爲に實際爲し得る總てのことは、實のところ宣傳と組織化とに限定されるのだ。

以上のことをば、エルフルト綱領は次のやうな言葉で明言してゐる。

『勞働者階級の此の鬪爭をば一個の意識的且つ統一的のものと爲し、これに向つて自然的必然の目的を指し示すこと――是れ吾が社會民主黨の職分である。』

以上エルフルト綱領から引用された三つの敎義は、玆にもう一度排列されねばならぬが、それは科學的社會主義の理論的思惟過程を含んでゐる。卽ち次の如くである。

＊　＊　＊

1　我々の目的は、『生產手段に關しての資本主義的私有財產の……社會公共的財產への推移、及び商品生產の社會主義的……生產への變化』である。

2　『此の社會的變革は……勞働者階級の事業たり得るのみ、何故なれば、すべての他の階級の者は彼等自身の間に於てこそ、互に利益を爭ひつゝあれ、……現代社會の基礎を維持することを以て、その共通の目的として居るから。』

3　『勞働者階級の此の鬪爭をば、一個の意識的且つ統一的のものと爲し、之に向つてその自然的必然の目的を指し示すこと――是れ吾が社會民主黨の職分である。』

第九章　社會主義の未來國（その一）

社會主義の目標は何ぞやと尋ねらるゝ時、それは生産手段の私有廢止だと、卽座に答へらるゝことが屢々である。併しその答は、吾々の說明が示したやうに正確でない。私有廢止は目的に對する一の手段に過ぎない。社會主義は之に依つて社會秩序の變革をなし、資本家的の社會秩序を廢して、社會主義的の社會秩序を實現しやうと云ふのだ。只社會秩序は直接に經濟方法に、卽ち生産に依存してるから、生産を變革するならば、それと共に社會秩序の變革も亦現實される譯である。だから社會主義の目標は詰り社會主義的生産の實現にあると云うてもよい。それをエルフルトの綱領には、『商品生産の社會主義的生産への轉移』と云ふ言葉で言ひ表はしてある。

併し『社會主義的生産』とは何を意味するか？　社會主義の反對者は、之に付い

て社會主義者の側から、未だ曾て十分な說明の與へられて居らないことを主張し、且つ彼等は此の缺陷を充さんがために、社會主義の『未來國』について、自分勝手に酷いことゞもを算へ立て、社會主義に對し出來得る限りの反感を唆らんとしてゐる。就中最も有名なのは、自由黨の領袖オイゲン・リヒタア（一九〇三年死去）の書いたものだ。彼は一九〇三年に『社會主義者のすがたみ』【註一】と題する小册子を著はしたが、彼は――さうして根本に於ては、彼れと一緒の有産者階級全體は――その中で社會主義的生産が實現せらるゝと、斯んな風になると云ふことを、色々に書き立てゝゐる。今その一二節を引用して、彼がどんな風に考へたか、その一斑を示さう。

【註一】 Sozialistenspiegel. Berlin 1903. Verlag von O. Gartz, Berlin, Zimmerstr. 8.

（四一―四二頁）『私有財産……社會民主々義の未來國では、生産手段に對する私有權が最早や認められて居らぬから、抵當證、公債證書、株劵、貯金簿　その他

類似の貸借證に對する私有は存在し得ぬ。從つて私有權及び相續權は、必然的に直接個人的使用に供するものゝみに限られる。……』

『社會主義の國家に於ては、生産は國家の計算を以てのみ行はれ、何人も國家以外から生活手段を受け入れることは出來ないのだから、從つて各個人は（婦人をも含む）國家に對して勞働の義務を負擔し、國家の指定した通りの勞働に服しなければならぬ。

『勞働の收益の中から差引かるゝものは、生産費、損害、及び共同經濟に屬する勞働手段並びに生産的消耗品の——卽ち資本の——維持又は擴張に必要なる費用である。その殘りの或る部分は、國家の設備（何人も無償にて利用し得る國家の營造物）に充當せられ、他の部分は、各個人の間に分配せられる。各個人の割前は全然平等でなければならぬ、さうでなかつたならば、不用に屬する享樂手段を集積することによつて、再び私有資本の發生を見るに至る筈だから。

『……此の書（ベーベルの「婦人論」を指す）によると、勞働者に對して均一である。家庭の生活は夫婦の共同生活に限られ、子供は國費を以て、特別の設備内で養育される。食物の調理は中央の設備によつて行はれ、着物の洗濯や修覆も亦同樣である。……』

（二四—二六頁）『社會民主々義の未來國に於ける家庭生活。（著者は先づカウツキーの農政問題に關する著書に記述されるところ——卽ち、あらゆる經濟的衝動から離れたる未來國に於ける家庭生活が、如何に美しきものであるかを描けるところの——を引用して、さて言ふやう）、カウツキーは極めて美しく未來國の家庭生活を叙述し、有らゆる考へ得べき事柄を想像してゐる。併し社會民主々義の未來國の實際のところは、彼れの云ふやうなものでない。カウツキーの言ふところに依ると、將來各個人は各自の家庭に於て、『愛の生活』を爲し得ると云ふことだ。ところが其れには各自の子供が屬してゐなければならぬ筈だが、しかもベーベル

の『婦人論』によると、恰もその子供等は、全然兩親から離され、國費を以て共同的に養育されるのだと云ふことだ。もしさうでなかつたなら、家族の有する子供の數が異なるに從うて、不平等の狀態と不平等の要求とが成立するから、それは社會主義の立場から許されない筈だ。だから兩親の家庭へ小供が歸つて來るのは、せいぐ日曜日に限られるので、丁度今日の幼年學校の生徒と同じやうな譯になる。

『なほ家族が一緒に自分の家庭で食事をすると云ふやうなことは、日曜日であらうと其の他の曜日であらうと、それは勿論出來ない相談だ。……各家庭の臺所の代りに、中央食物供給所と云ふやうなものが出來るのだ。……家庭の生活は必要已むを得ざるものだけに限られる。(べーベルがその「婦人論」の一八六頁に、さう書いてゐる)。乃ち中央食物供給所に次いでは更に中央洗濯所が出來、洗濯物は其處で機械的化學的方法により洗濯され　乾燥され、整へられると云ふことにな

る。【註二】

【註二】　オイゲン・リヒタアは晩年まで獨身生活を送つてゐた。もし吾々の記憶違ひでなければ、彼は何んでも六十三歳になつて始めて結婚した人だ。だから『家庭内に於ける洗濯』がどんなに面倒なものだか、彼は殆ど知らないらしい。寧ろ彼は之を以て、家庭内に於ける一種のお祭のやうに想像してゐて、それで家庭で洗濯をしなくなることを、一大犧牲と考へてゐたのだらう。

『さて子供も居らず、大人も朝晝晩と三度ながら、家の外で食事をすると云ふことになれば、カウツキーの云ふところの、未來の家庭に於ける自由な生活として何が殘るか？　丁度今日の下宿生活のやうなものではないか。否な今日の下宿生活では、少くも朝飯は内で取られるし、どうかすると夕食も外で取らずに濟むことがある。カウツキーは、未來の家庭に於ては、社會民主々義者は『彼れの友達』をも生活せしめ得ると考へてゐるが、併し友達が來てゐても、それに對して冷い物も熱い物も、食物も飲物も、なんにも饗應が出來ぬとあつては、此の家庭に於ける『友達との生活』は、それは友達にとつて殆ど飢を意味するもので、殺風景

極まる話だ。

『夫がその勞働を終へて內に歸つても、細君がその時內に歸つてゐるかどうかは、必ずしも請合はれぬ。何故ならば、細君もその勞働義務を果すがために外出しなければならぬし、しかも其の勞働義務を終へる時刻は、夫婦互に相違することが在り得るからだ。なほカウツキーによると、未來國の人々は、讀書したり、科學上及び藝術上の創作をしたりすることにつき自由だ、と云ふことだ。しかし其れが爲めには、吾々は先づ書物を手に入れなければならぬ。しかるに社會民主々義の國家に於ては、書物を買ふことが出來ないので、たかぐ\大圖書館から借り入れ得るだけのことだ。又科學上及び藝術上の仕事に關しては、只科學及び藝術に關する家庭の需要に對してのみ、それが認容されるに止まる。何故と云ふに、社會民主々義の國家では、學者でも藝術家でも、外部に向つて獨立的に生產することは許されて居らぬからだ。若しそれを許すと、一部の學者藝術家が許し難き金

を儲け名譽を得て、人々の生活狀態の上に不平等を來たし、場合に依つては新たなる資本家の一階級を成立せしむるに至るからだ。

『之を要するに、未來の家庭は宿屋と少しも變らなくなる。……が、それで結構だ、何故といふに、今日吾々の考へるところの家庭なるものは、そのまゝ保存されることになるから。さうしてこれは、各人の知る如く社會民主々義の未來國では、すべての下女、下男又はその他の「家僕」は無くなつて仕舞ふのであるから、未來國に於ける幸福な金持ちにとつては、容易ならぬことになるであらう。……』(五九―六〇頁)『監獄國、將來萬一社會民主々義の國家が實現されたなら、それは一個の監獄國になるだらう。全生產を國家の手で行ふ結果は、生產超過の豫防のため、國家は職業並びに勞働場所の自由選擇を禁止しなければならなくなる。各人は國家の命じるところに從つて、一定の仕事を一定の場所でしなければならぬ。かくて職業に關する個人の自由は全然蹂躪されて仕舞ふ。同時に又、國家が

消費を調節すると云ふことも、――需要以上に生産されると何時でも起つて來るところの大損害を豫防するために、――是非必要になつて來る。しかるに國家による消費の調節は、生活享樂の種類に對する自由の選擇を蹂躪し、各個人を全然奴隷化して仕舞ふ。――要するに今日の監獄が社會民主々義の未來國の手本である。』

しかるに『未來國』に關する此の種の描寫は、啻に反對黨の煽動文書に現はれてゐるのみならず、有產者の學問的文獻の中にも現はれてゐる。一例としてマイヤアの百科辭典に、共產主義の說明をしてある所を見ると、次の如く書いてある。

『共產主義の特徵とするところは、人間の幸福及び正しいノルマルな社會狀態は、各個人の無條件的平等の成立する所に存す、となす點にある。從つて共產主義の社會には、經濟上、社會上 政治上に於て如何なる種類の差別をも存することなく、さうして勞働の負擔や、所得や、享樂は總て平等になる。社會は此の目的の

ために、各人の經濟的活動を規律する一の機關を要求する。此の機關は財產團體の上に置かれねばならぬ。總ての生產手段及び享樂手段が總體の所有に屬するからだ。そこには私有權なく、又相續權もない。社會が平等の原則に從つて、物財の生產、分配、消費を規定する。勞働能力ある者には總て勞働の强制がある。子供の養育は共同の費用で平等に行はれる。總ての共產主義者は此の思想範圍を動いてゐる。勿論個々の點に於ては、…………互に相違してゐる所もある。……或者は（科學的社會主義者を指す）共產主義をば大きな一個の中央集權的國家で實現しやうとしてゐるが、此の場合には中央の官吏が、恰も人形芝居に於ける人形を操つる如くに、總ての個人の行爲を指揮するのだ。………』

終りに臨んでもう一つ　ゲォルグ・ウェーベルの世界史略（第一五卷、第一部、七四〇頁）が、國民自由主義の一選擧新聞に基いて、如何に『社會民主々義の國家』を叙述して居るかを引用しやう。

『農民は最早や自己の田畑で何物も求めることは出來ない。工場主は無くなり、その代りに國家の任命したる官吏が現はれて、總ての者卽ち國家の計算に於て、工場を經營する。……財產權は廢止されて仕舞ふ。各人は自己の責任である筋肉勞働の傍に、藝術及び科學に從事することが出來る。けれども、このやうな精神的勞働に向つては、全勞働の收獲に對する分割は少しもない、それは、勞働者の汗によつて自己を養ふことになるからだ。だから未來國では、學者も藝術家も殆ど居らない。又社會民主々義の國家では、嚴格な意味での商人は存し得ぬ。……社會民主々義の國家では、又一人の僧侶も存し得ぬ、何故といふに、社會民主々義者は彼等がしばしば認容する如くに無神論者であるからだ。……結婚は愛が續いてゐる間だけ締結される卽ち定期結婚が行はれるのだ。子供の養育に付いては、兩親は心配する必要がない、それは國家の義務である。男女は互に愛を感ずる時に、勝手に一緒になり、又分れるのも彼等の勝手だ。』

吾々が今、此等の文章の底に横はつてゐる考を剝ぎ出して見るならば、先づ次の如きものである。

＊　＊　＊

もし利潤を得ることが出來なくなるならば、私人は其の資本を生産のために使用することに何等の利益を有たなくなる、私人の企業は無くなつて仕舞ふ。從つて一切の生産業は、國家の官吏によつて經營されることになる。國家は唯一の企業家になるのだ。さうすると、國家又はその局に當つてゐる人々が、恐るべき權力を各個人の上に有することゝなり、其の結果、現在及び過去の一切の暴政は、單なる兒戲に類することゝなるだらう。何故といふに、さうなると、各個人は生活するために、國家の官吏の命令に從つて、その指揮の下に勞働することを餘儀なくされるからだ。啻にそればかりでない。國家の官吏は、消費と生産とが互に合致するやう常に注意しなければならぬので、啻に生産及び勞働に關して、人々を指揮して型に嵌

めて行くだけでは濟まない。彼等は消費に關しても心を勞さなければならぬ。彼等は、各個人に向つて何をどれだけ消費し得るかを指圖しなければならぬ。さうでなかつたならば、餘りに多く消費されて、其の結果缺乏と飢餓を生じなければならなくなる。又或る品物は消費者が十分にないために、持ち越した殘物は腐つて仕舞ふと云ふことなども、起り得る。だから消費に對する官吏の絶間なき干渉が、是非とも必要になつて來る。かくて一切の個人的自由は其の跡を絶つ。

まだ其れだけではない。官吏は、『總ての人に向つての平等の權利』と云ふ原則に從つて行動するの外はないのだから、その結果彼等は、各人に向つて平等の勞働量と同數の勞働時間とを課し、又各個人に向つて平等の消費を當てがはなければならなくなる。各人は丁度同一のものだけを、又その丁度同じ分量だけを、獲得することが出來る。從つて人々の一切の個性は無くなり、總ての個人的差別は消滅し、總てが寂寞たる灰色の平等化の裡に沈沒して仕舞ふのである。

數十年このかた、以上の如き非難が、社會主義の『未來國』を恐しいものに思はせる爲に、絶えず爲されたのである。それによると、『未來國』に於ては、個人的自由並びに個性は全然跡を絶つと共に、あらゆる個人的の企業的精神や向上的努力もひとりでに廢れて仕舞つて　一般に有らゆる人間的活動を永久に中止して仕舞ふ筈である。

吾々は此等の非難を說き明かさねばならぬ。今、科學的社會主義は、此等に對して何と答ふべきであるか？

もし社會主義者が意地惡く出る積りならば、答辯は極めて簡單で濟む。それは斯うだ――假ひ反對論者の言ふが如くであつても、勞働者階級は之によつて何等失ふところがない。何故といふに、社會主義の世の中になつたら斯んな厭な事が起ると言つて、反對論者の列べ立てゝゐることは、勞働者に對しては資本主義の現在國家に於て己に存在しつゝあることなのだから。念のため一應調べて見やうか！

第一に、社會主義の世の中になつたら、職業及び勞働の場所を自由に選擇することが出來なくなる、と云ふのだが、しかし今日誰が其等の自由を有つてゐるのか。それは餘程工合善く金持の兩親を選んで生れ落ちた少數の者に限られる。總て其他の者は、相應有福な家に生れた者でも、其の職業を選擇するに當つては、先づ第一に其れで食つて行けるか何うかを、考へて見なければならぬ。況んや勞働者の子になると、敎育を受けるだけの金がないのだから、職業の自由選擇など云ふことは、頭から問題にはならぬ。鑛夫や車夫の子は、親父と同じやうに、矢張り鑛夫や車夫になるまでのことだ。勞働の場所にしても、決して勝手に選擇の出來るものではない。何處でも、仕事さへあれば、それで悅ばなければならぬ。

第二に、社會主義の世の中になつたら、消費に關し、生活の享樂に關し、自由の選擇が出來なくなる、といふのだが、今日普通の勞働者は、誰もそんな自由を有つてゐない。上等の肉や甘い酒が欲しいと思つても、芝居を見たい音樂を聽きたいと

思つても、保養や見物のために旅行したいと思つても、金がないので其の自由はない。今の世の中で消費の自由を有つてゐるといふのは、それは金持に限るのだ。貧乏な勞働者は、夙くに消費の自由を失つてゐるのだから、社會主義の世の中がどんなになると言はれたところで、彼等には別に恐るゝ必要はない。

又反對論者は、社會主義の世の中になつたら、相續權が無くなるぞ！と言つて吾々を脅かすけれども、その日〳〵を食ふに困つてゐる勞働者に、それが何んの問題であらうぞ。

或は又、社會主義の世の中になつたら、人々が勞働の義務を課せられるがために、妻の勞働時間は恐らく夫の勞働時間と一致しないで、彼等は幾日も幾週も顏を合さないやうな場合が起ると云つて、更に吾々を脅かさうとするけれども、そんな議論をしてゐる先生方は、數萬の勞働者に取つて、其れが夙くの昔に、彼等の現狀になつてゐると云ふことを、思ひも染めてゐないのだ。だから玆でも勞働者に取つては、

卽ち人類の大多數に取つては、縱令社會主義の未來國が、反對論者の描くが如きものであつても。少しの困難も起らない筈だ。

要するに、此等の不平は明かに皆有產者の不平なのだ。それは．自分等だけが現在都合のよい生活をして居り、同胞の大多數の者に先つて色々な利益を受けてゐる極く少數の人々が、社會主義の實現により、其等の利益を失はんことを虞れての不平に外ならない。それにしても、社會主義を出來るだけ厭なものに思はさうとして、折角いろ〳〵な事を考へ出して列擧してゐるのに、それが盡く、現在の資本家的國家に於ける無產者の大多數に取つて、何れも已に存在しつゝある事柄だと云ふことは、吾々の注意に値する。

反對論者に對し意地惡く出れば、吾々は以上の如き辯明で事は足ると思ふが、しかし吾々は更に進んで、反對論者に對し、今度は此方から問題を提出して見やうと

思ふ。彼等の言ふところによると、資本主義の經濟組織を廢止し、利潤を無くして仕舞ふならば、上に列擧したやうな樣々の惡結果が生れて來るといふのだが、吾々は姑く其れを總て是認することしやう、さうして、そんな厭な結果が起つては困るといふので、社會主義を實現せんとする吾々の努力をば全く中止して仕舞つて、利潤には手を觸れぬことにした、と假定して見やう。さうしたならば、どんな事になつて來るか？　それを吟味して見たいものである。

今この問題に答ふるには、議論も想像も要りはしない、吾々は只現在の事實から、十分なる明白さと確實さとを以て、之に答へることが出來る。

『コエルニッシエ・フォルクスツァイツング』――一切の社會主義及び共產主義に對し決定的の敵對的態度を採れる、中央黨の有力なる機關紙――の一九〇七年一月號には、國民經濟上一つの無駄話に過ぎない、次の如き記事が載つてゐる。

『佛蘭西のロスチャイルド家の財產は、今日一百億フランに達してゐる。一百億

フランと只言つたゞけでは見當は付くまいが、佛蘭西國民全體の富は二千億フランなのだから、卽ち其の二　分の一だけのものが一人の手に歸してゐると思へば、それは偉い財產だと云ふことが解からう。每年、佛蘭西國民全體が商工業から獲得する富の二十分の一が、たつた此の一家族のポケットに流れ込むのだ。』

一寸見たところで此の通りだ。ところが佛蘭西に於ける富豪はひとりロスチヤイルド家だけでなくて、それに似寄つた大金持はまだ何十とあるのだから、つまり此等の富豪に屬する何百かの人間が、佛蘭西に存在する財產の殆ど全部を握つてゐて、殘りの三千五百萬乃至三千六百萬の佛蘭西人は、殆ど何んにも有つて居らぬ、と云ふことが容易に判斷できる譯だ。なほ一層重要なことは、上掲の文句に引續くところの次の記事だ。

『ロスチヤイルド家の祖先ヤコブ・ロスチヤイルドが巴里に移住した時は、八十萬マルクの財產しか有つてゐなかつたが、それが九十年足らずの中に、上記の如

き巨億の財産に殖えたのだ。……それならロスチャイルド家の將來は何うなるだらうかと云ふに、それは疑ひもなく益々繁昌するであらう。先代のアルフォンス男は、死ぬる數日前に、「私の父は私に十億の財産を遺したが、今私は自分の子に百億の財産を遺す」と云つた。しかも其の十億が百億になつたのは、僅かに三十六年間のことだ。もし此の勢でロスチャイルド家の財産が益々殖えてゆくものとしたら、將來何時かは、佛蘭西國民の全財産が此の一家に集中するの日が來るだらう、といふ考へに到着し得る譯だ。……恰も磁石がその近所に來る鐵を皆吸ひつけるやうに、小さな財産は大きな財産のために總て吸收されて仕舞ふ。經濟學者は途方に暮れて、只この事實を見てゐる。……一人の手に巨大な財産が集積さるゝと云ふことは、現時に於て注意すべき社會政策上の現象中、特に最も注意すべきものである。』

此の豫言が少しも法外でもなく誇大でもなくて、寧ろ現實を基として爲されたも

のであることは、ロスチャイルド家が最早や此の世界で最も富める資本王でない、と云ふ事實が敎へてゐる。上述のところは、米國の『石油王』のロックフェラアに付いても同樣である。彼れの一九〇六年度に於ける所得は、二億四千マルクと稱せられてゐるが、それは卽ち一日每に六十五萬マルク、一時間每に二萬七千五百マルク、一分間每に四百六十マルクの所得を得てゐる。といふことになる。又他の一人の米國人である大富豪のモルガンに付いて、紐育のウォールドストリート雜誌の一九一一年六月號の報道によると、彼れの管理に屬してゐる財產の評價額は、凡そ十億ドル、卽ち二百五十億マルクに達する、と云ふことだ。

勿論米國と違つて、歐羅巴大陸では、斯んなに酷くなつてゐないが、そんなことは何うでもよい。蓋し玆では、此の如き巨大なる財產の個人への集中は、――從つて他の人達に對し何物も殘らなくなると云ふことは――要するに利潤の獲得によつて行はれると云ふことが、問題となるからだ。年々歲々、新しい價値が著しく資本

王に流れ込む。利潤經濟が保存されてゐる限り、歐羅巴に於ても亦、晩かれ早かれかの米國のやうな狀態が現出されるに相違ない。而も獨逸にては、最早や今日となつては、米國と著しくは變つて居らない。かの獨逸銀行や、合同電氣會社や、鋼鐵業團體などが形成するところの、偉大なるコンツエルネを考へて見よ。既に一九一〇年に、ウォルター・ラテナウが『歐羅巴大陸の經濟上の運命は、萬事を呑込んでゐるところの、僅か三百人の人々によつて導かれる』と放言したのは有名なことである。

資本家的の利潤經濟が今日のまゝに維持されて行つたならば、世の中は遂に何うなるか、それは甚だ明白である。今日己に資本の大部分は、殆ど數百乃至數千の手に歸してゐるが、それは益々少數の人の手に集中される。さうして若干の資本王が驚くべき巨額の富を擁して、他の一切の人々の經濟生活全部の上に絕對專制の君主として臨み、此等の人々の生活方法、勞働及び消費をば、耐へ難き方法に於て制抑

することゝなる。勿論これらの資本家は、其の事業の經營のために相當の報酬を出して、色々の役員や、技師や、監督やを雇ひ入れるので、此等の人々は所謂產業界の中等階級として、物質的には相當の暮しをして行ける。が、彼等も亦、自分達の數が段々殖えて行くでもなく、且つ其の雇主の一顰一笑によつて直ぐに無產者階級に落されて仕舞ふと云ふ絶えざる心配の下に生活してゐなければならぬので、決して個人的の自由を享樂する譯にはいかない。尙これら中等階級の下には、大多數の無產者が群を成して蠢動してゐるが、その數は、資本家的の競爭戰に負けて新たに無產者階級に振ひ落されて行く人々のために、次第に增加する。彼等の多くは、今日は猶ほ有產者階級に屬しつゝも、明日は無產階級に落ちて行くのだ。さうして此等の人々が、經濟生活に於て無條件的隷屬の地位に立つは云ふまでもなく、彼等はいつも缺乏や赤貧や失業の恐怖に襲來されつゝある。

これが資本主義の未來國の光景である。若し吾々がそれに對し、適當な時に注意

を拂はないならば、吾々は遠からず斯かる未來國に當面せねばならぬであらう。

そこで吾々は一個のヂレンマの前に立つ。利潤を廢止せんか、——然る時は厭ふべき社會主義の未來國が來る。利潤を廢止せざらんか、——然る時は又決して之に劣らざる程度の厭ふべき資本主義の未來國が來る。

そこに活路は無いのか？

第十章　社會主義の未來國（その二）

以上述べた所によると、社會主義を實現するにしても、現在の資本主義を維持するにしても、いづれの場合でも、社會の將來は絶望せねばならぬやうだが、さてさう爲つて來ると、社會主義の反對論者が利潤廢止のため起ると稱してゐる彼の恐るべき結果は、果して事實避くべからざるものであるか何うか、其の點を今少し綿密に研究して見る價値がある。

勿論吾々は、玆で『未來國』の樣子を、委しく詮索して見やうと云ふのでは無い、――それは誰にも分らぬことで、强ひて其れを豫想しやうとすれば、全く非科學的の空想に陷る外あるまい。只吾々の研究しやうとするところは、社會主義の反對論者が社會主義を實行すれば此の如くになると言つてゐる事柄が、果して科學的社會主義の前提及び要求から必然的に出て來るものであるか、それとも之と違つた結果

が生じ得るものであるか、といふ點である。

總ての社會主義の主たる根本の要求は、社會主義的生産である。それは利潤を認めず、生産手段に對する私有權を認めざる一の生産であり、從つて販賣と云ふことの行はれない一の經濟秩序である。社會主義の實現しやうとするところは、卽ち是れに外ならぬ。

今再び、吾々が學び知つたところの、經濟的發展の進行を回想するに、それは次の如き系列をとつたものである。

自己生産。

分業――手工業。

單純協業。

新たなる分業――手工的工場工業。

機械の應用――大工業。

個々の企業の膨脹。
個々の企業の聯合――リング、カルテル。
企業間に於ける分業――シンディケート。
企業の合同――フユーヂオン、コンツエルネ、トラスト。
最後に、今日までの最高形態としての、混合經營。
總て此等の發展を通じて、次第に實現されるところのものは、吾々の既に知つてゐる如く、勞働の社會化と云ふことである。今此の如き勞働の社會化は、誰が之を齎し誰が之を促進せしめつゝあるかと云ふに、それは社會主義者でも共産主義者でもなくて、實に數百年このかた專ら生産界の覇權を握りつゝある資本家そのものである。彼等は單純協業。卽ち四五〇年頃から、上述の如き有らゆる計畫――それは中世の始めより、生産を全般的に變革して來たところのもの――をめぐらした、何故なれば、さうすることは生産を增加せしめる爲の唯一の手段であつたから。而も

斯の如きは無意識に起つたのでなく、それは生産の資本家的管理者が、所謂『勞働の社會化』なるものは、生産力の增加のため必然的に起るに相違ないことを、全く明かに知つてゐたからである。かの極めて正直なコエルニッシエ・ツアイッングのやうな企業家新聞は、例へば一九〇九年の十二月に、當時のプロシャ政府を嚴しく非難し、政府に加里鑛山業の經營困難の責を負はしつゝ、次の如く論じてゐる。

『旣に以前から、個々の鑛山の十分な合同を行ひ得たとするならば　吾々は今や比較的少數の鑛山を以て、極めて高き經濟的生産力を得てゐた筈である。その時には、恐らく此の事業の發展は、炭坑やその他の產業部門に於けると全然同じ方法で行はれたであらう。……現在は五十以上であるが、恐らくこゝ數年間のうちには百の加里企業によつて爲されるところの勞働は、正しく十二の事業によつて遙かに善い結果を收めつゝ爲され得るであらう。……だから吾々は加里工業に於ては、生産に比して遙かに莫大な資本を、極めて非經濟的に下して居つたと云ふ

ことになる。』

上述の如くであるから、資本家は極めて正確に、益々發展する勞働の社會化によつて、その生産力が益々增加することを知つてゐる、――彼等は其れを目標として働くのだ！　ところが彼等は他面では、常に增加して行く欲望――競走となつて現はれるところの――によつて、絶えず急き立てられるものだから、彼等が一度踏み込んだ道をぐんぐん進んで行くは、一寸考へても明かなことだ。彼等は止まるところを知らない。さうして加里工業に當嵌まることは、鑛山に於ても、鐵工業に於ても、約言すると總ての工業に於て、丁度同樣に當嵌まるのである。

ところが、資本家によつて『爲さるゝ』此の種の發展が、今後益々行はれてゆくものとするならば、將來何時かは、今日現に種々の事業が混合經營の下に合同されてゐると同じ趣を以て、全國に於ける種々の事業が全部互に連絡されて仕舞ふと云ふが如き時代の、必ず到來すべきことを、豫想しなければならぬ。しかるに、若し

さうなつたならば、それは已に社會主義的生產の重要なる一部が、卽ち生產の計畫性（Planmässigkeit）が、實現されて來たと云ふものである。それは、何等社會主義者の助力に待つことなく、只勞働を益〻生產的ならしめんとする必要より、資本家それ自身によりて實現せられるのである。さうなると、恰も今日、一個の混合經營の內部に於て、或る部から他の部に對し、その生產物の販賣が行はれないで、各部は本來その欲望の爲に働くと同じやうに、生產の內部に於ては、販賣といふことも最早や起らぬやうになる。

併しながら、前記の如き發展の傾向は、必ずしも一國內に局限さるゝ譯はない。現に久しい前から、已に國境を超えて進んでゐる。之に付いてはリーフマンが、石油業について、次の如き顯著な實例を擧げてゐる。一八九八年獨逸銀行は一維納銀行と協同して、ルーメニアにステアウア・ローマナと謂ふ一大石油會社を起した。それは、當時西部歐羅巴諸國の供給を支配してゐた米國及び露西亞の石油に對し、

競爭せんがためであつて、獨逸銀行はルーメニアの石油を販賣するため、ステアウアと協同して、獨逸、英吉利、丁抹國、和蘭及び瑞西國に、各々一つの會社を起した。然るに間もなく露西亞の生産業者が之と合同を企て、獨逸並びに英吉利に、共通的の販賣會社を起した。一九〇六年には、當時各々多數の支店を有つてゐたところの、かの英吉利及び獨逸の會社は、有利にも相結合して歐羅巴全體を支配する一大會社となつた。これは米國の有名なるスタンダアト會社――當時この會社は、已に有力なるトラストを組織して、米國に於ける石油生産の約九割を掌中に握つてゐた――に對し、競爭するの目的を以て組織されたものである。けれども其の後兩者の間には、さしたる競爭も行はれず、間もなく一九〇七年に妥協が成立して、其の結果、獨逸 墺太利、和蘭、米國、佛蘭西、露西亞の資本家が、全世界を包括するところの一大トラストを組織し、世界到る所に於て石油の生産及び販賣を支配することゝなつた。石油に關する此のトラスト以外のものも、其他の小會社に依り同じ

方法で組織されやうとしてゐる。疑ひもなく、此の石油生産と石油販賣との組織は、今日まで一の經營の世界的組織に關し、又世界的需要が一の消費物體を以て供給されてゐるものに關し、最高のものである。

これは只一例に過ぎぬけれども、資本家は他の事業に於ても此の方向に向つて發展しつゝあるから、將來何時かは、全世界の生産が總て此の調子を以て計畫的に支配せらるゝ時代が、必然的に到來すべき筈である。果してさうなれば、其れは少數の者の利益となるのみで、之に反し、曾て此の商品の生産と販賣とによつて生活し又現に其れに從事してゐる總ての人々の損害となり、引いては消費者までの損害となる。換言すると、トラストによつて、少數の大資本家は著しく富むと共に、巨大なる權力を彼等の手中に掌握するに至る。しかも彼等の富は、その壓制的支配の下に隷屬せざるを得ざる、消費者並びに生産者の支拂つたものだ。

以上の事柄は、まだ獨逸では、米國ほどに明かに看取されない。トラストの發達

は米國の方が遙かに進んでゐるから、茲に同國に於ける事例の二三を引き合ひに出さう。

先づ富の獲得に付いて見るに、一九一〇年四月發行の『經濟及び統計年誌』に記載するところによると、當時スタンダアト石油會社は、只獨逸國からだけでも、年々四千萬乃至四千五百萬マルクの純益を得てゐる。しからばスタンダアト石油會社とは、全體誰が組織してゐるものかと云ふに、リーフマンに從へば、それは、かの有名なロックフェラアと、今は故人となつてゐるヘンリー・ロージャアスと、ヂェイムス・スティルマンと、只この三人である。して見ると、ロックフェラアの一九〇六年に於ける收入が、二億四千萬マルク以上だとコエルニッシェ・フォルクスツァイツングが云つたのも、敢て不思議ではない。現に一九〇七年度に於ける石油會社の純益は、略ぼ三億五千萬マルクに上ぼつたといふ事だ。――かの米國の鋼鐵トラスト（それにも亦ロックフェラアは關係してゐる）は、一九〇七年には六億八千

萬マルクの純益を、一九〇八年には四億マルクの純益を上げてゐる。

此の莫大な金額は、一部分は消費者から要求した過分の代價により、又一部分は勞働者に支拂ふ僅少の勞賃によつて獲得される。卽ち鋼鐵トラストは各使用人並びに各勞働者に對し、一九〇七年には平均凡そ三千マルク宛を仕拂つてゐる。これは一寸目には莫大な額だ。併し先づ第一に考ふべきは、これは平均額だと云ふことだ。卽ち玆では、社長や支配人などの、高級な使用人や最高の使用人の給料までも含まれて居り、又事實彼等は極めて多額の給料を得てゐるから、勞働者の勞賃は、平均額の三千マルクを遙かに下るのである。又第二には、米國では生活の標準が獨逸よりも著しく高くて、恐らく其處の三千マルクは、高々戰前の獨逸の二千マルク位のものである。

併しながら、トラストの收める莫大な利潤は、主として正規の方法に於て、卽ち生產の節減によつて獲得せられる。勞働者の有らゆる結合によつて、彼等の勞働の

生産力が增加するのは、繰り返し示されるところだ。合理的に生産を爲し得る場合には、あるだけの物品は悉く捌けて仕舞ふ。その他いろ〳〵の利益があるが、勞働者と使用人とに取つては、只失職と飢とがあるのみだ。斯くて、例へば八十の工場から成るウイスキーのトラストは、一時に六十八の工場を閉鎖して、殘りの十二の工場で全需要を生產した。六十八の工場の勞働者及び使用人は道路に掃き出された。劃一的の販賣では、すべての廣告術を、從つてそれで生活してゐた總ての人々を不要にする。行商人や代理人なども不必要だ。以前彼等が獲得してゐた總てのものは、今や、トラストを有するところの、少數の大資本家の金庫に流れ込む。それらの大資本家が如何に少數であるかは、旣に石油トラストで見たところである。一九一〇年度の官廳統計の示すところによると、米國の鐵道は、その全體の四分の三が、僅かに九十三人の手に歸屬してゐる！

此の如き富の集中に伴うて起るところの、最大の弊害は、これら少數者の掌中に、

一の恐るべき權力の集中が起る、といふことである。此等の大資本家に直接に隷屬するところのものは、その使用人及び勞働者であるが、これは大した數に上ぼつてゐる。例へば鋼鐵トラストの如きは、上述の如く、既に一九〇七年度に於て、二十一萬人以上の人々を使用してゐる。が啻に此等の使用人及び勞働者ばかりでなく、一般消費者も亦、可なり直接に、此等の大資本家に隷屬してゐる。どんなに生産物の價格を高めやうが、消費者は其れに對して全く無力である。啻に消費者ばかりでなく、國家の權力そのものが、トラストに對しては無力である。國家は、此の偉大なる企業の創設及び統轄に際しての最も甚しい犯罪や、又これらの少數の株主や資本家の掠奪を、幾分か妨害することさへも出來なかつた。『此等の大資本家はそれぞれの國に於て政權を手中に收め、又彼等の都合好きやう立法を左右し得る狀態が、著しく現はれて來てゐる』(リーフマン)。勿論彼は、これが偶然の事ではなくて、トラストの所有並びに其の國の殆ど全生産に及ぼすところのトラストの決定的影響と、

必然的に結合してゐることを看取して居らない。將來もし此の勢を以て進んだならば、米國に於ける經濟的、社會的及び政治的生活の全部は、總て此等若干名の大資本家により、直接に支配せらるゝの日が必ずや來るであらう。これこそ、オイゲン・リヒタアの想像が恐しいものと考へなかつたところの、資本主義の『未來國』の狀態であらねばならぬ。

然らば獨逸國では如何？　今や、獨逸の勞働者は、自己の大資本に對する隷屬性を善く知つてゐる。試みに、エミール・ローゼノウの『日影に棲む人々』と題する面白いドラマを讀んで見よ。それには、開拓地に於ける大經營の勞働者が、既に久しく個人的自由を少しも享樂してゐないどころか、寧ろ仕事から私的生活に至るまで——彼等の住所、彼等の同居人、又は夜は家に止り或は點燈時間の制限をうけるなど——悉く命令に依らねばならぬ、ことが描かれてゐる。つい二三年以前のこと、一人の坑夫が自分の子供をば、最早やその鑛山で勞働しないからと云つて、そ

の棲家から追ふべく强ひられたこいふ報知は、世の耳目を脅した。だからラウマンが、曾て適切にも『工場的封建制度』(„Fabrikfeudalismus")と名づけし狀態が、既に獨逸にも存在してゐるのだ。

斯かる事實の前に立つて、吾々の解決しなければならぬ問題は何であるか、それは極めて明瞭である。——如何にして吾々は、トラストの利益を、卽ち全地球の上に行はるゝ生產の密接なる連絡及び計畫的の支配こ云ふことを、十分に留保しながら、しかも同時に、その弊害から、卽ち極めて少數の大資本家の利益のために總ての人間が絞取され隸屬化せしめらるゝと云ふことから、全く解脫することを得るかと云ふ問題が、卽ちそれである。

これが解決の手段は資本の沒收である。しかし左樣のことが、資本家——少くとも最後に殘つた最大の資本家——自身によつて實現さるゝが如きことは、到底あり得ない。勿論資本主義の發展に伴ひ、多數の資本家は次第〳〵に倒れ、その數は益々

少なくなつて來る。けれども殘存者の權力も亦、是が爲に愈々强くなつてゐる。しかのみならず、或る所有者階級が自ら進んで斯かる大權力を投げ出した實例は、歷史上未だ曾て有らざるところである。勿論、自分の利益のために勞働の生產力を高め、又之によつて絕えず生產方法を變化せしめたものは、常に支配階級それ自身であつた。しかし之が必然の結果として生じ來るべき、社會秩序の變革は、決して支配階級によつて實現さるべきもので無い。却つて其の逆に、此等の支配階級は、その有する所の有らゆる力を以て　社會秩序の變革に反對する。それは、今日まで被支配者の地位にゐた所の無產者階級により激しい階級鬪爭の結果として、始めて實現せられ得る所のものである。

將來とても同じことだ。生產の計畫性が行はれ、從つて多數の個々の資本家の倒壞が其の絕頂に達する時は、最早や餘り遠くはあるまい。が、さうなつた時にも猶存在するであらう少數の大資本家は、彼等の生活手段に對する私有財產を進んで投

げ出さうとは、夢想だにしないであらう。こゝに於てか、無産者の階級鬪爭の、最後の、決定的の、言ふに忍びざる困難なる時期が始まるのだ。

併しその時期を經過して、資本の沒收が貫徹されて仕舞つたならば、そこに始めて、社會主義的生產が行はるゝことになる。そは、近代に於ける大經營の勞働方法を、社會全體の範圍に推し擴げたものに外ならぬ。

ところで吾々の知る如く、勞働の社會化が一步〳〵進むにつれて生產力は增加するものだから、さうなつた時には勞働の生產力は今日と比較して、吾々が今夢想することさへも六かしい位に發展するであらう。これは決して空想でも妄想でもなくて、實に嚴肅なる科學的結論である。事實は正に斯の如きである。上述のところは、吾々が社會科學的に、恰も天文學や數學に於けると同じ確さを以て、未來に對する結論を引き出し得るところの、極く稀なる一例に過ぎない。茲に於て吾々は事實叫ぶことが出來る。將來は斯くの如くであると。

かやうに增進したる生產力は　何人でも想像し得べき欲望——そは望むらくは、常に今日の欲望よりも遙かに大なるものであらう——を充足せしめ得るであらう。何故といふに、文化は何よりも先きに、人間が消費するところのものに現はれるから。ヨリ少なき消費は未開の標章である。生產力は益々增進して、今日過重に見える欲望そのものを悉く充すといふよりは、寧ろそれらを充して尙餘りあるやうにならねばならぬ。さうしてこの事たるや、勞働の社會化によつて達せられるのである。若しこのことが達せらるれば、各個人の消費に對しても、各人の欲望を標準とする外に、他の標準を必要とする事情は無くなつて仕舞ふ。

右は、特に重要な點である。何故といふに、社會主義が實行されたならば、『勞働收益全部に對する權利（勞働全收權）』が實現される筈だとか、『同一の勞働に對しては同一の賃銀』といふ原則が實現される筈だとか、云ふやうな考へが、多くの人々の頭に殘つてゐるからである。この中、第一の勞働收益全部に對する權利（勞働全

收權）なるものは、全く無意味の概念である。何故といふに、社會主義的の共同團體に於ては勿論のこと、現に今日の社會に於ても各々の生產物は何れも非常に多數の人々の共同勞働の結果であるから、個々の人々が各々何れだけづゝそれに貢献してゐるか、從つて個々の個人の勞働收益は何れだけであるか、と云ふやうなことは、到底解決することゝ出來ぬ問題だからである。第二の原則も、社會主義とは、全く相容れぬものである。社會主義は、總じて賃銀なるものゝ存在せざるところの、又平等とか不平等とかを問はず『正當』とか『不正當』とかを問はざるところの、狀態を實現しやうとしてゐるのである。社會主義が完全に實現された社會には、買ふべき『商品』が無いのだから、勞働者が貨幣の形で賃銀を受取るといふことは、全く意味を成さない。各人の享樂し得る消費は、何等かの方法に於て、各人の提供する勞働に釣合はさなければならぬと云ふ考は、非社會主義的の考で、總て排斥しなければならぬものである。總ての貨物が豐富である以上――而も此の事は社會主

義的共同團體の第一前提である――此の如き制限を設くる必要はない。何故といふに、勞働の目的こそは　各人が消費するところの分量だけを、各人の思ひ通りに為さしめると云ふ點にあるからだ。

ところが、なほ一層重大な問題は、社會主義の社會に於ては、果して誰が欲望の種類及び大きさを定めるかといふ點である。之は最も大事な點だ、と謂はなければならぬ。何故といふに、もし社會主義の社會に於て、何人かゞ、各個人に對してその消費し得る貨物の種類と分量とを制定するの權利なり權力なりを、有つて居るものとするならば、その社會は正に一個の『監獄國』となり、個人の自由は跡を絶つことになつて仕舞ふからである。

併し幸にして　社會主義の社會に於ては、此の如き事を規定する必要がない。各人の得たいと思ふ物は何時でも手に入れ得ると云ふことが、保證されてある社會である以上　人々が單純な放恣から、無暗に品物の浪費をすることを、恐れる必要は

ない譯である。誰でもが一度食ひ過ぎて胃を損じたならば、それから後は、只足るだけ食べて滿足することになる。だから吾々は、社會主義の社會に於て、各個人の欲望の種類及び分量を定むるものは個人各自である、といふことを、明白に言ひ切ることが出來る。かの『各人はその欲望に應じて』といふ文句は、社會主義の社會に於ける消費の根本原則として『各人は各々其の得んと欲する所のものを得る』といふ意味に外ならぬと、吾々は立派に言ひ切ることが出來る。かくて吾々は、次の如き組織を想像することが出來る、――そこでは今日の商人の職務に相當する一の職務があつて、欲望の仲介となり、貨物を必要な分量だけ生産し、それらが消費される各地方へ輸送し、其處の貯藏所にて貯藏管理し、さうして終に各消費者の欲望に應じて其等の貨物を手渡しする。

しかるに『各人は其の欲する物を、其の欲するだけ、其の欲する所に於て、自由に消費する』といふ此の根本原則が實現せらるゝならば、吾々は始めて茲に眞實な

る個人的自由の前提を得た、といふものである。各個人が如何なる場合に於ても生活の保證を得てゐると云ふことになれば、吾々は始めて自分の職業を自由に選擇することが出來る。そこ〳〵個人的自由なるものに於て、職業の選擇が極めて重要な地位を占めて居ると云ふことは、今日大抵の人々の忘れてゐるところだ。が、全生活を充すものは職業であり勞働であつて、それは生活に其の本來の内容を與へるものである。蓋し如何なる人間でも、その職業を選擇するに當り、單純に自分の能力、天分、性向をのみ標準として之を決することが出來、その地位に安んじ、悦んで勞働に從事しつゝ、立派な製作物を造るのでなければ、その人は決して『自由』だと稱することは出來ぬのであるが、前にも既に述べたやうに、革命の前後を問はず、今日の社會に於て此の如き境遇に居るものは、特別に金持の兩親を有つた極めて少數の人に限られるのである。その他の總ての人々は、啻に生れ付きの無産者や、中等階級のみならず、相當の暮しをしてゐる者でも、職業を選擇するに當つては、金に

成るか成らぬかを考慮に入れねばならぬが、況んや無産者卽ち人類の殆ど全部に取つては、それが唯一の問題であつて、個人的の希望や能力は初めから全く問題にならぬのである。彼等の多くの者は、兩親の貧窮なるがために、可惜人生を苦惱にする職業や勞働場所を强制されるのだ。されば吾々が人類を解放して之を自由にしやうとするならば、吾々は勞働に關して人間をば自由にしなければならぬ。しかもこのことは、各個人に對し總ての場合に生活の安全を保證するところの、かの社會主義の實現に俟つの外はないのである。

然るに既に一度び眞實自由の職業選擇が行はるゝことになれば、各人は始めて、自分に愉快と悅樂とを齎す仕事に從事することが出來て來るので、その結果、勞働は始めて、その本然の性質たる、眞の生活享樂となる。さうなれば、勞働を囘避する心配は無くなり、却つて生產の新しき强き增進を見、勞働の生產力は著しき增加を爲すことになる。從つて人々を强制して勞働に從事せしめる必要は無くなり、人

々は勞働に關して眞の自由を享樂することが出來、かくて『各人はその能力に應じて』といふ根本原則は、『各人はその欲するところのことを爲す』といふ意味に解釋して差支ないことになる。

さて世の中の狀態が斯うなつて來れば、それが卽ち『社會主義の未來國』なのであるが、それは社會主義の反對論者が描いてゐるものと略ぼ正反對のものである。それは『監獄國』でもなければ、『荒凉たる平等化』でもなく、却つて其の逆である。卽ち社會主義の實行によつて十分な基礎が打ち据えられた爲に、從來資本主義的國家の下に於ては經濟上の缺乏のため壓せられ又消されてゐたところの人格が、初めて其の十分なる自由と多樣性とに於て發展し得るのである。

吾々が正當な且つ論理的な結論を引き出す限り、以上述べたるところが、正に科學的社會主義の前提及び要求から出て來るところの結果である。それは、科學的社會主義の有名なる總ての代表者が、常に人格の完全なる且つ自由なる發展を以て其

の最高目標としてゐるのと正に合致してゐる。試みに一二の實例を擧げて見やう。

一八四七年にカール・マルクス及びフリードリヒ　エンゲルスが書いた『共產宣言』(Ausgabe 1906, S. 38,)は、次の文句を以て其の第二節を結んでゐる。

『階級並びに階級の對立を伴うところの、舊來の有產者的社會の代りに、各人の自由なる發展が萬人の自由なる發展に對する條件であるところの、一の共同團體が成り立つ。』

又マルクスはその『資本』(Band I, Kap. 22, 3. Volksausgabe 1914, S. 527) に於て、資本主義は

『只それのみがヨリ高級なる社會狀態——その根本原則は各個人の完全なる且つ自由なる發展に存するところのもの——の土臺を形成し得るところの』

生產力及び生產條件を作り出す、と述べてゐる。

又彼は、一八七五年に、ゴータ綱領を批評した手紙(Neue Zeit 1890/91 Bd I S.

566/67 のうちに、次の如く述べてゐる。

『生産手段の共有を基礎とするところの、組合的の（卽ち社會主義的の）社會の內部に於ては、生産者は彼等の生産物の交換をしない。……』

併し彼は之に續いて『過渡期』の社會、卽ち『資本主義の社會から生れ出た當座に於ける共産主義の社會』從つてそれは、經濟的にも、道德的にも、精神的にも、有らゆる關係に於て、その生れ出た母胎であるところの舊社會の遺風を脫せざる所のものであり、又其處では、各個の生産者は、――その費用を差引いて、――彼が社會に與へしところのものを精確に留保する』が如き社會に就き、若干の說明を加へてゐる。之を基としてマルクスは、凡そ各個人は其の提供した勞働の證明に應じて、一定分量の消費物を受け取る筈になつてゐる、と云ふ思想を展開せしめてゐる。けれども彼は、斯の如き制度は過渡期に於てのみ免れ得ざるものであつて、其處では『平等の權利』なる語は、猶依然として全然古き有産者的意味を有するものだ、

と明かに力說し、又此の『平等の權利』は事實不平等の權利であることを示してゐる。

『或る一人は他の一人に比し、肉體的にも精神的にも勝れてをり、從つて同一の時間にヨリ多くの勞働を供給し、又ヨリ長き時間勞働に堪えることが出來る。……だから此の平等の權利は、……すべての權利と同樣に、……一の不平等の權利である。……更に又、一人の勞働者は結婚するも、他の一人はさうでない。一人の勞働者は他の勞働者よりも多くの子供を有つてゐる。……だから、同一の勞働給付に於て、從つて社會的消費量に對する同一の割前に於て、或る一人は事實上他の一人よりも多くのものを獲得するから、其の一人は他の一人よりも富むことになるのだ。……』

『併しこれらの弊害は、共產主義の社會が長き生みの苦しみの後に漸く生れ出た當座の、共產主義の社會の第一期に於ては、免れ得ざるところである。……』

ところで共産主義が此の過渡期を經て、遂に完成された曉には、それはマルクスによると全く面目を殊にする。

『共産主義の社會のョリ高級の狀態に於ては、……個人の全面的發展と共に生產力が殖え、且つ團體の富源が總て十分に流し出された後には——社會は、初めて狹隘な有產者的の法律的地平線から全く拔け出て、「各人は其の能力に應じて、各人は又その欲望に應じて」と云ふことを、其の旗印とすることが出來る。』

社會主義の未來國とは卽ち是れである。

科學的社會主義序論 終

大正十二年八月廿八日印刷
大正十二年九月一日發行

同人社社會問題叢書第四册

科學的社會主義序論
定價壹圓六拾錢

著作者　水谷長三郎
東京市神田區駿河臺西紅梅町十二番地
發行者　大島秀雄
東京市京橋區南金六町十二番地
印刷者　望月淸矣
東京市京橋區南金六町十二番地
印刷所　英文通信社印刷所

東京市神田區駿河臺西紅梅町十二番地
發行所　同人社書店
振替東京二七〇六五
電話神田四五六〇番

同人社社會問題叢書

第壹册　森戸辰男譯　勞働組合運動の理論と歷史（ベルネル・ゾムバルト著）　定價貳圓　送料拾貳錢

第貳册　大內兵衞譯　婦人解放論（ヂョン・スチュアート・ミル著）　定價貳圓　送料拾貳錢

第參册　水谷長三郎譯　唯物史觀批判（ツガン・バラノウスキー著）　定價壹圓六拾錢　送料拾貳錢

第四册　水谷長三郎譯　科學的社會主義序論（ユリアン・ボルハルト著）　定價壹圓六拾錢　送料拾貳錢

本叢書刊行につき、第壹册は大原社會問題研究所より同叢書第七册として既刊の版權全部を讓受け、又第貳册は我等社より、第三册第四册は大原研究所より刊行の筈なりしを讓受けたもので　大原社會問題研究所、我等社並に譯者諸氏の本叢書に對する御厚意と御援助とを深く感謝致します。

尙第一册御購入の方にて本叢書の製本御希望の方には、小店の負擔を以て製本直しを致して差上げます。

大正十二年八月

同人社書店主

社會思潮十講　大山郁夫、矢口達、今中次麿、北澤新次郎、吉江喬松、片上伸、佐野學、土田杏村、長谷川如是閑中澤辨次郎諸氏執筆（建設者同盟講習錄）　二、三〇　、二

大原社會問題研究所出版書目

一、大林宗嗣	幼兒保護及福利增進運動	(並製)一、五〇	、〇六
二、暉峻義等	乳兒死亡の社會的原因に關する考察	一、八〇	、〇四
三、大林宗嗣	ソーシアル・セッツルメント事業の研究	一、〇〇	、〇四
四、久留間鮫造	消費組合發達史論（ビアトリス・ポツター原著）	(上製)二、〇〇	、一二
五、大林宗嗣	民衆娯樂の實際研究	三、三〇	、一二
六、久留間鮫造 丸岡重堯	本邦消費組合論	二、〇〇	、一二
七、高野岩三郎	産業民主制論（ウエッブ夫妻著）（上卷）	(並)二、五〇	、一八

年鑑

大原社會問題研究所編	日本勞働年鑑	第一輯（九年版）	三、六〇	、一八
同	同	第二輯（十年版）	四、五〇	、一八
同	同	第三輯（十一年版）	三、〇〇	、一八
同	同	第四輯（十二年版）	三、〇〇	、一八

同	日本社會事業年鑑	第一輯(九年版)	一、八〇	、一五
同	同	第二輯(十年版)	二、〇〇	、一五
同	同	第三輯(十一年版)	二、〇〇	、一五
同	同	第四輯(十二年版)	二、五〇	、一五
同	日本社會衛生年鑑	第一輯(九年版)	二、二〇	、一五
同	同	第二輯(十年版)	二、五〇	、一五
同	同	第三輯(十一年版)	四〇〇	、一八

大原社會問題研究所パンフレット

一、大内兵衛著	資本主義國家の一歸着點	、三〇	、〇二
二、高野岩三郎著	現實と理想と空想	、三〇	、〇二
三、北澤新次郎著	I、W、Wの先驅としてのナイツ・オブ・レバー	、三〇	、〇二
四、高田愼吾著	無産兒保護策新傾向(英米露保育施設)	、三〇	、〇二
五、權田保之助著	社會革命と民衆娯樂	、三〇	、〇二
六、細川嘉六著	賃銀制度の展開	、三〇	、〇二
七、森戸辰男著	ロシア大飢饉と救濟運動	、五〇	、〇二
八、大内兵衛著	俸給生活者の沒落	、三〇	、〇二
九、櫛田民藏著	マルクス自由貿易問題	、三〇	、〇二
十、大林宗嗣著	都市社會政策としての公園問題	、三〇	、〇二
二、細川嘉六著	英國に於ける國家内の一國家	、三〇	、〇二
三、久留間鮫造著	資本主義社會に於ける再生産の問題	、三〇	、〇二


LC ACQUISITIONS
0 030 622 288 0


NJS